

320

191



始



1/1005

320
191

新刊
釋才
深
の
見
完

320-191



大鏡所載、天皇、臣下總目錄

王代御系圖略

第五十代

○桓武天皇

五十一 平城天皇

五十二 嵯峨天皇

五十三 淳和天皇

賀陽親王母多治比真宗、參議長野女

仲野親王母藤原河子從四位上大繼女

阿保親王母宮人葛井藤子

五十四 仁明天皇

源朝臣融母大原全子、河原左大臣卜禰ス

五十五 恒貞親王

母正子內親王嵯峨皇女、天長十年一月立太子、承和九年七月廢位

五十八 文德天皇

母藤原順子太政大臣冬嗣女

光孝天皇 母同上

人康親王 母同上

王代記

五十五 文德天皇

五十七 陽成院

五十九 宇多院

六十一 朱雀院

六十三 冷泉院

六十五 花山院

六十七 三條院

五十六 清和天皇

五十八 光孝天皇

六十 醍醐天皇

六十二 村上天皇

六十四 圓融院

六十六 一條院

六十八 後一條院

臣家

冬嗣大臣五條后の父 良房大臣

良相大臣 長良中納言二條后の父

大正 4. 8. 10 内交

| | |
|--|------------------|
| 惟喬親王 母紀靜子正四位下名虎女 | 昭宣 公基經時平大臣 |
| 五十六 清和天皇 母藤原明子太政大臣良房女 | 枇杷左大臣 仲平貞信 公忠平 |
| 五十七 陽成院 母藤原高子贈太政大臣良女 | 清慎 公實賴廉義 公賴忠 |
| 五十九 貞辰親王 母藤原佳珠子太政大臣基經女 | 小一條左大臣 師尹 |
| 字多院 母班子女王仲野親王女 | 九條右大臣 師輔 |
| 六十 醍醐天皇 母藤原胤子贈太政大臣高藤女 | 攝政 謙德 公伊尹忠義 公兼通 |
| 雅明親王 母藤原實子贈太政大臣時平女 | 恒德 公為光仁義 公公季 |
| 均子內親王 母藤原溫子太政大臣基經女 | 攝政大入道 殿兼家 已上九條殿息 |
| 保明親王 母藤原仁善子贈太政大臣時平女、延長 延喜四年三月立太子、延長元年三月二十日薨年三十一 | 中關白內 大 臣道隆 |
| 慶賴 王 母藤原仁善子贈太政大臣時平女、延長 元年四月立太子、同三年六月十九日薨 | 粟田關白右 大 臣道兼 |
| 六十一 朱雀院 母同文獻彥太子 | |
| 昌子內親王 母照子文獻彥太子女 | |
| 六十二 村上天皇 母同文獻彥太子 | |
| 六十三 冷泉院 母藤原安子右大臣師輔女 | |
| 為平親王 母同冷泉院 | |
| 六十四 圓融院 母同上 | |
| 承子親王 母同上 | |

| | |
|------------------------|-------------------------|
| 輔子內親王 母同上 | 太政大臣道長 |
| 資子內親王 母同上 | 已上東三條殿息 |
| 選子內親王 母同上賀茂大齋院 | |
| 六十五 花山院 母藤原懷子太政大臣伊尹女 | |
| 六十七 三條院 母藤原超子太政大臣兼家女 | |
| 小一條院 敦明親王、母藤原城子太政大臣濟時女 | 敦貞親王 母藤原延子右大臣顯光女 |
| 六十六 一條院 母藤原詮子太政大臣兼家女 | 敦元親王 母藤原政子太政大臣道長女 |
| 敦康親王 母藤原定子內大臣道隆女 | 敦儀親王 母同小一條院 |
| 六十八 後一條院 母藤原彰子太政大臣道長女 | 敦平親王 母同上 |
| 二條院 院章子內親王、母藤原威子道長女 | 師明親王 母同上 |
| 馨子內親王 母同上 | 當子內親王 母同上 |
| 六十九 後朱雀院 母同後一條院 | 禊子內親王 母同上 |
| 七十 後冷泉院 母藤原嬉子道長女 | 陽明門院 禎子內親王 母藤原新子太政大臣道長女 |
| 七十一 後三條院 母陽明門院 禎子三條院皇女 | |
| 以上 | |

この書は、世繼といふ翁、雲林院の菩提講にて夏山繁樹といふ翁に、昔より見聞きせし事を語るを、傍へ聞きしたる人の書きたるやうに作りなしあり。物語の體なれども正しき歴史にて、文體も簡潔なり。

作者は誰とも知れず。

大鏡といふ名は、書中繁樹の歌に、「あきらけき鏡にあへば過ぎにしも、今ゆく末の事も見えけり。世繼も又、「すべらきのあともつきかくれなく、新に見ゆるふる鏡かも。」などあり、當時、帝王の御事蹟、大臣の事業等を鏡にかけて見るが如くとの意にて名づけしなるべし。

新釋大鏡

ゆふ風著

いづぞや、雲林院の菩提講に參詣した處が、普通ならず非常に年老い、氣味悪いほどの翁が二人、
と見合つて、
世繼「永年、どうか、昔の人に御眼に懸つて、世間で見たり聞いたりした事や、とりわけ、この唯今の入道殿下の御有様をお咄し申合ひたいものと存じて居た處に、嬉しくも御眼に懸かれました。今こそ安心して彼世へも參られます。思ふ事を言はぬと、ほんに腹が膨れるやうで、さればこそ昔の人は、穴を掘つて言込んで置いたことと存じます。返すく、ようぞお眼に懸れた。それにして、お幾歳におなりなさる。」

繁樹「幾歳といふ事は一向覺えませぬ。但、私は、故の太政大臣殿が、藏人の少將と申された時の小舎人童、大犬丸と申す者で御座りました。貴方はたしか其頃、母后の宮の方のお召使で、高名の大宅の世繼とか申されましたな。すると貴方のお歳は、私よりは、餘程お上で、何でも、私が小童で居た頃、もう、二十五六の男盛りで御出なされた。」
と言ふらしい。

雲林院の菩提講にて夏山繁樹といふ翁に、昔より見聞きせし事を語るを、傍へ聞きしたる人の書きたるやうに作りなしあり。物語の體なれども正しき歴史にて、文體も簡潔なり。

天皇の后班子の
御子仲野親王の
御女なり。

世繼「然様々々。そして、貴方の御名は。」
繁樹「されば、太政大臣殿の處で元服を致した時、『貴様の姓は、』とお尋ねになり、『夏山』とお答へ申上げたのを其儘、繁樹とお命名下されました。」
など言ふのに呆れて了つた。

少し分りさうな人達は、此方を見越したり、傍へ寄つて來たりする中にも二十歳位の若侍らしいのが無上に近く寄つて

侍「いやもう、面白い事と言ふお年寄たちで御座りまするわい。併しどうも私共には眞實の事とは存じられません。」

と言ふと、翁達は、顔を見合せ嘲笑つて居る。
繁樹と名告る方に

侍「貴方は、幾歳ともお覺えがないといふ事、此方のお老人は、御存じて御座りまするか。」
世「勿論、今年で百五十歳になります。されば、繁樹は百四十にはなつて居りませうけれども、極

りを悪がつて申さぬので。私は、水尾の帝が御讓位になつた年の、正月の十五日に生れましたれば、十三代にお遭ひ申して居る。悪くはない年で御座りませうがな。誰殿も眞實とは思召すまい。けれど父が生學生に使はれました爲、下臈でも都育ちの譬へて、自分が生れた時産衣に書いて置きましたのが、今に御座ります。丙申の年。(清和帝の貞觀十八年)

と言ふも、成程と合點かれる。
もう一人の方に、

侍「仍然、貴方のお年が承はりたい。生れなかつた年は御存じて御座りますか。それさへ分つたら直に數へられまするが。」
と言ふらしい。

繁「眞の親の傍にも居ず、十二三まで他人の家に養はれましたれば、確とも教へられませぬ。唯、『私は獨身者で、子を生む事も知らなかつたが、御主人のお使で町へ往つた時、自分でも錢を十貫文持つて居た處、憎げもない兒を抱いた女が、『これを人に遣りたいと存じます。子を十人も産んで、是がその十人めの子で、加之に、五月になぞ生れて困つて居ります。』といふので其の持つて居た錢と取替た時苗字は何と問いたれば、夏山と言つた。』と咄しましたが、十二三歳で太政大臣殿に御奉公に上りました。」

など、言つて居る。

世「扱も扱も良うぞ御眼に懸れた。佛の御利益で御座りませう。永年彼方此方の説教と人が騒ぎ歩いてても、格別參詣も致さなんだを今日に限つて、よくも思立ちました。』とて、

世「其處にお出になるのは、其時分からの御妻女で御座りまするか。」
と問ふらしい。

繁「否。それは、疾うに歿りまして、是は其後連添つた子供(若き故にいふなるべし)で御座りまする。貴方のは如何。」

世「私のは舊來ので、今日も一緒にと支度を致しかけましたが、生憎虐を煩ひまして加之ふるひ日の爲、残念ながら連立ちませんでした。」

五月に産れて
俗言に五月子
は父母を害す
と忌みし事
あるよし
史記に孟嘗君
五月五日に生
れしを其父
之を擧げさせ
母と名ひしを
母しそかに擧
げしなどあり
故事あり

生學生の若き
大學寮にいふ。

などと種々咄合つて、泣く様子なれど、涙は見えぬ。(非常に老いて口のすげみたるさま杯なるべし。)

さて誰も誰も講師を待ち詫びて居る間、其翁たちの言ふには、
世「いや退屈な事、如何てせう、昔咄でもして此座のお人達に、昔はそんな事もあつたかとお知らせ申しては。」

驚一段で御座りませう。先づお咄しなされ。時々然るべきお返事は私も思出して致しませう。」
とさも咄したげに面白さうなので、大勢の中にはよく聴取る者もあるらしけれど、取分け眼立つのは例の上手にはづみをつけては聴いて居る侍である。

世「いや眞に世間は面白いもので、貴方はそれでも少しはお覚えがあらう。昔賢王の御世には、國中に年老つた翁や媼があるかとお探しになり、昔の政治の有様をお問はせになつては、其等の申上げる事を御参酌なされた。して見ると老人は誠に大切なもの、若いお人たち必、馬鹿になされな。」

と黒梯の九本骨に黄の紙を張つた扇で顔を隠しながら氣取つて笑ふ様子が有繋に優しい。

世「さて私が一心に唯今の入道殿下の御有様の世に勝れてお出になる事を、僧俗男女のお集りになつたこの御席で申上げたいと思ひますが、非常に事が多くなつて多勢の帝や后、又大臣公卿の方々の上まで申上げるやうになります。取分け御幸福人の此御方の御様子を申さうと思ふ中に、世間の事が一切出て来るので、承れば法華經一部をお説きになる爲に先づ餘經を説かれた、それが五時經なさうで。それと同じに入道殿下の御榮花を申さうとする中に餘經が説かれます。」

などと大層らしく言ふけれども、何程の事があらうと馬鹿にしたに相違して、恐しいほど立派に咄

法華經 一部八卷あり
五時經 阿含、方
華嚴、般若、法華
等、般若、法華
涅槃ないふ。

し續けた。

世「一體世間の攝政關白とか大臣公卿とか言はれる人たちは、昔から皆この入道殿のやうであつたらうと當世の若い人達は思ひなさらう、が中々さうでない。言つて見ると同じ種一つ血筋であられても、家が別れると其人たちの御性質も又違つて来るので、此世が初まつてから神代七代はさしおき、神武天皇以來今上(後一條)まで御六十八代。一體ならば神武天皇から順々にお咄致すべきであるが、それは餘りに遠過ぎますから近い頃から致しませう。」

文徳天皇と申す帝から當代(後一條)まで十四代、年て申せば其帝が御即位の嘉祥三年庚午から今年(萬壽二年乙丑)まで一百七十六年ほどになりませう。かけまくも畏い帝の御名を申すは誠に御勿體なけれど。」

とて咄し出した。

一、五十五代

文徳天皇と申した帝は、仁明天皇の第一の皇子、御諱は道康、御母は大皇太后宮順子と申上げた。其後は左大臣贈正一位太政大臣冬嗣の御娘で、此帝は天長四年丁未八月御誕生、御聰明でよく人をお用ゐになつた。

承和九年壬戌二月二十六日御元服、同年八月四日東宮に立たれ御年十六、(仁明天皇が從前の東宮を除けてこの帝を承和九年八月四日東宮となされた。前の東宮の御不快さはどれほどと察し申されませう。)

嘉祥三年庚午三月二十一日御即位、御年二十四、御在位九年、天安二年戊寅八月二十七日御他界、

從前の東宮
御兄淳和帝の
御子恒貞な

もあり見ゆ人
うにもあつて
が氣にやると
ぼ入る事とあ
日は一日思ひ
くらす事とあ
の事ありし日
の事ありし日
内大臣魚名公
人、孫、御女公
次、長、御女公
春、(基經)の母乙
小松門の北
親王の御住み
給ひし御所
即位後にも斯
なく申し奉りし
藤壺の上の御
局、藤壺の御
藤壺の女御の
御所、(帝)の
所なりし時に控
禁中の女房御
に佛壇を御黒
戸に佛壇を御
月と佛壇を御
開き佛壇を御
ふと、新に煤
故、黒、戸とい
ふし思ふ

行末遠く仕へ奉らむ。』

一、六十二代

次の帝は村上天皇、御諱成明、醍醐の帝第十四の皇子、御母后は朱雀院と同じである。

此帝は延長四年丙戌六月二日桂芳坊で御誕生、天慶三年庚子二月十五日御元服御年十五、同七年甲辰四月二十二日東宮にお立ちになり、御年十九、同九年丙午四月十三日御即位御年二十一、御在位二十二年、康保四年五月二十五日崩御、御年四十二、陵は村上。

御母后は、延喜三年癸亥御年十九で前坊を生み申され、同二十年庚辰三十九歳で女御の宣旨を蒙りなされ、四十二歳で村上をお生み申なされた。

立后の日は、宮中、前坊の御事を忌んで申出す人もなかつたのに、其方の御乳母の子大輔の君といふのが、斯う詠んで差上げた。

『詫びぬれば今はた物を思へども、

心に似ぬは涙なりけり。(設方ないと諦めて今はもう思ふまいと思ひながら其決心に似ず溢れるは涙である。)

又御法事がすんで一同退出の日。

『今はとてみや(深山(宮))まを出づる時鳥、

いづれの里に泣かむとすらむ。』

五月の事であつた、實にどんな心地であつたらうと思はれます。時々後世に傳はるほどの事を言ひ置く人はまことに偉い。

前の東宮に後れて限りなく嘆きになる同じ年に、朱雀院御誕生、御自身立后など、御嘆き御喜

び種々交つた。此方を世間で太后と申し上げました。

一、六十三代

次の帝は冷泉院天皇、御諱憲平、村上天皇第二の皇子、御母は皇后宮安子、右大臣師輔公第一の御娘である。

此帝は、天曆四年庚戌五月二十四日に、在衡の左大臣が未だ從五位下で備前介と申した頃の五條の家で御誕生になり、同年七月二十三日東宮に立たれ、應和三年癸亥二月二十八日御元服御年十四、康保四年丁卯五月二十五日御即位、御年十八、安和二年八月十三日御讓位、御年二十二、御在位二年、寛弘八年辛亥十月二十四日御年六十二で崩御、三條院御即位の年とて、其の爲大嘗會の延びたのを折悪い事に人が申した。

一、六十四代

次の帝圓融院天皇と申し、御諱守平、村上帝第五の皇子、御母は冷泉院と同じ、天徳三年己未三月二日御誕生。

此帝が東宮にお立ちの時は非常に聴にくい事が御座りました。誰殿も御存じの事なり。長くなるから止めませう。

安和二年己未八月十三日御即位、御年十一、天祿三年壬申正月三日御元服、御年十四、御在位十五年、御病氣により御出家、法名は金剛法、正暦二年二月十二日崩御、御年三十三。

母子が御年二十三で冷泉院を生み申され、引續き又此帝をお生み申されたのは、非常な御高運である。

は瀧口の月のあ
西とあればあ
たらず。
亭子院
七條坊門の北
仲野親王
桓武帝の皇子
なり。
御椅子の間に
清涼殿の殿上
の奥の間に壁
に添へて主上
御腰掛の椅子
あるをいふ。
勾欄
紫欄木にてつ
くれり。
臨時祭
定例の祭は毎
年四月中西
の日のなれど
この西の日に
は例に行
賀茂の御社
神名に山城
國愛宕郡賀
別雷神社と
る是なり。
東遊の類六
神樂の歌
人指衣にて
ふのよし。
故郷の旅寝
は夢に見えつ
は恨みやすら

なりけるよ
し、三條院は
冷泉の御子な
れ、冷泉の御
狂疾も三條の
眼病も皆元方
民部卿の方へ
崇りといへ

太秦寺なり東
廣末にて峰
寺の末に建
同河勝のい
立なれば太
寺ともいふ

格入井とも
ふ、天正の
前佛の正面
まてより東
井を組入る
の設けなせ
なりといふ

齋宮御即位
新帝必内親
か女王の未
嫁し給はざ
を伊勢太神
のいづきま
りに選任さ

齋宮は三條
第一皇女當
内親王御母
は藤原城子
時女なり
上東門院な
母は従一位
倫子とて一
左大臣雅信

御位を退かれた事も、中堂にお上りにならうのお志からであつた。併しお上りになつても、少しも驗がなかつたのが残念である。御全快とまではゆかずとも、少しの驗はありさうな事であつた。て、いよく山の天狗がし奉るのだなど、種々お噂を申し上げたらしい。太秦にもお籠りになりたれば、其爲、本尊の御前から東の庇に組入をせられたのよし。御烏帽子をなされたお顔もちは、大入道殿(兼家)に似て居られた。御性質が非常にお優しく大やうに在したれば、誰でも大層お慕ひ申し上げたらしい。齋宮の御下向に別れの御櫛をおさしになつた時、双方もお振向きにならない制規であるのに、どうなされてか、此院は振回り御覽になつたれば、「不吉な事とは拜見した。」と入道殿が仰せなされた。

一、六十八代

次の帝は即當代、御緯敦成、一條院第二の皇子御母は今の入道殿下第一の御女で、皇太后宮彰子と申上げる。當世知らぬ人はなけれど、先づ天子の御順序通り申上げるので。

寛弘五年戊申九月十一日土御門殿で御誕生、同八年辛亥六月十三日東宮に立たれ、御歳四、長和五年丙辰正月二十九日御即位、御歳九、寛仁二年戊午正月三日御元服、御歳十一。今年は萬壽二年乙丑なれば、御即位後十年にもなりませうか、同じ帝王の中にも、御後見が多く頼もしい御有様で在します。

御祖父では、唯今の入道殿下、御出家こそなされたれ、一切衆生を一子の如くお育みになる。第一の御をぢでは唯今の關白左大臣、次の御をぢは内大臣で左大將をお兼ねになり、次々の御をぢ

たちには、大納言東宮大夫、中宮權大夫、中納言など種々て在す。

昔から、天子の御位は偉いものながら、臣下が大勢してお傾け申す時は傾くものである。されば一天下中御自身の御後見といふのは、誠に頼もしい御事で、昔、一條院が御病氣の時仰せられたには、「眞實ならば順序通りに一の皇子(皇后定子の出)を東宮とすべきであるが、後見する人がないから、據くこの宮を立て申す。」と仰せて立てられたのがこの當代で、誠に然るべき御事である。

一體、帝の御順序は申さずとも事なれど、入道殿下の御榮花も何に因てお開けになつた事ぞと思へば、先づ帝(后)の御有様を申上げるので、植木は最初根を大きに養へばこそ、枝葉が繁つて實を結ぶのである。して見れば、先づ帝の御順序をお咄して、次に大臣の御次第を明にしやうと存じますので。」

と言へば、大犬丸男が、

繁いやもう誠に結構な事で御座ります。澤山の天子の御有様が鏡を懸けたやうに判然と致しました上に、況て大臣などの御事は永年殆て眞闇であつた處へ、急に朝日がきらめき出たやうで、又、私共の女たちが、櫛匣の鏡の影も見えないほど磨く術も知らず、狭み放しにして置いたのばかり見馴れたのが、明く磨いた鏡に對つたやうに且は自分の容貌耻かしく、且は又非常に珍しい氣も致します。あゝどうも誠に面白い。とんと今日一日に十年も二十年も壽命が延びたやうに存じられます。」

と非常に喜ぶのを見聞く人達は、馬鹿らしくも思ひながら、言續ける事は恐ろしいほどなので、物

目録

臣家

冬嗣大臣五條后の父

良房大臣

良相大納言
長良中納言
二條后の父

昭宣公基經

時平大臣基經の太郎

融公
嵯峨天皇
一皇太子
二位河原
臣なり

融の大臣が、御身柄も貴く、御即位の望みが深く、「近い皇胤を尋ねれば、自分等も居りするわ。」と申出されたのを、此の大臣が、「皇胤とは申せ、姓を賜つて臣下となつた方が即位の例は御座りますまい。」と申されたのが事實なれば、小松の帝の御即位となつた。帝の御子孫も永く傳はり、大臣の子孫も連綿と御後見申されるのは、然るべく御約束のあつた事かと思はれます。
薨去になり深草の山に葬め申した夜、勝延僧都が、
「空蟬は骸を見つゝも慰めつ、
深草の山煙だに立て。」

又、上野の峯雄といつた人が、
「深草の野への櫻し心あらば、

今年ばかりは墨染に咲け。」(墨染は喪服の鈍色によそへていへり)

何れも古今に入つて居ります。

御家は堀川院と閑院とにあつたが、堀川院をば然るべき儀式の時だけお用ひになり、閑院の方は御物忌などの時の料となされてお客などは入れず、昵近のお供だけで時々お出になるらう御座りました。

一體堀川院は地形が大層宜しかつた。

大饗の時などのお客方の御車の置所と申すものが、先づ、お正客の車を川から東の方に建て、牛は御橋の開き柱に繋いで、他の上達部の車は、川から西の方にたてたのがよい御考へといふ評判で、さてお正客のお車の眼立つのは奚ばかりかを見ると、彼の高陽院には叶ひませぬ。又、方四

高陽院
桓武の皇子
陽宮の御家
實
橋の兩端に
ある擬寶珠の
柱をいふ。

御伯父
陽成院の御
后高成は基
陽高成の御
御高成の御
御高成の御

忠良の式部卿
親王の式部卿
皇太子

彈正正尹とて
名正法司刑憲
儀俗を司り、
百官の罪惡を
詰りしを枉を
官に經ずし太
直に奏聞する
官あり、四等
勳官あり、疏
困つた事を
言効を奏し
てなり。

町で、四面とも往來になつて居る家は、京中で冷泉院ばかりと存じた處が、この堀川院が出来ま

した。末世ほど立派なものが澤山に出て参ります。

此昭宣公は、陽成天皇の御伯父で、宇多帝の御世に准三后の御位になりて年官年爵を得られ朱雀

院并に村上の御祖父なれば、世間から尊敬される事は申すまでもない。

御男子が四人、太郎右大臣時平、次郎は左大臣仲平、四郎太政大臣忠平といふ時、繁樹の様子が

變つて、先づ後の人の顔をすつと見渡し、

繁「それこそは此の老人の大切な御主人貞信公。」

とて扇をつかふ顔付が一段とおもしろい。

世三郎に當られた方は、從三位して宮内卿兼平の君として亡くなられた。御母は忠良の式部卿、親王

の御女で、大層御身分がよい。この三人の大臣達を、世間て三平と申した。

一、左大臣時平

此大臣は、基經公の御太郎、御母は四品彈正尹人康親王(仁明の皇子)の御女である。

醍醐帝の御時、此方が左大臣で年がまだ弱冠、菅原の大臣は右大臣で在した。

帝は、御年が至つても若かつたれば、左右大臣に政治を行ふべく宣旨を下された處、當時、左

大臣は二十八九歳、右大臣は五十七八歳程で御一緒に政治をなされると、右大臣殿は學問も人に

勝れ、御性質も格別御賢明であつたに引がへ、左大臣殿は年も弱く學問もずつとお劣りになり

たれば、自然右大臣の方に御寵眷が傾いたのを、左大臣殿は御不平に思はれた中、然るべき御時

節でもあらうか、右大臣の爲に困つた事が出て来て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥としてお

管合の左邊

流されになつた。

お子は多勢あられて、姫君達は聳取りし、御子息等はそれ／＼位などあられたのを、一人残らず彼方此方にお流されになつてお痛はしい上に、御幼稚の姫君や御子息達が、常の通りおあとをお慕ひになるので、小さい者はよからうと朝廷でもお許しになりたれば、引連れてお下りになつた。帝のお怒りが極めて烈しいため、大きいお子達は同じ方角にすら流されなかつた。種々悲く思はれつゝ、お庭の梅の花を御覽じて、

『東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、

あるじなしとて春な忘れそ。』

又亭子の帝に

『流れゆくわれはみくづとなりぬとも、

君しがらみとなりて留めよ』

冤罪によりかうお勘當にあはれたを悲みの餘り、直ぐ山崎で御出家なされた。其當時非常にお氣毒な事ばかりであつた。

都遠くなるにつけ、染々心細く思はれて、

『君が住む宿の梢をゆく／＼も、

かくるゝまでにかへり見しはや。』(はやは嘆息の辭
あゝといふ如し)

又播磨の國明石の驛といふ處にお宿を定められた時、驛の長が非常にお氣毒がる様子を御覽じて、

『驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。』

さて筑紫にお着きになり、物悲しくお心細い夕暮、遠くの方に處々煙の立つを御覽じて、

『夕されば野にも山にも立つ煙、

なげきよりこそ燃えまさりけれ。』(夕方になれば野にも山にも立つ煙、なげきといふ
ふ木から餘計に燃えまさるやうに思はるゝ。)

又雲の浮いて漂ふを御覽しても、

『山わかれ飛びゆく雲の歸りくる、

かげ見る時ぞなほ頼まるゝ。』(山わかれば山
を別れてなり)

いつかはと行末をお頼みになつたらし。

月の明るい夜、

『海ならず湛へる水の底までも、

清き心は月を照さむ。』(海ならぬ我身も底の心の清き
は月が照覽あるべしとなり。)

これはとりわけ上手にお詠みになつてある。全く月日ばかりは照してくれやうとお考へになつたて御座りませう。

など、斯やうな詩や歌の方の事までよく覺えて、すら／＼と立派に咄すので、一座眼を瞪つて呆れながら感心して居る。

身柄のある人達も段々傍へ寄つて、傍眼もふらず聽いて居るので、彌長く糸を繰出すやうに咄し續ける様が誠に珍い。繁樹は涙を拭きながら興がつて居る。

世に筑紫でお住居の御門は閉め切つて置かれた。大貳の官宅は離れて居るけれども、樓の上の瓦

などが見るともなしに眼に入る上に、直ぐ近くにある観音寺の鐘の聲をお聞きになつて、
 「都府樓櫓看瓦色、観音寺只聽鐘聲。」
 これは白居易の「遺愛寺鐘歌」枕聽、香爐峯雪撥籠看。」の詩よりも上手な位であると、昔の博士達
 は申しました。

又その筑紫で、九月十日菊の花を御覽じて、去年の其夜、内裏、菊の御宴の時、此大臣のお作りになつた詩を帝が非常に御感賞あつて賜つた御衣を御覽になり當時を思出されて、

『去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸。』

恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香。」

此詩が又大層お立派といふ評判であつた。

かういふ事は散々に傳はつて居るのではなく、彼地でお作りのものを一卷に集め、後集と名づけられたり、又時々歌を書き置かれたのが、自然流布したのである。

若い頃、此事が非常に氣の毒にお痛はしかつた餘り、大學の衆で、世間からさう相手にされぬ人と近しくなり、重寶さうな食物を入れた袋や破子のやうなものをこしらへて持參しては、教へて貰ひましたれど、老耄して悉皆忘れて了ひ、是等はほんの少しばかり思出して申上りましたので。」

と言ふ。聽いて居る人たちは、

「成程、随分お物好の事かな。當世そんな横氣のよいお人はとても御座りませぬ。」
 と感じ合つて居る。

又、雨の降る日、じつとお眠めなされて、

「あめの下乾ける間のなければや、

着てし濡衣干るよしもなき。」

間もなく彼地でお薨去になり、一夜の中に此の北野に澤山の松をお生しになつてお住みつきなされたのを、唯今北野の権現と申して、朝廷から、別當や所司などお置きになり、非常にお立派である。

内裏が幾度か焼けては御造營になりましたが、圓融院の御時大工達が天井板を立派に鉋をかけて退出し、翌朝見ると、昨日の板に、煤けたやうな所がある。端に上つて見ると、夜の中に蟲が食べたので辿つて讀まれるには、

「作るとも又も焼けなむ菅原や、

胸のいたまの合はぬ限りは。」(胸の痛きと板間)

それも、この北野が遊ばしたのだと人が申しました。

延喜三年癸亥二月廿五日薨去、御年五十九。其後七年ばかりして、左大臣時平公は、延喜九年己巳四月四日薨去、御歳三十九。大臣の位で十一年、本院の大臣と申した。

此方の御女の女御もおかくれになり、御孫東宮も、一男、八條の大將保忠卿もおかくれになつて了つた。

此大將は、八條にお住居の事として参内の途が非常に遠い處、どういふお心算か、冬は餅の大きな切を一つと小さいのを一つづゝ用意なされ、大きなのを中から割つて御車副の人に投げてお與へになる、餘りな御用心とて、其時代にも人が妙に思つたればこそ、斯様に傳はつて居るので御座

大宰府に大
 貳、少貳と
 貳、實務は
 貳以下に
 貳、九國
 今、九州
 壹、對馬
 所管する
 役をとな

後集、左
 遷前の集
 なるべし。

破子なる
 破る器を
 入る器を
 半割せる
 のよし。

内裏焼亡
 村上天徳
 融院の御
 至るまで
 年間に四
 の出火あ
 りし回数
 をいふ。
 女御彦太
 子。善子の
 女御仁善
 子。善子の
 御孫文獻
 彦太。頼太
 王子初子
 三歳。頼太
 立太子五
 歳。薨去。
 八條大將
 時平公の
 薨去。四十六歳

くびら大將
藥師經に爾時
衆中十二藥
叉大將俱在
毗羅大將所
會坐所謂宮
々々

博雅三位
醍醐の御孫。

りませう。
此方である、御病氣の爲種々の御祈禱をなされ、藥師經の讀經を枕許ておさせになつた折、所謂く
びら大將と聲を張上げたのを、自分を繕ると讀んだとお聞違へになつた臆病に、其儘絶息なさ
れた。

經文にあるとは言へ、重い病氣に惱む人に、成程妙な處を高聲で讀んだもので、因縁でもあらう
けれども、場合を辨へてすきて御座ります。其弟の、敦忠の中納言もおかくれになつた。

和歌の名人で糸竹の道にも勝れてお出になりました。薨去の後御遊宴などある時に、博雅三位が差
支へて參内されぬと、今日の御遊宴は御中止といふ位盛んにもはやされるのを見て、昔の人た
ちは、「末世ほど情ないものはない、敦忠の中納言のお出になつた頃は、斯ういふ折に博雅三位位
を、帝は更なり余の人も大切には思はなんだものを。」と慨き申した。

保明先坊に御息所の參られたのは、本院の御女とも三四人で、本院のはおかくれになり、中將の
御息所と申したのは、後には重明式部卿親王の北方、齋宮女御の御母で、それもおかくれになつた。
もう一人は、非常にお優しく、先坊を戀ひ悲しがる大輔の乳母が、夢てお見上げ申したとお聞
きになり、

「時の間も慰みつらむ君はさは、

夢にだに見ぬ我ぞ悲しき。(君はさは、あなた
はさらばなり。)

大輔の御返事、

「戀しさは慰むべくもあらざりき、

夢の中にも夢と見しかば。」

又、今一人の御息所は玄上宰相の御女で、後朝のお使を敦忠中納言が少將でなされた處が、薨去の
後此中納言におあひになつた。限りなく喜びになりながら、どう御覽になつてか、文範の民部
卿が、播摩守て殿の家司で居なされたのを、「自分は壽命の短い血統である、其中屹度死にませう、
そしたらあなたは、あの文範におあひにならう。」と仰せになつた。「何しに左様な。」とお返事なさ
れたれど、「空を飛んでも見て居ります、屹度さうなされる。」と申されましたが、全く其通りに
なつてお出になる。

御子息達の中では、大納言源昇卿の御女のお腹の、顯忠の大臣だけが、右大臣まで御昇進、六年
其位にお出になりたれど、祟りをお恐れになつてか、家の中でも大臣の格式をお取りにならず、
御外出にもよくくの時の外は御前驅なく、たまにおつけになつても、至つて小聲で拂はせ、
御車副も四人はお番はせにならなんだ。

又半挿や盥てお手を濯がれず、寢殿の日藏の間に柵をして、桶に小さい杓をつけてお置きになり、
仕丁が毎朝湯を入れると、人にもかけさせず御自身お洗ひになつた。

召上りものも、ちゃんとした御器にはお盛らせにならず、たい、御土器で、臺などもなく盆など
に載せ並べて召された。かやうに凡てを非常に質素になされたれど、儀式の時の坐席と御判所と
だけは大臣とお見えになつた。

それ故か、此大臣だけが御一族の中で六十餘まで御存命であつた。

普通の大臣の家よりは、四分一の家で大襲されたお入て富小路大臣と申しました。

御判所
太政官廳陣ノ
座など大座
公卿列坐して
諸事をいふ。

半挿
これに入れ置
く水をたらひ
なり。洗ひ
日がおほひ、日
よけに同じ。

顯忠の大臣
富小路殿とい
へり。

四人番はせ
左右に四人づ
つ八人なり。

外の君達は皆三十いくつかて、四十歳は越えになられなんだ。唯事ではない、北野のお恨みて御座りませう。

此大臣に重輔左衛門督といふお子があつて、今の三井寺の別當心譽僧都、山階寺の權別當扶公僧都などは其お子である。

敦忠中納言の御男子は御多勢の中に、兵衛佐某の君とか申したのが出家なされ、其僧のお子が岩倉の文慶僧都。

又御女は、枇杷大納言の北の方であつたが、淺ましい讒言などお構へになつた罪で、此大臣の御子孫は絶えて了つた。

小部殿上の間にありの衝き上げ戸

職事藏人所にて諸職を奉行する蔵人の蔵人五

攝政關白をいふ大臣に止まされど、執政さまは宣へられたるは斯く

枇杷大納言源延光の御子

併し、政事向のお腕は中々勝れて、延喜が世間の格式を種々お定めになつたれど、驕奢を鎮める事には中々お骨が折れた時、此方が、制限以上の御装束の格別立派なので参内なされ、殿上にお出になつたのを、帝が小部から御覽になり、非常に御機嫌を損じて職事をお召しになり、「世間の驕りの制を厳しくしたのに、左大臣が一人の人は申せ、美麗殊の外で参つたは不都合である。疾く退出するやうに。」と仰せられたれば、職事は當惑ながら怖る怖る参つて、わなしく其由を申上げると、非常に驚き畏りなされて、御隨身の前退ふ聲もお止めになり急ぎ退出なされたので御前驅たちも不思議に思つた。

さて、本院の御門を一月ほど閉めさせて、簾の外にも出られず、人がお訪ねしても、重いお勘當を蒙りましたればとてお會ひにならなんだ爲、世間の驕奢が辛と止みました。

内々承る所、さうでもしたらと、帝と御相談づくてなされたとの御事であつた。

此左大臣は、極めて笑ひ上戸で、お笑ひ出しになるとんと正體なく夢中に止度がなかつた。

北野（道真公）と政治をお執りになる頃、無理を申されたれども、有繫に上席の方が熱心に申される事とて、「あの大臣の爲さる事なれば、不都合とは思へど致し方ない。」と嘆息し居られるのを何とかいふ史が、「御心配なされますな、私が屹度おやめさせ申ませう。」と申上げる。「飛んでもない、どうして。」と仰せになるのを、「まあ御覽なされ。」とて、左大臣が着席して厳しく評議の最中、其史が、文挾に文を挿んで、しかつめらしい身振で此大臣に差上げやうとする途端、恐ろしい音で放屁した。大臣は文も取れないほどふる／＼と戦へてお出になつたが、堪へ切れずやがて笑ひ出して、「今日は據ない、右の大臣にお任せ申す。」とそれもよくは仰せきれず退出なされたれば、辛と菅原の大臣のお考へ通りに行はれました。

併し、又非常に剛毅な方で、北野が神となられた後、非常な大雷がなりひらめき清涼殿に落ちさうに見えた時、此大臣が太刀を抜きかけて、「生きても我が次にお出になつた。神とおなりにならうとも私には御遠慮なされ。」と屹とお睨みになつたれば、一旦は鎮まられたとの事、併し、それは大臣がえらいのではなく、御威光際限なく在します天子の任せられた方なれば、それに對して理非をお示しになつたので御座りませう。

目 錄

枇杷左大臣 仲平、基經、二郎

貞 信 公 忠平、基經、四郎

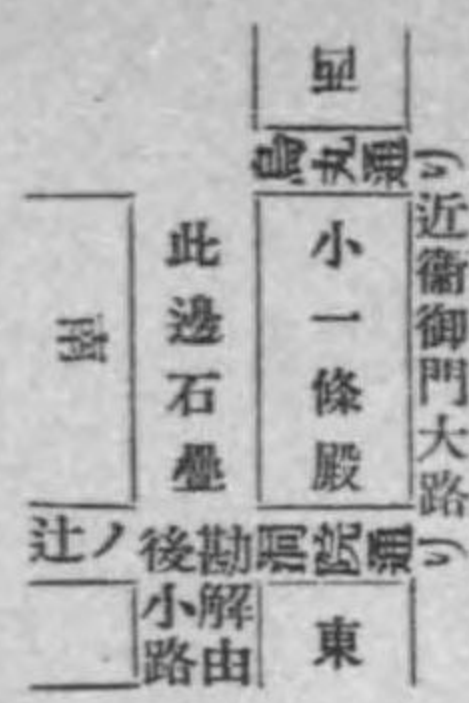
清 慎 公 實賴

廉 義 公 賴忠

小一條左大臣 師尹

花薄を女にた
東とて人に約
きしなりを嘆

任母大の饗
しは例年にて
先輩より順す
のれに並び居
例の横座にば
御息所
字多帝に召さ
りみ奉りしに
りみ奉りしに



公卿で四十二年、大臣の位で三十六年、世をお治めになる事二十年、御諱は貞信公、小一條の大臣と申し、朱雀院並に村上の御をぢであられる。

此大臣は、御子が五人、其頃御自身は太政大臣、御太郎は左大臣實頼公、之を小野宮殿と申し、次郎右大臣師輔公、之を九條殿と申し、四郎大納言師氏、五郎左大臣師尹公で、小一條殿と申し、四人の御子たちが左右大臣大納言でも並びになつて居たのは、非常な御榮花で、女君お一人は、先坊の御息所で在した。(中將の御息所)

此三人の大臣達が絶えず御通行の爲に、小一條の南、勘解由小路には、石疊をされたのが今に御座ります。宗像明神が鎮座ある爲、洞院後の辻からお下りになるのに、雨の降る時の爲にといふ事で、大抵其一町四方は人が通らなかつた。今は下賤の者まで馬や車のまゝみしと歩きま

する。昔を思ふと誠に勿體なくて、私などは今でも餘程の時の外は通りませぬ。今日も腰の痛さに據く通りましたれど、石疊だけはやはり避けました。其の爲南の方の甚い泥濘へ踏込んで、汚いものもこんなにしてしましました。』

とて、袴の裾など引出して見せる。

世「先祖の遺されたものは何も大切なれど、小一條ばかりは不要である。人は子を産んだり死ぬ時の爲にこそ家も欲しいのに、さういふ時は外へ引越す様な處は詮ない。又一體始終氣がつまつて恐ろしい。」と入道殿は仰せられるが、御道理である。此貞信公には、宗像明神がお眼覺の時には御詫宣なされた。『我よりは御位の高いのが辛い。』とありたので、『誠に不都合で御座りました。』とて、奏して、神の御位をお上げになりました。

南殿紫宸殿なり正
座に天皇の玉
座へ御帳臺あり

後撰
村上天の御代
に選ませられ
し歌集なり

此方はいつであつたか、何でも延喜か朱雀院かの御時代に、宣旨を承はつて行ひに陣座の方にお出になる途で、南殿の御帳台の後ろをお通りになると、何か寄つて来て御太刀の石づきを捉へた。

お探りになると、毛がむくくと生へて、長い爪が刀の刃のやうである。鬼なのだと非常にお恐れになりたれど、憶したと見せまいと力んで、『天子の敕定を承つて行ひに参る人を捉へるのは何者か、放さずば爲悪からうぞ。』と御太刀を引抜き手をお捉へになりたれば慌て、引放して丑寅の隅の方へ逃げ出した。大方夜の出来事で御座りませう。

他の方々の事よりも、此御方の事を申すのは畏れ多く勿體なくて。と聲が變つて鼻を度々かむらしい。

世「どういふ事でか七月でお生れになつたと申傳へた。天曆三年八月十四日薨去御年七十、正一位をお贈られになりました。

一、太政大臣實頼

此方は忠平公の一男、御母は寛平法皇の御女、大臣の位で二十七年、天下執行攝政關白なされたのが二十年ほど、小野宮と申ました。天祿元年五月十八日薨去、御年七十一御諱清慎公。

和歌もお上手で、後撰にも澤山入つてお出になる。一體何事にも有識で、御性質の美さは人の手本にお引かれになる程で、小野宮の南表には冠なしてはお出になりませんでした。其理由は、稻荷の杉が露はによく見えるから明神が御覧になるやうで、失禮な恰好では恐れ多いとて、非常に御謹慎なされ、どうかして萬一お忘れになつた時は、慌て、お袖を被られた。

此大臣の御女子は女御でおかくれになつた。村上の御時であつたか、たしかには覺えませぬ。男君は、時平大臣の御女の御腹に、敦敏の少將とてあられたが、父大臣より先にお薨れになつた。で非常に御愁傷の際、東の方から、それとも知らず馬をさし上げたれば、大臣は、

「まだ知らぬ人もありけり東路に、

われも往きてぞ住むべかりける」

誠にお痛はしい事で御座りました。

と眼を拭いて居る。

此大臣の御童名は牛飼と申したれば、其御一族では牛飼を牛付と申された。

其敦敏の少將の御子の佐理、大貳は、手かきの名人で、大貳の任期満ち歸洛の時、伊豫の國へ着く手前の港で、天氣が非常に荒れ浪が高く恐しい風が吹いたりするので、少し靜まるを待つてさて出かけやうとなさると、又暴れ出し、幾日も幾日も同じやうなを、不思議の餘りお占はせになる

と、神の御祟りとばかり申す。さやうな覺えもない、どういふ祟りてあらうと御心配ある夜の夢に、非常に氣高い様子の男が見えて、

「かやうに幾日も天氣の悪いのは、私が致すので御座ります。其理由は、何處の社にも額がかゝつて居りますのに、私の處にだけ御座りませぬ。さりとして、よい加減の手のは懸けたくなさに、斯やうな時を外さず願ひたくてお留め申しました」

と申す。

「誰か。」とお問ひになると、

「この三島に居ります翁で。」

と申した。夢の中にも非常に恐入りなされたと見えて、お眼覺になつては猶の事、早速伊豫へお出になると、引替へうら／＼とよく晴れ、其方への追風が吹いて、飛ぶやうにお着きになりました。

幾度も浴し、非常に潔齋し裝束なされ、早速神前でお書きになり、社司を召出して、法の如く懸けさせお歸りになると、今度は少しの障りもなく、お供の船まで至つて無事に歸洛なされた。自身の爲さる事を、人間が、賞めるだけでも興ある事であるのに、況て神からさほどに御所望のあつたのは、どんなにお得意で御座りましたらう。又一體、此事からして日本第一の能書の評判をお取りになつた。

六波羅密寺の額も、此大貳がお書きになつたので、されば、彼の三島明神の社の額と此寺のとは同じお手で御座ります。

御性質は少しづるくて、緩怠とても申すやうであつた。

故中關白殿が、東三條殿を御造營になり、お障子に歌繪などお書かせの時、色紙形をこの大貳に命ぜられた。餘り人の立ちまぬ中に參つて書かれたら宜かりさうな事を、關白殿がお出になつて上達部殿上人など其他も大勢お集りになり、日が高くなる頃まで待たれて辛との事お出になつた爲、少し折悪く思はれながら書いて退出なさうとすると、祿に女の裝束を出され、迷惑ながら、捨てもならず被いて大勢の中を分けてお出になつた。

それも懈怠のお失策で、閑かな朝の間に疾く往つてお書きになりたらば、彼様な事もあるまいに

六波羅密寺の額に
あり六波羅の東に
加茂川あり
地名は六波羅の
のありしあふた
りなればいふとぞ

と、見る人も思ひ、自身も後悔なされた。
又一方には、唯書道だけの賤い者にならばこそあれ、直に祿などお被けにならずとも、殿をも
誹り申す人が多かつた。

其大貳の御娘で、從兄の懷平右衛門督の北方で居られたのは、經任の母上で、父御に劣らず女の
手かきであられた。

又大貳の御妹は、法住寺（名不詳）大臣の北方で、其御腹の御娘は、花山院の御時の弘徽殿（傳子）の女御。今一人
は入道中納言の北方で、御男子は今の中宮大夫齊信（たけのぶ）卿である。

小野宮（實領）大臣の三郎、敦敏少將と御同腹では、右衛門督までなられた齊敏（たけとし）といふ方。
その御男子は、播磨守尹文（これぶか）の娘の腹でも三人あつた。

太郎は高遠、大貳で薨去、二郎は懷平、中納言右衛門督までおなりになり、（其御男子が今の右
兵衛督經通、）三郎は、侍從宰相資平、今の皇太后の權（たけ）大夫であられる。其の齊敏の君の御男子
を、御祖父小野宮（實領）大臣がお子になされ、實資と命けて、非常の御鍾愛である。

即御自身の御名の實の字で、などいふも、餘り物識ぶつて居る。

世童名は大學丸、その方が今の小野宮の右大臣と申て、非常にお立派でお出になる。

お子のないのを嘆きになり、御娚の資平宰相をお養ひになつたが、後に、禁中の女房を寵愛
してお儲けの御男子は、法師で、内供良圓の君。

又女房をお召仕になりお生まれになつた女君を、かぐや姫と申した。（この女房は頼定宰相の乳
母の子である。）

北方は、爲平親王の御女で、花山院の女御であられたのが、院御出家の後お出になつたのであ
る。

そのかぐや姫といふ方は、千日の講を行つたりなされたが、資家中納言の北方の母、兼頼中納
言の北方であかくれになつた。

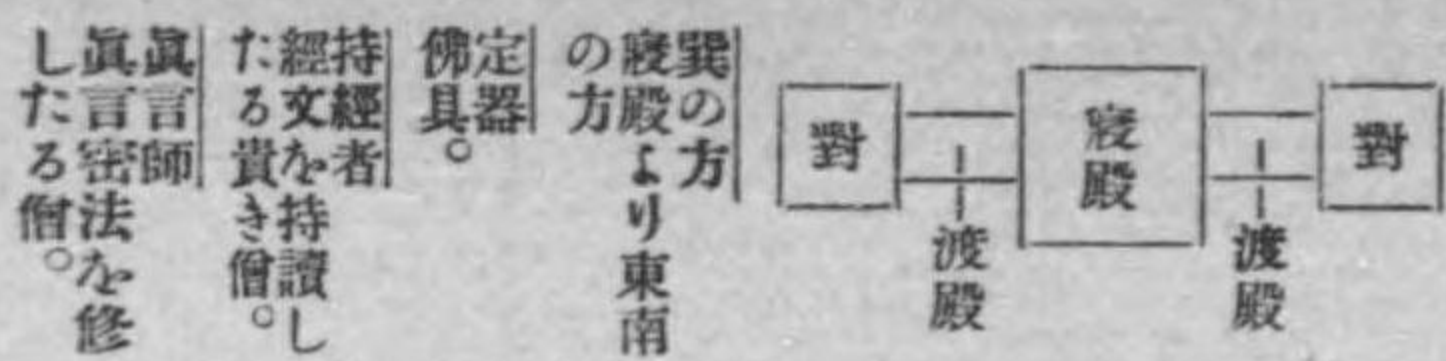
一體に子少なの御一族故か、此方も中宮權大夫の北方も繼子をお養ひになつた。

其姫君を、小野宮の寢殿の南面に帳床を立て、非常に大切にお養ひになつたので、どれ程の方が
御聲になられるであらうと床しかつた。

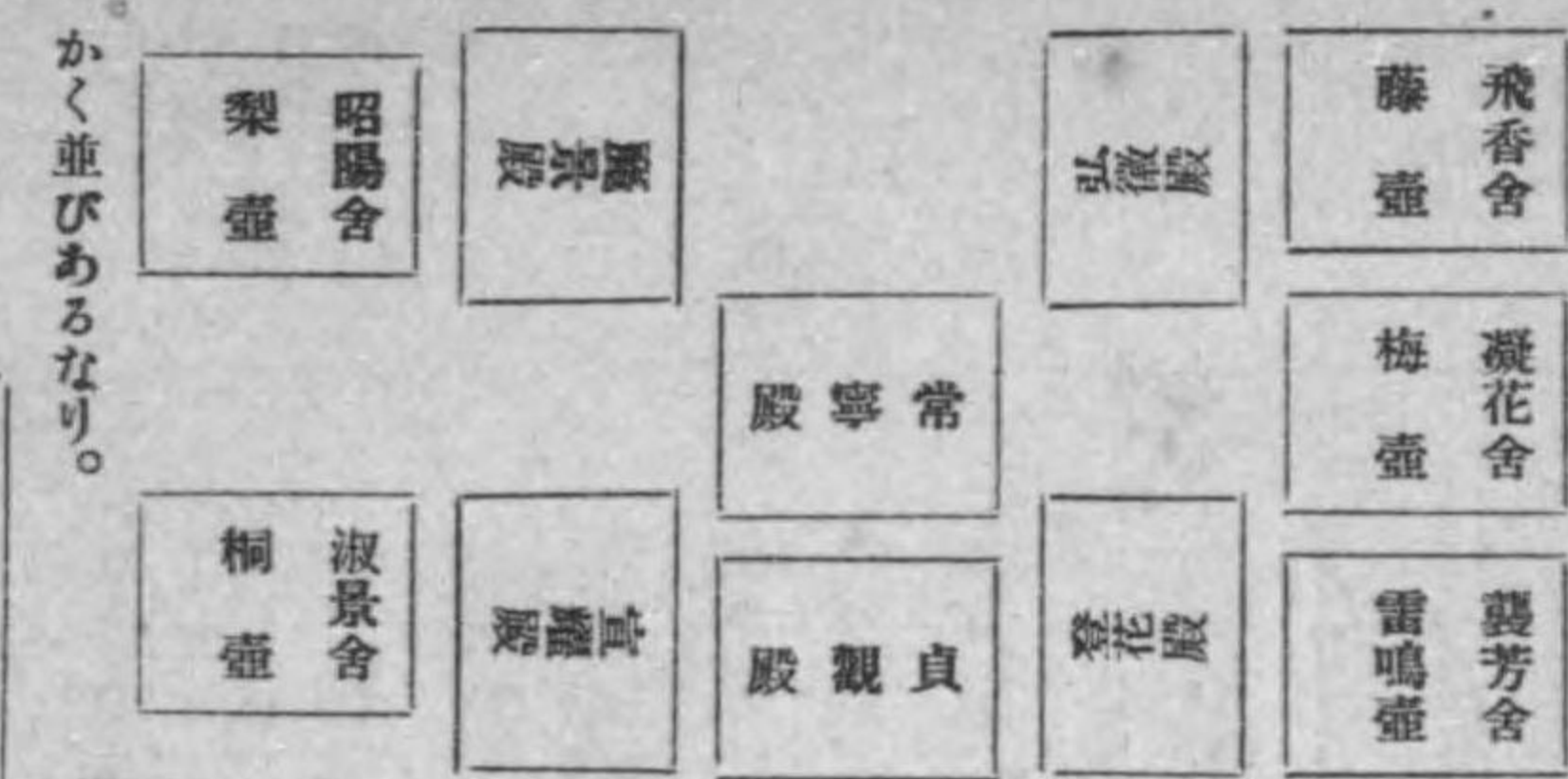
非常に子煩悩な方とて、舊の小野宮の澤山の寶物や庄園は、残らず此姫君の所有となされ、御普
請が又非常にお立派で、對、寢殿、渡殿は勿論、巽の方に三間四面の御堂を建て、廻廊は總て供
僧の房となされた。湯屋には大きな鼎を二つ造りつけて、煙の立たぬ時なく、御堂には金色の佛
が大勢並べられて、供米三十石、定器を特に具へつけになつてお供物の絶間がない。

御堂への途は、お庭の池から向うを廣々と野に造つて、四季の花紅葉を植ゑ、船で池から漕いで
も往かれるやうにしてあり、住僧は無類の智者か、さらず堅固な持經者、眞言師などばかりで
ある。

一同に夏冬の法服と供料とを宛て、自身の滅罪生善の御祈禱、かつは姫君の息災をお祈らせにな
る。されば此宮に明暮手を入れる大工の七八人づゝは絶間がない。世間で手斧の音のする處は、
東大寺と此の小野宮であると評判した。御祖父太政大臣が特に御寵愛なされただけの事はある御
福人である。



宣耀殿女御
禁中には后町として



長閑なく
長くて紙一面
になるなり。
母屋
殿の中間の
室。

た。

父大臣はさういふ事があると聞きになり、御装束をし手を淨め、彼方此方に讀經を吩咐けて、拜み入つて在した。

其の騒ぎの原因は、この小一條大臣が申出されたので、それ故に、一年とも立たぬ中(月十)も薨去になつたのだなど、世間で評判申したけれども、實際はどうか分りませぬ。

御女は、村上の御時に宣耀殿の女御と申して、御容貌が愛らしげにお美かつた。

入内の時乗車なさるとして、御身體はもうお重になつたのに、御髪は母屋の柱の處にあつた。一筋を檀紙にお置きになると、一杯に、些隙間がなかつたとか、お眼尻の少し下つたのが一入愛らしいのを、帝が非常に御寵愛になり、斯様に仰せられましたさうな。

「生きての世死にての後の後の世も、

羽を交せる鳥となりなむ」(比翼の)

女御の御返し、

「秋になる言の葉だにも變らずは、

我も交せる枝となりなむ」(連理の)

古今を暗誦なされたとお聞になり、試しに書を隠して、やまと歌はとある處を初め、前の句の詞を仰せられてはお尋ねになると、お申違への事は、詞にも歌にもなかつ

帝が箏の御琴に御堪能なものも、心を籠めてお教へになるなど、極めて御寵愛になつたれど、冷泉院の御母后がお薨去の後には、却て非常に御情が薄らいだといふ評判で、「故宮が非常に氣にして不安心に思つたのを考へると、氣の毒で残念である。」と御仰せになつた。この女御の御腹に、八宮とて男親王がお生れになり、御容貌などは美しげに居られたれども、御心が非常に愚かしかつたと承りました。

世中のえらい帝の例には、唐土では堯の帝舜の帝と申し、この國では延喜天曆とこそ申すらしい。延喜とは醍醐の先帝の御事、天曆とは村上の先帝の御事なので、其帝の御子、小一條大臣の御孫として、さほどに愚かしく在したといふのは、誠に不思議で御座ります。

其母女御の御兄は、濟時左大將と申し、長徳元年四月二十三日におなくなりになつた。御年が五十五、この大將は父大臣よりも御性質が曲々しく難かしくて、非常な外見者で居られた。

御妹の女御殿に、村上が御琴をお教へになるのを傍で聞習はれる中、自然自身も其道の上手と評判されなされたのを、一通りの事ではお弾きにならず、御遊宴などにも、強か勧められて辛と一つ位合せたりなされたので勿體らしくて小憎らしいと言はれなつた。

人の献上した品などは、お庭に並べて置かせ、夜はお倉に納め、晝は又舊のやうに取出して並べさせ、人が又他のものを上げるまではお置かせになつた。餘り見ともない事で、人が参つた時、こんなにとお見せになる爲らしい。昔人はさういふ事をよいとしたから、其通りをなさるのだとの事、あれ程の方にも似合はぬと諍られなつたとか。

又御甥の八宮に大纒をおさせになつた時、上戸の事とて、人々を酔はして遊ばうのお心算に、重

やまと歌は
古今和歌集の
序の書出した
り、やまと歌
種として云々

立つた上達部たちが早く退出なされさうであつたら、「まあもう少し、などい、おもしろく上手にお留めなされ。」とよくお教へになつた。
あれほどの御不肖人ながら、有繫に貴い親王の御招待とて人々が多勢お出てになつた。昔氣質である。

併し、生憎朝廷の御用と差合つた日の爲、疾く退出されると、ほんに然うであつたと思ひ出しになり、大將の方を幾度か御覽なされるので、眼でお知らせになると、お顔を眞赤にして無言のまま、おびえたやうに荒氣なく、人々の袍の肩も袂も引裂けるほどお捉へになつた爲、居合せた人達は末座まで顔を見合せて呆れながら、それからそれとよい加減に用事をこしらへ急いで退出なされた。

この入道殿などは、まだ若殿上人でずつとの末席なればよくも御覽にならず。唯「人々が薄笑ひをしながら退出なされるのを見た。」と、此頃笑ひ咄になされる。大將は、何しにこんな事をさせ申し、又どうお留めなされなどと教へた事ぞと眞青になつてお出になつた。

もと／＼親王の愚かしい事は誰も承知なれば、何とも申さず、たゞ此殿を、どうしてもなさらねばならぬ事でもないのに、あゝいふ御性來と知りつゝ、何しにあんな見苦しい有様を多くの人にお見せになつた事ぞ、と譏り申した、非常に物の分るお人と評判されたに似ず残念にも斯ういふ辱をお取りになつた。

この殿の北方は、枇杷、大納言延光の御娘で、女君二所男君二人のお子があつた。
女君は三條院が東宮の御時の女御宣耀殿とて、非常に時めきなされ、男親王四所女宮二人お生みに

私事親の許さぬ
帥宮兼家公の
母三條院の
同母弟なり
和泉式部
越前守大江
致道貞和泉
守橋の妻

故冷泉院の云
云冷泉院を
まぜ奉りし元
方民部卿等
置ばや御孫な
れ申すなり
しとなり

なつた頃、東宮が御即位になり、翌長和元年四月二十八日立后、皇后宮と申された。

もう一所の女君は、父殿が薨去の後、私事から冷泉院の四親王帥宮の北方となつて、二三年お出になる中、宮が和泉式部にお氣が移つた爲、つまらなくて小一條院にお歸りになつたが、此頃聞けば、眞とも思はれぬほど落魄れてお出になるとか。

されば、此殿の御名譽は、皇后宮であつた。

其の御腹の一ノ皇子敦明親王は式部卿宮と申上げたが、長和五年正月二十九日、御父の三條院御退位、當帝(後一條)が御即位になり、御自身は東宮にお立ちになつた、お年が二十三。

あるべき御事と誰も存じ上げた處、院がお薨去の後二年ほどしてから、どうお考へになつてか、宮達の頃氣樂に遊び馴れたに引かへ今の窮屈さ、昔に返りたい。とて其由、皇后宮にお申上げになると、「何しにさやうな事を、飛んでもない。」とお諫めになるので、詮方なく入道殿を御文してお招きになり、細々と御咄の上、「此位を退いて、たゞ氣樂にと考ます。」など仰せられた處、「お承けは致し兼ます。では三條院の御跡は絶えて了へとのお考へて御座りますか、誠に思ひがけない悲しい御事で、さういふお心のお出ますのは故冷泉院の御物怪などが思はせ申すので御座りませう、そのお積りでお考へ直しのほどを。」とお申上げになると、「さらば豫ての望みもあり出家したい。」との仰せに、「それほどまでに思召されますならば、兎も角も帝に奏し上げましてから、」と御返事あると、辛とお安心なされた。

さて、殿から大宮にも帝にもお申上げなされた。どんな御心持でお聴きになりましたらう。此度の東宮には、御兄式部卿(皇后定子)をとお考へにもなりましたが、故一條院が「確乎した御後

三宮、御母、上
敦良、御影、上
東門院、影、上
後一條の同母
弟なり。

見がないから。』とて東宮に當帝を立て申されたと同じ事とお極めになつて、寛仁元年丁巳八月五日、九歳の三宮が東宮にお立ちになり、同月二十三日壺切といふ太刀を内裏からお受けになつた。當帝御即位後、直に東宮に渡さるべきを、斯うなる兆か、兎角障りがあつて暫く内裏の納殿に御座りました。

同三年己未八月二十八日、御歳十一で御元服、先の東宮をば小一條院と申し、今の東宮の結構な御有様は申すまでもない、終には然うならうとは存じながら、今直には思ひかけませんでした。

御自身御退位といふ事は、この小一條院が初めて、世が初まつてから、東宮の御位を取り上げられなかつたのは、八九人ほど御座りませう。

中に法師東宮が在したが、其方はお薨去の後贈太上天皇と申して、六十餘國に祭り据ゑられ、朝廷からも、崇道天皇とお崇めになつて、官物の初穂をお上げになる。

この院が斯う御發心なされたのは、殿下の御果報の早いにお負けになつたか、又多くは元方民部卿の靈がおさせ申したのであらう。』といふと、彼の侍が、

侍、それも然うかも知れませぬ。當時の御事は意外のことばかりで、私は非常に悉く聞いて居る事が御座ります。』といふ。

世繼は、
世で御座りませう、どうか承りたい。何かを誠に聞きたい癖がつきまして。』

と興ありげなので、

侍、實際は、三條院が御在世の中こそ、東宮らしいお待遇もお申上になりたれ、お崩御の後は參上して御遊宴などのお世話を申す殿上人もなく、非常に淋しくお心が結ばれて、お氣樂な昔のみ戀しく、鬱々としてお出になつた。

御父三條院が御在世の間は、院の殿上人などもお見舞申上げお使ひも絶えず參り通つた爲、人出入りも繁くお心の慰さんだに引返へ、世の中何となく無氣味に、路を歩くにも、誰が何處へと眼を立てらるゝ面倒さに、官司などすらお世話に參るを遠慮するやうになりゆけば、況て利に就く下素の心は言ふまでもなく、殿守司の下部も、朝のお掃除にすら上らず、お庭の草は繁るがまゝに、恐れ多いお住居であつた。

時たま參り寄る人たちは、世間で評判する事として、『三宮があゝしてお出になるのを、殿も大宮も御心配になり、もし其中帝に男宮でもお出来になつては一大事なれば、さもない中に東宮に立て申したいと仰せられます。して見ると無理にお位をお取られになるのでは。』などばかり申上げるのを、成程然うもありさうな御様子にも見えるので、愈々浮足立つやうに思召され、無理に奪られるよりは自分から退かうとお考へになつた。又一方には高松殿の御匣殿をお上げになつて、殿が大切に待遇しになるさうであるなど、お噂があるのを、御母皇后宮は非常に喜びになる。

東宮は、宜かりさうな事ながら、然うなつてはなほ、自分の思ひ通りにはならぬ、どうでも此儘にはと、御母宮に思召のまゝを仰せられると、『以ての外の事で御座ります。御匣殿の御事がもし眞實ならば、其方をこそお進み申されるべきで、決して、然様な事はお考へになりませう。

御匣殿の女
道長公の女
子、御母は高
松左大臣高明

な。』とて御靈氣たまごけの故と、御祈りなどおさせになれど、一向思し留らぬ御心中が、どうして洩れたか、御退位になつた上で、御匣殿を御所望になるのであらうといふ評判が、殿の方にも聞えるので、『實際そんなにお心が進むならば據ない。』とお考へになる。

さて、東宮はとうとう御決心なされ、退位の後ならば御匣殿の事も辭し易からうと宜い方に御解釋になつたのは御考へ違ひであつた。

壺切をお傳へになつたといふは虚説である。故三條院が度々御催促あつたれど、兎角申上げて御渡し申さなかつたので、故院も、『宜いわ。無くとも立てずには。』とお捨て置きになつたとか承りました。

扱、皇后宮に御断りもなく、御心一つに殿むまに御文をと思召されたれど、打明けてお頼みになれさうな人もなければ、中宮権大夫殿のお出になる四條坊門と西の洞院とは間近いだけを取得に藏人の何某を御使で、『一寸お出下さい』と申させれば思ひもよらぬ事として、『何の御用か。』とお問ひになると唯、『何かお咄があるとの事で御座ります』と申すので、扱は風聞ふうわんの事か、それにしても御退位の方はよもや、大方御匣殿の事であらうとお察しになりつゝ、御自分一人には何とも辨へかねて、『早速參上致すべきで御座りまするが、大臣おとぎに申しました上、』とて先づ殿にお出になつた。『東宮から斯様々々。』とお申上になると、殿も驚かれつゝ、大夫殿と同じやうにお判じになつた。實際御匣殿の御事を申されるのを辭退も爲にくし、差上たらば又今のやうに打捨てゝも置けず、さすれば又世間で評判の如く御退位の御心は消えて了うであらうと當惑なされながら、『態々召されるに參らずにも居れまい。何れとも仰せのまゝを承り來よ。』との事で、御出になる中、日

公の御女明子
なり高松殿は
姉小路北高
明親王家と
殿は禁中し
る殿名なれど
も大出御たる
ふり出の御娘
上り藤三の御
子は東三條の
子方宮長は明
北女ありと長
公女ありと長
公女ありと長
ありと御妻なり

四條坊門
能信の邸
西ノ洞院
東宮の里邸

陣
供待の控所。

朝餉の御飯を召
さるゝ室なり。

年々の受領
年官年爵。

も暮れた。

陣に、左大臣殿の御車や、御前驅などのあるを、折悪いとは思はれながら、殿上に上つて、藏人に案内をお頼みになると、『大い殿左大臣頭光、東宮の女御延子の父が御前に居られますから、暫く』との事で、お見廻しになると、お庭も草深く、殿上の有様も東宮のお住居とは見え、淺ましく勿體ない。大い殿御退出の後、朝餉の方に非常にお身近く召されて、『お出になつた事もないに、お呼立て申すは失禮とは存じながら、大臣に申したい事があるを傳へて貰ふ人もなければ、御近所で都合よさに、仔細は、斯うして居るこそ本望でもあり、折角故院の遊ばし置かれた事を換へるも恐れ多けれど、思へば罪の深い位地で、帝みかどの御行末は中々遙なり、何時までもなく待つ間に、儂い世なれば、命も定め難い。此の有様を退いて、後世も祈り參詣もして、氣樂にありたけれど、一々先の東宮と言はれるも見ともなければ、院號にそへて年々の受領など頂いて居りたきを何如のものか。』とお傳へ下され。』とあるをお受けして退出なされた。

其夜は更けたれば、翌朝早く殿にお出になると、折節參内の御装束最中として躊躇ちゆうちゆうなされる中に、普通御供に參る人たち、其外にもお出かけ前にお眼に懸らうと多勢參り合つて混雑して來たので、御車に召しに出られるまでを、寢殿の隅の勾欄にかゝつてお待ち處へ、源民部卿げんみんぶけいが來られ、『何故なぜ那そこ處ところに。』と申されるので、此殿には隠さずとも、『斯様々々の事があれど、人々が居りますから。』と仰せになると、氣色が變つて、『それは大變な事、疾くお耳に。内に參られたらば、餘計に人眼が多からう。』とあれば眞に、と彼方へお出になると、殿も隅の間にお立出てになり、『東宮に參つたか。』とお問ひになるので昨夜のお咄を悉くくはなされると、無論非常に御驚喜なされ

た。むざとはお引下し申し兼た處に、斯ういふ事が出来し様とはと、何よりも先づ宮の非常な御高運に御感心なされつゝ、民部卿殿に御相談なさると、「唯速になさるべきで、此際日などお撰みには及ばぬ。少しでも延びたら、思ひ返して、此儘居やうなど仰せたらどうなされます。」との御返事に、成程と唇を御覽になると、今日も悪い日ではなかつた。其中、關白殿も參られ、早くとお勧めになる。

先づ、何にしても大宮に申した上、とて内裏にお出の折なれば、參内して申上げられるのを、女の御心には、況てどれほど嬉しくお聴きになりましたらう、さて其後東宮の方に參られた。

時は寛仁元年八月六日、御子供の殿たちや、又いつも御供をなされる上達部殿上人をお引連れになり、非常に仰山な物音でお出になるのを、お待受になる宮のお心地は有繫に少しはお動きになりましたらう。

何も知らぬ人は、平常些參る人がなかつたのに、昨日二位の中納言殿がお出になつただけでも不思議と思ふ處に、又今日そんなに多勢、賀茂詣か何ぞのやうに、御前驅の聲も大げさに仰山な騒ぎでお出になるのを、何事と呆れる中、少し分つた者は、御匣殿の事をお申上げになるのであらうと似つこらしく考へた。

まるで分らぬ下賤の者は、自分が氣になるまゝに、帝がどうかなされたのではないかなど、縁起の悪い事まで考へて居る。

母宮すら御存じはなかつた。此方でこんな騒ぎを、御不審がつてお見舞をお上げになりたれど、常、女房の參る路は、はや警固

されてあつた。宮は殿だけには年來の御不平を悉しく仰せになるお心算でありたれど、率となると、有繫に御胸が騒ぎお對座になつては又双方お臆しになつたものか、たゞ昨日と同じやうに、却て詞少なに仰せられる。

御返事は

「それにしても、なぜ斯うはお考へよりになりました。」とても申されましたらう。

悄然となされた御様子をお氣の毒にも御覽になり、少しほろりとなされて、

「ては今日宜い日て御座ります。」とて、院になし申し、直にお役所の事や萬事をお定めになつた。判官代には、宮司がなり、藏人なども今までと同じく、別當には、中宮權大夫をなされたれば、下りてお請の拜をなされる。

萬事定つた所て御退出になつた。とりわけお氣の毒であつたのは、殿がまだお出の中、母宮の方から非常に見すばらしい形をした女房が、何處から紛れ込んだか、露はに御覽になるも氣付かぬらしく、ぶる／＼顛へながら、「なぜそんな事をなされました。」と泣聲になつて申したが、あはれにも可笑くもあつた、と仰せられた。

敕使は誰とも慥に承りませぬ。」

世「祿など俄の事でどうなされましたらう。」

と言へば
「殿こそはなされましたらう、それだけに運んだ事を遲滞なされませうか。火焚き舍陣屋など取

院
太上天皇に准
ぞられしな
り。
判官代
次官、諸大夫
任之とあり。
別當
院司の長官な
り。

火焚屋 衛士など篝火を焼きて夜を守る處。
陣屋 帶刀(武人)の詰所共東宮坊の役所なり。

臺盤所 御料理處なり。

何か確かならぬ風聞ありしなるべし。

東宮に上られたヤミ事

壞される時こそ、堪へ得ず忍び音に泣く人々が御座りました。況て、皇后宮や堀川女御などは、あれほどしめくと御心深い性に、どんなに思召したであらうと、お察し申しました。世間で堀川女御殿が、

「雲井まで立昇るべき煙かと、見えし思ひの外にもあるかな。」といふ歌をお詠みになつたなど申しますが、豈夫それほどの大事に、歌處では御座りますまい、御心の中には、自然さうお感じになつた事もあらうけれども、人が聞傳へるほど仰せられたかどうか。」

と言へば、翁が、
世に成程それも一理ながら、昔も今も、一大事の折にさういふ事が澤山残つて居るもので。」

侍さてどうした事か、東宮の御位を窘め下しなされてからは、御聲に取り申して、大切になされる御様子が、殊に御心も慰む程といふ評判で、御膳を上げる時は、臺盤所にお出になり、御臺や盤などまで御自身お拭きになり、何でも召上つて見てからお上げになつた。

さて御障子口まで持つて往つて女房にお渡しになり、殿上に出す間も立添つて、彼せよ此せよと指圖なされるなど、是こそは責ても御満足であらうとお氣の毒である。

この際に故式部卿宮の御事があつたといふ事も嘘である。何しにありさうな事でもないのに、昔の事ならば兎に角、現在お出になるお人の事を申すは不都合である。

その式部卿宮と申すは、故一條院の皇子で、以前は帥宮と申したのを、小一條院の式部卿が東宮にお立ちになつたあとに、帥をお退きになつて式部卿宮とは申したので、又此度の東宮に

教儀 小一條の同母弟

教儀の同母弟

中務卿に任ぜられ申す

惡三位孫伊周

道隆の子孫行惡

のしかりしなる故

はれしなる故

し。

も外れてお歎きの中に、お薨去になり、其跡へは、この小一條院のすぐ次の二宮教儀親王を、式部卿と申しましたらし。

又、次の三宮教平親王を中務宮と申し、次の四宮師明親王と申すは、幼くより御出家、仁和寺僧正の御大切な弟子である。

この宮たちの御妹の女宮達二人、お一人は即ち三條院の御時の齋宮で下向なされたのが、お上りの後、伊周の子惡三位道隆の君に嫁せられたれども、折節三條院御病氣あり、非常に後悔して尼になられた。

もう一人女宮が在す。(是は大二條殿)

小一條大將の姫君は、當時皇后宮と申した方で、三條院の御時后にと思したれども、近代は大納言の女でその例なければ、御父大納言小一條大將を贈太政大臣になされて後、后に立て申された。されば、皇后宮をば餘程の御寵愛であつたと見える。

御兄一人は侍從入道、もう一人は大藏卿通任の君、又伊豫入道も同じく御兄である。

今一人の女君は非常に零落してお出になる。父大將がお與へになつた處分の領地が近江にあつたのを、人に奪られたれば、詮方なくて、それほどになると耻もお捨てになると見え、夜徒歩から御堂に往つてお訴へになつた。

殿は阿彌陀堂の佛の御前で念誦して在す中、深更になつたれば、御脇息に寄懸つて少しお眠りになると、犬防の傍に人の來た氣勢がするので、不思議に思すと、女の物ごして、密やかに「一寸願ひます。」と申す。空耳かとお辿りになる中、幾度かになるので、「誰か。」とお尋ねになると、「斯

犬防の佛堂にてあり内陣の隔

高三三尺格子
などにしした
り。

南大門
表門なり。

様々々の者が、お訴へに参りました。』との事に、餘り淺ましなから、荒く仰するも有繋て、『何事を。』とお問ひになると、『もう御存じとは存じまするが。』とて、事の次第を細かに申されたれば、非常にお氣の毒がられて、『一々聞いて居ります。誠に不都合な事、早速制止させませう。併し御自身お出になりませずとも、さ早くお歸りなされ。』と仰せられると、『左様には幾度か存じましたれど、申付けるやうな者も一向御座りませぬ上、自身願ひましたらば、それでも氣の毒とは仰せ下さらうかと、お耻かしさを耐へて、かう仰せ下されるは、申しやうもなくお嬉しう。』とて、手を擦つてお泣きになるらしいのが、氣の毒にもあはれて、殿もお泣きになつた。

歸りに、南大門に大勢居る中をお通りになると、某といふ人が、『誰だ。』と引留め申したのは、無遠慮な事であつた。後に殿のお耳にも入り、非常に御機嫌悪くて、暫く御勘當なされた。

さて、御哀訴の所領は、此方の御領のよし仰せ下された爲、以前よりも確とお領じになつたは極めて宜かつた。

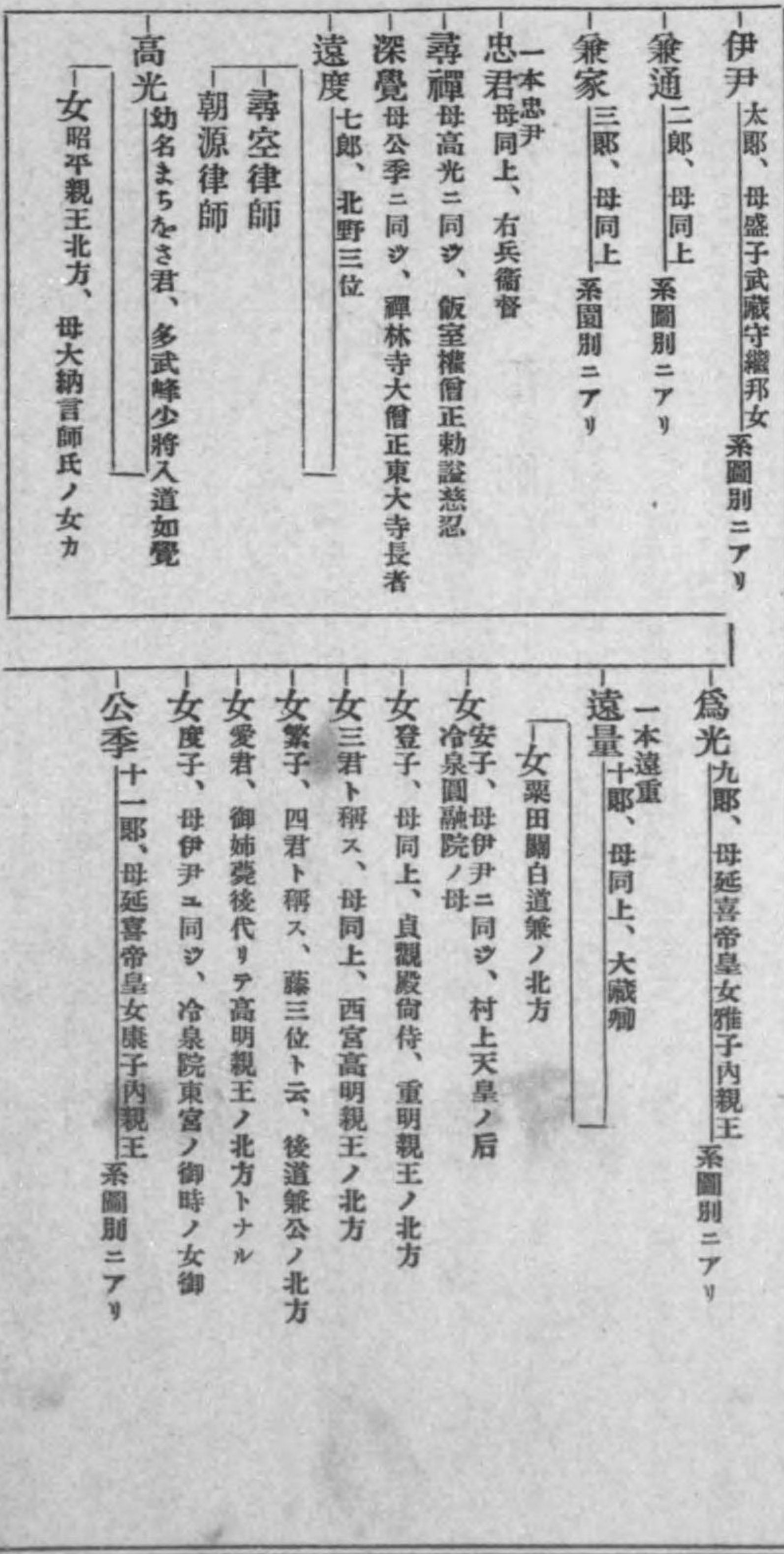
夫程に落ぶれなされたら、見えも構はぬが宜しい。よくお訴へになつた、宜い事をなされたといふに人が褒め申したのが、却てお氣の毒であつた。大門で捉へた人は、式部大夫政成の父である。

目録

九條右大臣師輔

藤原氏略系三 九條師輔略系

○師輔 忠平ノ二耶母右大臣源能有ノ女ナリ、右大臣、後出家、男子十一人女子六人アリ
九條殿



一、右大臣師輔

源能有
文德天皇の御
子なり。

東宮
村上天皇第二の
皇子
王御即位と
申奉る。

四五の宮に村
上
四の宮に上
平親王、五の
宮に第五皇子
守平親王な
り。

藤原
局の上の御
藤原の上の御
局なり、天子

この大臣は即、忠平、大臣の御二男、御母は右大臣源能有の御女、所謂九條殿ではす。公卿て二十六年、大臣の位で十四年、天徳四年五月二日御出家、御年五十三。御孫に東宮、又四五宮を拜見したたけても薨去になつたのは、極めて残念な御事である。六十歳にもお届きにならぬれば、行末遙にお樂みの多い御年頃であるに。」

と世繼が熱心に嘔きつゝ、手を拍ち空を仰いで嘆息する。世其殿の御子息たち十一人、御女六人在した。第一の御女は、村上先帝の御時の女御で、多くの中に勝れて御寵愛あり、天徳二年十二月二十六日立后、皇后宮と申した。御年三十三。況帝も、此女御殿には非常に御遠慮なされ、仰せ上げられる事は、無理でもお聽入れになつた。況して普通の事は申すまでもない。

少し御性質が我儘で、御嫉妬なども深いやうに世間でも噂申した。帝をも始終お困らせになり、どういふ時であつたか、夕暮に、御格子をお叩きになりたれど、お開けさせにならぬので、女房に、『何故開けぬか。』と問へど、某の主が童殿上でお供して居たのに仰せ付けられたれば、何處ぞ明いて居るかと彼方此方見れど、出入の口は残らず閉まり、細殿の口だけ明いて、そこに人の氣勢がするので、近寄つて頼むと、返事はなくて非常に笑つたれば、參つて其通り申上げると、又始まつたとお笑ひてお歸りになつた。

此の童が、伊賀、前司資國の祖父である。藤原と弘徽殿の上の御局(帝の方へ上り)は、近間であるのに、弘徽殿の方に此後がお上りの時、丁度

の方の上られし時の控室。

藤壺の方に小一條女御が在したのが腹立しさの餘り、中仕切の壁に穴を明けてお覗きになると、女御の御容貌が非常に美しく立派なので、道理こそ御寵愛が深い筈と、御覽になる中、赫となされて、穴から通るほどの土器の缺をお打付けになつた處、折節帝も在して、そればかりはお堪へになれず、「女房にこれ程の事は爲得まい。伊尹、兼通、兼家などが唆かすのであらう。」とて、殿上に伺候中のお三人を御勘當なされた。

其時に后はいよ／＼大きに御立腹で「お渡りなされ」とお申させになりたれば、必其事であらうとお出にならぬのを、幾度も幾度も御催促になるので、往かずばなほ／＼機嫌悪からうと、恐ろしくも氣の毒にも思召しつゝお出になつた處が、「何故あんな事をなされました。彼人達にはどれほどの大逆罪があらうとも、お許し下さるべきであるのに、私の爲た事位でお罪なひになるとは、餘りお情ない事て御座ります。今直ぐ御召返しなませ。」と仰せになる。

「今直ぐには見ともなくて。」とあるのを「いえいけませぬ。」とお責めになるので、據く「さらば。」とお歸りにならうとなされると、「彼方へお出になつては直お許しにはなるまい。此處で召させませ。」と御袖を捉へてお立たせにならぬので、詮方なく職事を召して「許すから參れ」と宣旨があつた。

其外にも斯様な事が澤山に聞えましたけれども、一體の御性質は、非常に寛大で、人の爲お察しがあり、周圍中の者を何れも深切にお世話をなされ、他の女御達にも、一面には優しく歌の御贈答などもなされたれど、偶然御胸に餘つて抑へ切れぬ御嫉妬だけは、御缺點で、此の小一條女御は餘り御容貌が勝れて居るため、お甘へになる事が出て來るので、さういふ事もあつたのを見

えます。其方の事は、常の御氣質にもよらぬもので、こんな事まではもう止めませう、餘り恐れ多し。

凡ての殿上人女房其外の女官にも、何ぞの折には御見舞あり、どういふ場合にも必見免し聞免しはなされず、熱心にお世話をなされる。

況て、御兄弟の御事は申すまでもなく、御兄をば親のやうにお頼りになり、御弟をば子の如くにお世話をなさる御性質であつた。

されば、お薨去になつた時、當然の事ながら、田舎世界の果まで聞傳へて惜み悲み申しました。帝が、萬の政をば御相談になる度、人民の嘆きになりさうな事はお諫めになり、喜びになりさうな事はお勧め申され、又、自然帝の御耳に入つて悪さうな事は、人が申上てもお口から出されず、斯様なお心ひけが珍しく結構な爲、御祈禱も叶つて、永く御榮えになつたので御座りませう。冷泉院、圓融院、爲平式部卿宮と、女宮四人の御母后で、並ぶ人なく御榮えになり其上、帝とか東宮とか代々の關白攝政と申すも、大抵はこの九條殿の一つ御血筋で在す。男宮たちの御有様は、御歴代の御事なれば繰返し申しませずとも。

この後の御腹では、式部卿宮こそ冷泉院の御次に先づ東宮にお立ちになるべきを、御弟の次宮にお引越されになりました。當時の事は、誠に氣の毒の至りて御座ります。其理由は、式部卿宮が御即位になれば、西宮殿の御一族の世となり源氏が繁昌なされる爲、御叔父たちの深いお考へから、非道に御弟を引越し申したのである。

世間でも宮中でも、さういふ深いお胸算を少しも知らねば、無論順序通りと思つて居る處に、

御叔父達の兄弟
伊尹、兼通、兼家等なり。

式部卿宮
冷泉院と御母なり。

の方の上られ
時の控室。

藤壺の方に小一條女御が在したのが腹立しさの餘り、中仕切の壁に穴を明けてお覗きになると、女御の御容貌が非常に美しく立派なので、道理こそ御寵愛が深い等と、御覽になる中、赫となされて、穴から通るほどの土器の缺をお打付けになつた處、折節帝も在して、そればかりはお堪へになれず、「女房にこれ程の事は爲得まい。伊尹、兼通、兼家などが唆かすのであらう。」とて、殿上に伺候中のお三人を御勘當なされた。

其時に后はいよ／＼大きに御立腹で「お渡りなされ」とお申させになりたれば、必其事であらうとお出にならぬのを、幾度も幾度も御催促になるので、往かずばなほ／＼機嫌悪からうと、恐ろしくも氣の毒にも思召しつゝお出になつた處が、「何故あんな事をなされました。彼人達にはどれほどの大逆罪があらうとも、お許し下さるべきであるのに、私の爲た事位でお罪なひになるとは、餘りお情ない事で御座ります。今直ぐ御召返しなませ。」と仰せになる。

「今直ぐになどは見ともなくて。」とあるのを「いえいけませぬ。」とお責めになるので、據く「さらば。」とお歸りにならうとなされると、「彼方へお出になつては直お許しにはなるまい。此處で召させませ。」と御袖を捉へてお立たせにならぬので、詮方なく職事を召して「許すから參れ」と宣言があつた。

其外にも斯様な事が澤山に聞えましたが、一體の御性質は、非常に寛大で、人の爲お察しがあり、周圍中の者を何れも深切にお世話をなされ、他の女御達にも、一面には優しく歌の御贈答などもなされたれど、偶然御胸に餘つて抑へ切れぬ御嫉妬だけは、御缺點で、此の小一條女御は餘り御容貌が勝れて居るため、お甘へになる事が出て來るので、さういふ事もあつたのを見

えます。其方の事は、常の御氣質にもよらぬもので、こんな事まではもう止めませう、餘り恐れ多く。

凡ての殿上人女房其外の女官にも、何ぞの折には御見舞あり、どういふ場合にも必見免し聞免しはなされず、熱心にお世話をなされる。

況て、御兄弟の御事は申すまでもなく、御兄をば親のやうにお頼りになり、御弟をば子の如くにお世話をなさる御性質であつた。

されば、お薨去になつた時、當然の事ながら、田舎世界の果まで聞傳へて惜み悲み申しました。帝が、萬の政をば御相談になる度、人民の嘆きになりさうな事はお諫めになり、喜びになりさうな事はお勧め申され、又、自然帝の御耳に入つて悪さうな事は、人が申してもお口から出されず、斯様なお心むけが珍しく結構な爲、御祈禱も叶つて、永く御榮えになつたので御座りませう。冷泉院、圓融院、爲平式部卿宮と、女宮四人の御母后で、並ぶ人なく御榮えになり其上、帝とか東宮とか代々の關白攝政と申すも、大抵はこの九條殿の一つ御血筋で在す。男宮たちの御有様は、御歴代の御事なれば繰返し申しませずとも。

この後の御腹では、式部卿宮こそ冷泉院の御次に先づ東宮にお立ちになるべきを、御弟の次宮にお引越されになりました。當時の事は、誠にお氣の毒の至りて御座ります。其理由は、式部卿宮が御即位になれば、西宮殿の御一族の世となり源氏が繁昌なされる爲、御叔父たちの深いお考へから、非道に御弟を引越し申したのである。

世間でも宮中でも、さういふ深いお胸算を少しも知らねば、無論順序通りと思つて居る處に、俄

式部卿宮
冷泉と同母な

御叔父達
母后安子の兄
伊尹、兼通、兼
家等なり。

内侍ノカミ
内侍ノスケ、
内侍ノツヨウ
とあり、

さて、后がお薨去の後、式部卿宮もお薨去になり、帝は又非常に戀しく思召しの餘り、召取つて格別御優遇あり、貞觀殿、内侍と申した。比類ない御寵愛で、外の女御や御息所の御競争も効がなかつた。それも九條殿の御幸運なのであると、世間で申した。

又、三ノ君は西宮殿の北方で在したが、御子を生んでお亡りになりたれば、他人ではお子達の爲悪からうと、御妹の五にお當りのあい君と申すをお呼びになつた。

四ノ君は疾うにお亡りになつた。

六ノ君は、冷泉院が東宮の御時にお上げになつたりして、女君達は皆斯うである。

男君たちは、十一人の御中に、五人は太政大臣で在した。非常な御幸福の事で、其御外は、右兵衛督忠君、又北野三位遠度、又大藏卿遠量、多武峯入道少將ノ君。

法師では、飯室の權僧正と、今の禪林寺の僧正で、それも當世第一の験者で、佛のやうに、朝廷からも世間からも崇信されてお出になる。

其中で、北野三位の御子は、尋空律師、朝源律師、大藏卿の御女子は、栗田殿の北方、今の左衛門督の母上で、此御一族が斯う御繁昌の中に、多武峯少將の御出家の時、どんなに哀れにも優しくも、種々に存じられましたらう。中にも、帝からの御文には、一方ならず御心も騒立つたことと、畏れ多い。

『都より雲の八重たつ奥山の、
横川の水は住よかるらん。』

御返事、

『九重の裡のみ常に戀しくて、
雲の八重たつ山は住みうし。』

初めは横川に、後には多武峯にお住みになつた。誠に哀れな御事で、併し、それは、御父九條殿や御姉后宮がお薨去の後であつた。かの右馬督殿の御出家こそは、親御達のこれから愈々御繁昌といふ時を打捨て、誠に誠に珍しい

悲しい御事で御座りました。早くからさういふお心算はあつたと見えて、御兄弟の公達と一緒に、正月二十七日夜時分に、中堂にお上りになつた處が、一向お勸行もなさらずお寝みになつて居るので、御兄弟達が、曉方に、「何故さう臥てお出になる。起きて念誦でもなされ。」と仰せた處、「其中一時に。」と申されたのを、

當時は氣にもお留めにならなんだれど、御出家の折成程と合點なされた。さりとて別に悄れたりなどはなされず、人一倍得意氣に愉快さうな人であつた。この九條殿は、百鬼夜行にもお遭ひになりました。何時時分とは承りませぬが、非常に深更に内裏から退出なされ、大宮小路から南の方へお出になると、栗野辻の邊で御車の簾を下ろさせ、「牛をもかさ下せかさ下せ。」と早口に申されるので、不思議には思ひながら、かさ下ろした。御隨身や御前驅なども、どうなされた事と御車の傍に近く参つた處が、御下簾をも悉皆下し、御笏を執つて俯伏しになつてお出での様子が、誰かに非常に畏りなされた様である。

御車は榻にかけけるな、唯御隨身どもは轅の左右首木の傍にひたとついて先を高く追へ、雑色ども、引切りなく聲を立てるやうに、「御前驅達も傍に居よ。」とて、尊勝陀羅尼(經の)を一心にお誦みに

百鬼夜行に百鬼
拾芥抄に百鬼
夜行正二子不
夜行正二子不
三行正二子不
巳未八十一
九未八十一
十未八十一
十一未八十一
十二未八十一
十三未八十一
十四未八十一
十五未八十一
十六未八十一
十七未八十一
十八未八十一
十九未八十一
二十未八十一
二十一未八十一
二十二未八十一
二十三未八十一
二十四未八十一
二十五未八十一
二十六未八十一
二十七未八十一
二十八未八十一
二十九未八十一
三十未八十一
三十一未八十一
三十二未八十一
三十三未八十一
三十四未八十一
三十五未八十一
三十六未八十一
三十七未八十一
三十八未八十一
三十九未八十一
四十未八十一
四十一未八十一
四十二未八十一
四十三未八十一
四十四未八十一
四十五未八十一
四十六未八十一
四十七未八十一
四十八未八十一
四十九未八十一
五十未八十一
五十一未八十一
五十二未八十一
五十三未八十一
五十四未八十一
五十五未八十一
五十六未八十一
五十七未八十一
五十八未八十一
五十九未八十一
六十未八十一
六十一未八十一
六十二未八十一
六十三未八十一
六十四未八十一
六十五未八十一
六十六未八十一
六十七未八十一
六十八未八十一
六十九未八十一
七十未八十一
七十一未八十一
七十二未八十一
七十三未八十一
七十四未八十一
七十五未八十一
七十六未八十一
七十七未八十一
七十八未八十一
七十九未八十一
八十未八十一
八十一未八十一
八十二未八十一
八十三未八十一
八十四未八十一
八十五未八十一
八十六未八十一
八十七未八十一
八十八未八十一
八十九未八十一
九十未八十一
九十一未八十一
九十二未八十一
九十三未八十一
九十四未八十一
九十五未八十一
九十六未八十一
九十七未八十一
九十八未八十一
九十九未八十一
百未八十一

中堂
比叡山の
に参籠ありし

道長の男。

と言ふと、侍が、

侍「されば、事の例には、先づ其御時世を引出すやうで御座ります。」
世「勿論、其帝が冷泉お生れになつたればこそ、藤氏の方々が今に御繁榮なされるので、入道殿も「若し彼帝がお生れなくば、自分等も、今頃辛つらと五六位の諸大夫位で、彼方此方の御前驅や雜役に奔走して居るであらう。」と仰せられたれば、源民部卿が「さういふ格好の御前驅が付きましたら、どんなに見ともなう御座りませう。」とお笑ひになつた。されば、朝野とも其御時代を引出すのは道理で御座ります。」

帝は、御物怪が強く在したれば、どうあらうと人々が心配申上げたに引かへ、大嘗會の御禊には大層お立派で御通りになつた。

夫は、形に顯はれて、九條殿が御後を抱いて御輿の中に從てお出になつたと、人が評判しました。成程生前にも普通の人とはお見えにならなかつたれば、況て薨後には御守護なされましたらう。それ程ならば、元方卿と、桓算供奉とを退ひ退けなさりさうなものながら、それは定つた御宿業とても申しませうか。一體の御性質は非常に御善良で、政道もお立派になれさうに見えましたれば、世間で非常に惜み申すらしう御座りました。

さて、當今九條殿の御子の數は、冷泉、圓融の御母后、貞觀殿安子、尙侍と、一條攝政、堀川關白、大入道殿、忠君兵衛督たけきみと此六人は、武藏守從五位上經邦の女の腹である。世上で、子を持たば女子を。といふのは、この御事であらうか。異腹も交れど、惣じて男君たち五人は太政大臣、三人は攝政をなされました。

武藏守前には出雲守とあり、昇進せしなるべし。
男君五人、伊尹兼道、兼家、爲光、公季、三人、上の五人の中、伊尹兼通、兼家、の三人は攝政をなされしなり。

目録

| | | | |
|------|----|----|----|
| 謙 | 德 | 公 | 伊尹 |
| 忠 | 義 | 公 | 兼通 |
| 恒 | 德 | 公 | 爲光 |
| 仁 | 義 | 公 | 光季 |
| 大入道殿 | 兼家 | 兼家 | |

已上九條殿息

大鏡

卷五

藤原氏略系四 伊尹兼通略系

○伊尹 師輔ノ太耶、一條攝政太政大臣、又世尊寺殿
諡謙德公、母盛子、武藤守從五位上經邦女

舉賢 藏人頭、前少將ト稱ス
母惠子女王、代明親王女

義孝 右近衛少將、後少將ト稱ス
母同上

行成 義孝ノ太耶、伊尹ノ養子トナル
母桃園源中納言保光女

實經 但馬守、母三位泰清女

良經 尾張權守、母同上

女大姫ト稱ス
女丹波守源經頼ノ北方

女權中納言長家ノ北方

義懷 中納言、後出家シテ飯室ニ入ル
母代明親王女惠子女王

女懷子、冷泉院女御
母同上

女恒徳公爲光ノ北方

女爲光ノ後ノ北方

女兵衛督忠君ノ北方

女四ノ君ト稱ス
冷泉院ノ皇子爲尊親
女王ノ北方、後ニ尼ト
ナル、九ノ君ト稱ス

尋圓 飯室ノ僧都、
母備中守爲雅女

延圓 同阿闍梨、
母同上

成房 入道中將ト稱ス、
母同上

一女定經ノ北方

○兼通 師輔ノ二耶、堀川太政大臣、忠義公、
母伊尹ニ同シ

顯光 兼通ノ太耶、堀川左大臣、又廣幡殿
母式部卿元平親王ノ女

朝光 母三郎閑院左大將大納言
母兵部卿有明親王ノ女

女皇子、堀川ノ中宮ト云

女嬭子、尚侍、後、乘方ノ室
母左馬頭藤原有年ノ女

正光 大藏卿
母同嬭子

時光 北面中納言
母同嬭子

遠光 右京大夫

尋清 仁和寺律師

兼定 上野前司右京大夫
母高明親王ノ女

女左兵衛督公信ノ北方
母同上

重家 少將、後出家
母盛子内親王

女 元子、一條院女御承香殿
母同上、後賴定室、後爲尼

女 堀川女御ト云、小一條院女御
母同上、藤系圖に延子トアリ

朝經 朝光ノ太耶、中納言母式部卿重
明親王ノ女

登朝 同二耶右馬頭
母同上、後出家

相經 同三耶、少將
母同上、後出家

女 姚子、花山院ノ女御
麗景殿ト云、母同上

師經 右京大夫

藤原氏略系五 爲光、公季、兼家略系

○爲光 師輔ノ九耶、法住寺太政大臣、恒徳公、
母延喜ノ皇女雅子内親王

誠信 爲光ノ太耶、左衛門督
幼名松尾君、母敦敏女

齋信 同二耶、中納言
母同上

通信 同三耶備中守
母同上

公信 左衛門督

某未詳

尋光 法住寺僧都

良光 阿闍梨

女 嬭子、弘徽殿、花山院女御
母ハ誠信ニ同シ

女 中納言義懷ノ北方
母同上

女 鷹司雅信ノ北方
母伊尹ノ女

女 入道道長ノ前妻
母同上

女 皇后宮嬭子ノ女房
母同上

○公季 師輔ノ十一耶、閑院太政大臣、仁義公
母延喜皇女康子内親王

實成 右衛門督
母有明親王ノ女

如源 三昧僧都
母同上

女 義子、弘徽殿、一條院女御
母同上

公成 藏人頭公季ノ養子
母播磨守陳政ノ女

女 中宮權大夫能信ノ北方
母同上

女 頭中將顯基ノ北方
母同上

○兼家 師輔ノ三耶、東三條大入道殿ト稱ス、攝
政太政大臣、母盛子武藏守經邦ノ女

道隆 太耶 系圖別ニアリ
母時姫

道綱 次耶、右大將
母陸奥守倫寧ノ女

兼經 道綱太耶、宰相中將
母雅信女

道命 阿闍梨、同二耶

道兼 三耶 系圖別ニアリ
母時姫

道義 四耶、堀阿治部少輔
一本茂

道長 五耶 系圖別ニアリ
母時姫

女 超子、母攝津守仲正ノ女時姫
冷泉院ノ女御、三條院ノ御母

女 詮子、母同上、東三條院ト稱ス
圓融ノ后、一條院ノ御母

女 綾子、母國章女、西對ノ御方

女 中宮宣旨

一條に住されし故なり。

一、太政大臣伊尹

此大臣は一條攝政と申し、九條殿の御長男で在す。非常にお立派な歌集を作つて、豊景とお名づけになつた。

大臣になりお榮えになつて三年、天祿三年十一月一日に御他界、御年が四十九。御諱は謙徳公と申した。非常に天折をなされたのは、九條殿の御遺言を違へられた故である。と人が申しました。併し、然もなくとも長命はなされまい。

御葬送の方法を、非常に質素簡略にお書置きになりたれども、まさかには然うはと制規通りに行はれたよし、御道理である。

御容貌も才智も凡てに餘りお勝れになつた爲、御壽命だけは充分でなかつたと見えます。折々の御歌などが、誠に結構で、春日のお使の歸さに、女のもとに、

『くればとくゆきて語らん逢ふ事は、

とほちの里の住うかりしも。』(日が暮れ)

御返し、

『あふ事はとほちの里に程へしも、

吉野の山と思ふなりけん。』(平氣でお出になつた)

助信少將が宇佐の使で御下向の時、殿上へ餞に菊の花の色の衰へたのを題で、別れの歌を、

『さは遠くうつろひぬとか菊の花、

をりて見るだになかぬ心を。』(さらばもう遠くへお移りになるか、御出になつて見て居て)

春日明神の祖先藤原氏の祖を二月十二日に立つなり。前日に祭

忠君の弟。伊尹の弟。花山院の御母は懷子。

三寶繪。地獄極樂を畫けるのよし。

代明親王の醍醐の皇子。

帝の御をぢ、東宮の御祖父で攝政をなされ、世の中は思召通りになられた故か、殊の外驕奢をお好みになり、大饗をなさる時、寢殿の裏板の壁が少し黒かつたのを偶と御覽して、早速に檀紙をびたとお張らせになつたのが、却て白く清らかに眼立つた。普通の人の考へ付く事ではない。御家は今の世尊寺で、御一族の氏寺となし置かれたのを、斯やうの菩提講のやうな時に參じますると、いまだに其れが張られて居りまするのが、昔に遭つたやうて身にしみます。

御榮花を見残して、御年が五十にも足らぬ中お薨去になつた可憐さは、父大臣にも劣らぬと世間で惜み申した。

御男子や御女子が大勢お有りになつた。女君一人は冷泉院の御時の女御、花山院の御母で贈皇后宮せられ、次々の女君二人は、引續き法住寺大臣の北方となり、孰もお薨去になつた。

九君は冷泉院の彈正宮の御上であられたが、宮の薨後尼となり、非常に堅固で在す。

又忠君の兵衛督の北方で、後に六條左大臣殿の御子の右大辨の上で居なされたのは、四君。又花山院の御妹の女一宮はお薨去になつた。女二宮は、冷泉院の御時齋院にお立ちになり、圓融院の女御に入内なされて、程なく内裏が焼けたので、世間で火宮と申した。

さて二三度入内の後、間もなくお薨去になりました。此宮にお見せにならうとて、三寶繪はお作らせになつた。

男君達は、代明親王の御女の腹に、藏人頭前少將、後少將とて、花やいだ御兄弟は、父殿の薨後三年ばかりして、天延二年甲戌の年流行の痘瘡の爲に、前少將は朝、後少將は夕方お薨去になつた。

一日の中に二人の子を亡された母北方は、ま、どれほどの御心地であつたらうと、誠に痛はし

其の後少將は、義孝と申し、御容貌が非常にお美しく、年來非常の信心者で在した。御病氣が重くなつて助かりさうにも思はれなかつたので、母上に、

『私が死にませうとも、彼是世間並の事はなされず、其儘にお捨置き下され。今暫時法華經を誦し申したい願が御座りますから、屹度歸ります。』とて方便品をお讀みになりつゝ、お覺去になつた。

御遺言を母北方のお忘れになりさうな事はなけれど、思ふに御生體ない間に、他の者がして上げたのでも御座りませうか、枕返しや何やと法の如くして了つたので、お歸りにならなんだ。後に母北方の御夢に。

『しかばかり契りしものを渡り川、

かへるほどには忘るべしやは、〔あれほど御約束申したものを三途の川をわたつてかへる間にお忘れにならうとは〕

と詠みになつた。どれほど御残念で御座りましたらう。さて後餘程經つて、賀縁阿闍梨と申す僧の夢に、この君達お二人居なされたが、兄の前少將は非常にお憂はしげに、この後少將は非常にお愉快さうなので、『どうしてさやうて居させられる。御母上は兄君にも勝つて非常にお慕はしげで在すに。』と申された處が、一向無頓着の御様子で、『時雨とは千種の花ぞ散りまがふ、

何、故郷に袖ぬらすらん。』〔時雨とは千種の花の散り紛ふ美しいものである〕

と詠みになつた。

さて後に、小野宮實資の御夢に、花の影に在すと御覽になり、此世でもお親しかつた中とて、『一體今まで何處にお出なされた。』と珍しがりお問ひになると、御返事に、

『昔契蓬萊宮裏月、今遊極樂界中風』と答へになつた。

極樂に往生なされたので御座りませう、夢中の示現はなくとも、此方の御往生を疑ひ申す處はなし。

普通の君達のやうに、内裏などで、女房と馴染んだりもなさらぬのみか、戯言一つ仰せられなんだ。

どうした時でか、細殿にお立寄りになつたれば、例なき事と、女房達がお對手申上げて居ると、夜半に近い頃お立退になつたので、何方へと床しく人を付け申すと、北陣をお出になる頃から法華經を非常に尊げに誦しつゝ、大宮上りに世尊寺にお着きになつた。

なほ見て居ると、東の對の端の紅梅の咲盛つた下にお立ちになり、滅罪生善、往生極樂と申され

ては西に向つて、幾度か額を地につけ禮拜なされた。

歸つて始終を咄したれば、何れも感に堪へましたとか。私も其頃、大宮のさる所に宿が御座りましたれば、御聲に眼覺めて、誠に染々と承りました。出て見上げた處、一面に霞み渡つた空に月が非常に明くて、御直衣が眞白なのに、濃い指貫をよい加減に括り上げて、何色か美しいお召杯がゆだち〔袴の裾口〕から澤山溢れ出て居た御容體のお立派さ。お顔の色が月影に映えて眞白に、鬢際くつきりとお美しかつた。

濃い
唯濃き薄きな
どあるは大方
紫なり。

方便品
法華二十八品
中成佛の方便
なり。

お後をつけて参り、お額づきになつたまで拜見して、染々感心致しました。御供に童が一人ついて居たやうて御座ります。

又殿上の逍遙が御座りました時、無論、他の人達は、思ひ／＼に美しい狩装束をなされたのに、此方は、香染の御狩衣と薄色の御指貫といふじみなおとり合せて、却つて一生懸命飾つた人よりは、お美しかつた。例の通り法華經を誦しなされつゝ、紫檀の御珠數の水精の飾球のあるのを、御袖の中に引隠しお持ちになつた御用意などが誠に優で、大體一生精進とお定めになつたのが、先づ珍しい。同じ事を繰返すやうなれど、非常に感じて見聞致した事はやはりお咄申したさに。

この殿は御容貌が無類で、末世にもあれほどの人は出まいと見上げました。雪が非常に降つた日、一條、左大臣殿にお出になり、御前の梅樹に澤山積つたまゝ、一枝折つてお振りになると、御自身にはらく／＼と懸り、御直衣の裏の標が班になつたのが、一層お美しさを引立たせました。

御兄の少將も非常に御容貌が美かつた。

此の弟殿が餘り柔和いのはがゆがり譏つて、少し利かぬ氣で在した。

その義孝少將が、桃園源中納言保光卿の御女の腹にお生まれになつた君である、今の侍従大納言行成卿とて、世の手書と騒がれなされるのは、この行成卿の御男子は、唯今の但馬守實經君、尾張權守良經君、この二人は泰清三位の御女の腹である。

嫡妻腹のは少將行經君。又女君は入道殿の御子高松腹の權中納言殿の北方で、十五でお亡りになり、中君は今の丹波守經頼君の北方で、大姫君と申すもお出になる。この侍従大納言殿

香染に鼠を加へたる如き色なり

泰清の皇子有明親王の子なり

が、地下の備後介から藏人頭になされたのは誠に異例である。

源民部卿殿が職事から上達部におなりになりた時、一條院が後には誰をしやうとお尋ねになつた處、「行成などが宜しう御座りませう」と推舉なされたのを「地下の者はどうあらう」と仰せられたれば、「誠に立派な者で御座ります。地下など御斟酌には及びませぬ。行末も政治向の萬事を勤め得られる器量人で御座ります。あれ程の人をお見出しにならぬのは、世の爲め然るべからぬ御事で、善悪をよく御差別あられてこそ、人も氣をつけ御奉公致します。この際お任じにならなかつたら、御後悔が御座りませう。」と奏せられた爲、然るべき事ながらおなりになつた。

一體、昔は前頭の推舉によつて後任が定まるので、されば殿上で我こそと思つて居た人たちは、今宵定まると聞いてお出になると、何處ももう閉つて鍵がかゝつて居るので、誰ぞとお問ひなされると、行成卿がお名告りになつたれば、不思議に思つて、「何しにお出なされた。」とあると、「頭になし下されたれば。」とお答へになつたので呆れて動きもせず立つて居なされた。成程思ひがけぬ事で御座りますから。

この源民部卿がかやうに推舉なされたをお忘れにならず、從二位の頃正三位の民部卿よりはお上なれど、決して上座に着かれず、俊賢卿が出座の日は、横座などに在した、さて民部卿が正二位の時、舊の如く下蔭におなりなされた。

一體この一條家の御一族が、頭争ひの爲いつも仇をお作りになりませすから、これもどう御座りませうか、何方も御存じの事ながら、朝成中納言と、一條攝政と同時に殿上人で、身分こそ一條殿と同等ならね、學識も世間の評判も立派な方とて、頭になるべき筈の所、又この一條殿も無論

そのお人として、朝成君が、

『貴方は、おなりにならずとも人が侮りませぬ。ならうと思召せば又いつてもお心の儘で御座りまするが、私は、今度外れましたら誠に外聞悪く辛い事になります。どうかお譲り下され。』とお願ひになると、

『私も然う存じて居りました、では御譲り申しませう。』との事に、非常にお喜びの處何うお考へ直しになつてか、程なく相談もなしに頭におなりになつたので、『お欺しなさらずともこの事を。』と非常に御立腹あり、不和でお過しの中に、此の一條殿の御家來に無禮な事をなされたので、『不平ではあらうとも、事々に斯う無禮を働くは奇怪な。』と御機嫌悪いと聞き、過失であつたを辯解しやうとお出になつた處、それ位のお人が官等の高い方へ往つた時は、此方へと許されぬ中は上にも上らず、下に立ち居る制規の處に、是は六七月の極暑の事、案内を頼んで、今か今かと中門にお待ちになる中、西日も照り懸つて非常に暑く氣分も悪くなりさうなので、『あゝ分つた、この殿は自分を炙り殺さうとなさるのだ。來ねば宜かつた』と思ふ。と堪らなく腹が立つて來る。

其中、暮れて了つたれば其儘でも居られず、笏を押へて立ちになる際に、はたと折れたのは、どれほどの決心をなされたのか。家へ歸つて、『あの一族は絶やしてやる。もし男子か女子かあらうとも出世はさせぬ、氣毒がる者があつたらそれにも崇るぞ。』と誓つてお亡りになつた爲、代々の御惡靈となつた。この殿の家はお近いから、誠に恐ろしい。

御夢に、南殿の後の戸の處は參殿の人が屹度通る處になつて居る、其處に誰か立つて居るので、誰ぞと御覽になると、顔は戸の上の方に隠れてよくも見えぬ。怪しさに、誰ぞと幾度かお尋になる

頭辨は少將の子、伊尹の孫なり。

と、『朝成で御座ります。』と答へたので、夢の中にも非常に恐ろしながら、堪へて、『なぜそんなにしてお出になる。』と仰すと、『頭辨のお出を待つて居ります。』と言ふと御覽になり、眼覺めて、今日は公事のある日なれば疾く出仕なされやう、困つた事』と御心配になつて、『夢見が悪う御座ります、今日は病氣届でもして、嚴重に物忌なされ、此方へも決してお出あるな、悉くは自身申す、』と書いて急いでお上げになりたれど、往違ひ其前にもう參内なされた。

併し、佛の加護が強かつたものか、常と違つて、北の陣から、藤壺と後涼殿の間を通つて、殿上にお出になつた。殿が、

『これはいかな事、御消息を上げたのは御覽にならなかつたか、恠う恠ういふ夢を見ました、早く御退出あれ。』と仰せられると、手をはたと打つて、二言とお尋ねもなく退出して御祈禱などなされ、當分は御參内もなかつた。

彼の御物怪の家は、三條から北、西洞院からは西で、今に一條殿の御一族は假にもお出にならぬ。

此大納言殿は、何事にも充分に堪能で在したが、和歌だけは少しお劣りであつたと見え、殿上に歌論義といふ事が出來て、其道の人達は、何と問答しやうと其の事ばかりに心を入れて居るのに、この大納言殿は一言も申されぬので、不思議さに何とかいふ方が、『難波津に咲くや此花冬ごもり、』下の句はとお問ひになると、急には御返事もなく頻にお考への様子で、『存じませぬ。』とお答へになつたには、一座笑つて呆れて了つた。

一寸した事をも熱心に考へてなさる御性質で、帝が御幼稚て人々に玩具を獻じるやうと仰せられ

むらこ
紫にて濃く
すくばかしあ
るなり。

筋を入れ
金銀珠玉を
さみ込むな
り。

樂府、白樂天
のにて、古詩
なり。

眞、
楷字。

賀陽院殿
當時賴通公の
邸。

一の大納言
上席の大納言
なり。

前司
前の國司なり

た時、何れも黄金などで種々工夫を凝し、風流なものを作らせて持参なされた處が、この殿は、
獨樂に村濃の緒を付けてお上げになつたれば、『妙なものだ、これは何ぞ。』とお尋ねになつた。『斯
様々々の物で御座ります。』とて『廻して御覽なりませ、おもしろいもので。』など申されたれば、
南殿に出てお廻しになると、廣い御殿の端から端を廻り歩くので、非常にお興じになり、それは
かりをいつもお遊びになつて、外の玩具は引籠められて了つた。

又殿上の人々が、扇などを調じてお上げになる時にも、他の人たちは骨に蒔繪をするとか、又は
銀、黄金、沈、紫檀などの骨に、筋を入れ、彫物をし、或は、立派な紙に、珍しい歌や詩や又六
十餘國の歌枕の名高い處々などを書いて差上げた中に、この殿は、骨だけを美しく塗り、黄色の
唐の紙の、下繪が透けて面白いのに表の方には、樂府を上手に眞に、裏には御筆を揮つて草に書
いてお上になつたれば、打返し打返し御覽じ、御手箱に入れさせて非常な御寶物と思召し、外の
扇は唯興がり御覽になつただけであつた。帝の御感に入るに越した事はない。

又非常に警句を吐くお入で、彼の賀陽院殿で競馬のあつた日、鼓は讚岐前司明理の君であつた
が、一番には何某、二番には某など言つたれど、其名は忘れた。

勝つべき方を下手に打下げて、氣合の乗らぬ爲に負けたのがあつた。其隨身がむか腹を立て、馬
上に振り返りざま、『此位の事すらやり損ねなざる。道理こそ、明理行成と一對に言はれなかつたれ
ど、彼方は一の大納言であんなにお立派なのに、腐つた讚岐前司古受領で、鼓を打損ねて立つて
御座るわ。』と悪口申したのを、大納言がお聞きになり、『明理が下手を遣つたとて、行成の醜名ま
で引合に出さずとも、』とお笑ひになつたれば、人々が、甘い事と被仰ると興じて、其時分の流行

詞になつた。

又、一條攝政殿の御男子が、花山院の御時、帝の御叔父で義懐の中納言と申した。少將達の御同
腹で、非常に御全盛であつたが、帝の御出家後、遅れじと花山寺にお尋ね申し、中一日置いて法
師になられたが、飯室といふ處に、非常に尊く行つてお果てになつた。

其中納言は、文盲では在したが、御性質が非常に確乎して有識で、花山院の御時の政治は、唯こ
の方と、惟成の辨とてなされた程大層お偉かつた。

其帝をば、内劣りの外めてた、と世間と申上げました。

冬の臨時祭が、日没までかゝるのは良くない辰の時に一同参れと宣言を下されたのを、然うは仰
せられても巳午の時分にはならうと誰も油断なされたのに、舞人の公達が装束を頂きにお出にな
ると、帝は早御装束を着けて立つて在しました。

この入道殿も、當時舞人て在したれば、此頃お語りになつたのを傳へ承りましたので、明るい中
に大路を渡る方が宜からうと思ふ處に、御馬の非常にお好きな帝とて、舞人の馬を後涼殿の北の
馬道から、朝餉の間の御庭に引下させ、殿上人どもを乗せて御覽になるだけでも、人々呆れて居る
のに、終ひには御自身乗らうとさへなされたれば、一同當惑して居ると、折よく入道中納言がお
出になつたので、帝は非常に御赤面なされた。

中納言も淺ましと見上げ申したれど、人々が見る前でお止め申すも却て見苦しければ、もてはや
し興ずるやうにして、自身下襲の裾をはさんでお乗りになつた。

あれ程狭いお庭をぐる／＼と面白く乗廻して、お下りになつたれば、悪いのではなかつたと安心

日没まで
十一月下の西
日のなれば短
日なるなり。

馬道上にて通行
を許さるゝ
處、板敷のよ
し、椽なりと
もいへり。

下襲
袍の下に着る
なり。

してお顔色がなほり、非常にお興じになるのを、中納言は浅ましくも御怒然にもお思ひになる様が、心から宜からぬ事を教唆し申されるとは違つて、誰の眼にも見えなければこそ、斯う傳はつたので御座りませう。併し又、『自身乗つてお見せになるまでは。』といふ人もあつた。

こればかりでなく、白痴といふてはなけれど、御性來がどうも少し怪しかつたのが、誠に困つた事で、されば、源民部卿は、『冷泉院の狂ひよりは、花山院の狂ひの方が始末が悪い。』と仰せられ、入道殿は、『不都合な事を、』と仰せながら非常にお笑ひになつた。

この義懐中納言の御出家は、惟成辨が勧め申されたとか。非常に思慮深い人で、『此度の帝とお他人なれば、今まで通り朝廷にお交りになるは見苦しう御座りませう。』との事に成程と、愈々御決心なされたれど、本來の道心ならねば、何う在さうと人が思ひ申したに似ず、沈着た御性質とて懈怠なく行つてお薨去になつた。

其御子は唯今の飯室の尋圓僧都、又延圓阿闍梨、入道中將成房の君で、この三人は備中守爲雅の女の腹である。

其中將の御女は、定經ぬしの御妻で在す。一條殿の御族は、どういふわけか御壽命が短いらし。

花山院が、御本意通り御出家の後、非常によくお勤めになり、至らぬ隈なく御修行なされた。

或時、熊野道の千里濱といふ處で御氣分が悪くなり、濱面の石を御枕にお寝みになつた處、すぐ傍を海人の鹽焼く烟りが立昇る心細さ、真にどうお感じなされましたらう。

「旅の空夜半の烟と昇りなば、」

あまの藻鹽火焼くかとや見む。」

護法の法力つきたる僧なり。

戒力に人を戒め、惡を止むる力を保つた。

其中驗も非常におつきになり、中堂にお上りの夜、修行者達の驗比べに、御自身も試さうとて御心の中にお念じになると護法のついた法師か、御座の御屏風の傍に、びつたりと引付けられ動きもえせぬ。餘り長くなるので、もう許さうとお解さになつた途端、『そらお放しになつた。』と知らせた僧たちの方へ躍り込んで歸つたのを、さては院の御護法であつたか。と何れも感じ奉つた。勿論さもあるべき事、驗も人の身分によるなれば、どれほど勝れた修驗者でも、とてもお叶ひ申しさうな事はない。前生の戒力でなられた國王の位を、又捨て、御出家なされた功德といふものは、廣大な御事なれば、さてこれほど御修業の積んだ上は、後々まで御懈怠になりさうもないことを、どうしてか、ふと御變心なされたのも、やはり、御物怪がなし申したので御座りませう。

中にも、冷泉院が南の院にお出の頃、火事の當夜御見舞になつた御様子こそ、不思議で御座りませう。

御親の院は、御車で二條の町尻の辻におイみになると、この院は御馬で、頂きに鏡を入れた笠を阿彌陀にお冠りになり、『帝は何處に、帝は何處に。』と御自身人毎にお尋ねになり、何處其處と教へられて、お傍近くお下りになつた。

御馬の鞭を脇挟み、御袖を打合せて、お車の前に非常に恭しくお畏りになつたのは、滅多とない見物で、それに又冷泉院が、御車の中から高聲で神樂歌をお唄ひになつたのは、種々面白い事を見聞き致すかなと存じます中に、明順ぬしが、庭火が(神樂の時た)餘り強過ぎると申された爲、萬

明順高階明
播磨守高階明
順高二位成
忠刺の男。

人堪へずどつと笑ひました。

又花山院が、或年祭りの歸さを御覽になつた。

前日出來事のあつた際として、御外出ない方がよいのに、勝れて不思議な形をした者達が、高帽を被つた頼もしげな兵者を先に立て、御車の後にがや／＼と大勢ついて参つた様の奇妙さ取分けて御珠數が可笑かつた。

小さい蜜柑を普通の珠のやうに糸に通し、大珠には大蜜柑を通した非常に長い珠數を御指貫と一緒に車の外へ出して置きになつたのは、まああれ位の見物は恐らく御座りますまい。多勢が紫野で拜見して居ると、其處へ檢非違使が来て、「昨日喧嘩を仕出かした童は何處に、捉へよ」といふ騒ぎになつた。

今の權大納言殿が、其頃はまだお若かつたが、人を走らせて、「慙う慙うの事が御座ります、疾くお歸りなませ。」と申上げさせたので、仰山居た者達が蜘蛛の子を風の散すやうに逃げて了つた後、御車副だけでこそ／＼と物見車の後からお歸りになつたのは、有繫にお氣の毒に恐れ多かつた。

さて騒ぎを起した御車副の童部どもは、檢非違使付の役人達にひどく罰せられ、太上天皇の御名に永代泥を塗けた。眞に民部卿殿の評された通り困つた御方である。

が、有繫にお詠み歌は何れも人の口に喰炙したお立派なもので、

『こゝろみに外の月をも見てしがな、

わが宿がらのあはれなるかと。』

などは帝の御心に浮ぶべき御思想ではない、何か御不平があつてあらうとお痛はし。

又冷泉院に符を献上の折、

『世の中にもよるかひもなき竹の子は、

わが經ん年をたてまつるなり。』

御返し、

『年へぬる竹のよはひは返しても、

この世を永くなさんとぞ思ふ。』

忝く仰せられたと御集にあるのが、誠にと存じられます。あゝいふ御心にも、御子をお祝ひになつた御情合が悲。

この花山院は風流者で在した。

御所をお造らせの結構などが、寢殿、對、渡殿など幾つもの棟を、檜皮で嘗合せものも此院がお始めになつた事で、昔は別々で、間に樋を懸けてあつた。内裏は今に其の通りに出來て居ります。

御車宿りには、板敷を奥は高く端は下つて、大きな妻戸をお建てになつた。譯は、御車の非常に重いのを其儘入れさせて、何ぞ急の場合に、取敢えず戸さへあければ、憂々と自然に出て來るやうにおもしろく御工夫なされたので、御道具などの美事さは申しやうもない。

六宮が御氣絶の時、御誦經の僧に御布施の御視箱を拜見致しましたが、海賦に、蓬萊山手長足長など黄金でお畫かせになつたのが、あれ程の小さい箱を、塗り方といひ時繪の様、置口の具合な

海賦の模様を書けるなり。手長に長臂に手長し長

脚國は足長し
とあり。
置口の如くま
覆輪の金銀に
てはかりある
なり。

どまで、非常な御結構さてあつた。
又、木立をお作らせになるのに、櫻の花は優しけれど枝振りがごつ／＼して、幹の格好なども憎
い、梢だけ見るに限るとして、中門の外へお植ゑさせになつた。何よりもよいお思ひつきと皆が感
心申上げた。

又撫子の種を築土の上にお蒔かせになりたれば、思ひもよらず四方に唐錦を引かけたやうに咲い
たさまは、申しやうのない美事さて御座りました。

入道殿が競馬の當日お迎へ申上げた時、お出になつた装束は、無論、疎の譯はなけれど、取分き
御車の様子が無類であつた。

御沓に至るまで、人の見物になるやうなものばかりで、後には皆が持廻つて見せ歩いたといふ事
である。

○あて繪をなされたのが又面白い。

それは、走り車の輪の處は薄墨に塗らせ、輪廓の處だけ墨を濃くなされた。成程さう書くべきで、
餘り走る事は、何時の間に黒さなどがよく分りませう。

又、男が指毎に箭の皮を嵌めて、べかこうをして威すと、子供が顔を眞赤にして非常に怖がつて
居る處や、又、福人や貧家の内の様などお書きになつたのが、どれも／＼眞に迫つて驚かれるほ
どであつた。此中には、御覽になつたお人も御座りませう。

一、太政大臣兼通

この大臣はこれ九條殿の二郎君、堀川殿とて關白なされた事六年。

屋形車の輪
きくして人の
行幸にも用ゐ
る。親王の御
事ども許さる
事あるなり。

安和二年正月七日宰相におなりになり、閏五月二十一日宮内卿と申し、元祿二年閏二月二十九日
中納言におなりになり、大納言にはなられず、十一月二十七日直ちに内大臣に御昇進、御弟の東
三條殿が中納言の頃、此殿は宰相で御不平であつたが、誠に結構であつた。天延二年正月七日從
二位、二月二十八日任太政大臣、直ちに正二位して輦車をおゆるされになり、三月二十六日關
白、
天延三年正月七日一位され、貞元二年十一月八日お薨去になつた。御年五十三。同廿日贈正一位
の宣旨があり、後の諱忠義公と申上げました。

この殿がこれほどの御出世に合はせては、折なくて大將におなりにならなただけが残念であ
る。併し斯様おなりになる爲なれば、お諦めになつてよ。

御母の事がないのは、一條殿と同腹か知れませぬ。圓融院の御母后はこの大臣の御妹で、この后
は、村上の御時、康保元年四月二十九日御薨去になつた。まだ御在世の頃、この大臣がどうお考
へになつたか、關白は、順序通りお任じのやうにと、帝に書かせて頂いてお守りのやうに首に懸
けて年來所持なされた。

御弟の東三條殿は、冷泉院の御時の藏人頭で、此殿よりも先に三位し、中納言にもなされたのに
此殿は、僅か宰相位で在したれば、不平で参内も碌々なされぬ爲、帝も疎遠に思召した。其中、
御兄の一條攝政が、天祿三年十月お薨去になつたれば、彼の文を持参し、御眼にかけやうとなさ
れた處、帝が鬼、間にお出になつたので、折よしとお喜びになりたれども、御叔父達の中では一番
御疎遠の爲、帝は御覽になると其儘つとお入りになつた。

伏籠に火を入
れ、上物をたき
かき、衣を打
ひて、おくも
なかり。炭櫃
今の爐に同

並べて、室の飾りから總てに結構を盡し、此上もなく大切に大將を待遇しなされた。外からお歸りになると、冬は火を澤山埋め、焚物を大きく作らせて、伏籠をかけ、常のお召を暖めては召させ、又炭櫃に、銀のひさげを二十ばかり据え種々の薬を置並べてお上げになり、お寝みになる疊の上席には、綿を入れて、お寝みの間際には、大きな火熨斗を持つた女房が、三四人で、其席を暖かに熨斗撫て、お寝ませ申なされた。餘りな御注意である。さて一體の裝飾や、女房の衣裳などは、さやうに立派なれども、此北方は、薄黄色の衣の綿の厚いを二枚ほどに、白い袴を着てお出になつた。

年が四十餘位、大將には親程で色が黒く疱瘡の痕があり、髪が縮れて居なさるので、御容貌相當の装束をと工夫されたものか、全く其の御衣裳がよく釣合つて、それほどの方の北方とはとても見えぬに引換へ、もとの北方重明式部卿宮の姫君は、貞觀殿の尙侍の御腹でやんごとない御身分ほどあり、御容貌や御様子がお立派であつたのに、斯ういふ人に御心が移つてお去りになつた處を見ると、唯、徳があつて、大切になさるのにお打込みなされたものか、高貴のお人にも似合はぬ事といやもう呆れます。下賤な私等でも、萬一非常に財寶を降らして、大切に世話しやうといふ女があらうとも、年來の女房を振捨てる氣には、なれませぬのに、それほどの御身柄の方は、よしやお氣が合はずとも、私共の家とは違ひますものを。この今の北方の事から、人にも輕しめられ、評判がお落ちになつたらしい。それ位の御分別は御座りませうものと残念さにお咄致しました。」

と微笑む様が優し。

世「いやもう、それほどの方すらさやうな事を遊ばすなれば、以下の人はどんな振舞をなさるも御道理で、私共が永年汚い家に苦い世渡りを堪へて参つたのは偉いと存じます。さて、時々、前の北方の處へお出にならうとて、牛飼や車副などに、其方へ車を遣れとお命じになつても、一向聞きませぬ。

この今の北方が、お供の雑色や隨身、車副などに、装束其他のものをお遣りになるは勿論、毎日、酒を出しては飲ませ遊ばせ、非常に深切になされる爲、其効能と見えませすが、それを又其等のするが儘に、おやめになるも不思議で、一體この大將は、御容貌の通りに御性質も結構であつた。

又今の皇太后宮の御匣殿として禁中にお出になるのは、堀川殿の御子大藏卿正光の御娘、此御母は源帥殿の中君で、唯今の左兵衛督(爲光の)の北方や、又上野の前守兼定の君も、御同腹である。

ほんに、今一人、北面の中納言とか、世人が申したのは、正光の御弟時光卿で、右京督でお出になつた。

又その御弟のやはり右京督の御子で御座ります、今の仁和寺の別當律師尋清の君は、堀川殿の御子孫は是だけであつた。

この大臣は、一體、非常によくない方で、現に唯今御子孫連綿とお榮えになつてある東三條殿を罪もないのに御官位をお奪ひになつた。何とした御悪事で、天道もお怒りになりましたらう。

當時の帝は、圓融院で在しました。東三條殿が、お歎きの心もちを、長歌に詠んでお奉りになつた時、御返事に、稻舟の(最上川のばれば下る稻舟のい)と仰せられたれば、「暫時ばかりの」とお歎きに

北向の家な
り、枕草子に
も、ちるも
の、中に入
たりの家を
北

のしばばかり

いかにせむ我
身くしるる船
舟の命絶え
ずば。

なつた。
堀川殿が其後、自身薨去の際、關白をば、御從弟の頼忠、大臣にお譲りになつたのを、世人が非常な曲事と譏り申しました。」
對坐して居た侍が、此時口を挾んで、

昆明流、障子
清涼殿にあ
り。漢土の畫
明池の圖を畫
けるなり。

侍「いや、東三條殿の官位をお取りになつたのは、御道理の事で、私の祖父は、かの殿年來の御家來とて、悉しく承はりましたに、この殿達の御兄弟は、永年官位の事から御不和であつた中に、堀川殿の御病氣が重つて臨終の際、東の方から前追ふ聲がするので、東三條大將殿がお出になつたと人が申すをお聞きになり、永年不和には過したれど、臨終と聞いてお見舞ひになる事と見苦しいものを取除け、御寢所を繕ひなどしてお待ちになる中、『もう通り過ぎて御参内なされました。』との知らせに呆れて情なく、傍の者も嘸自分を馬鹿らしく見たてあらう、在したらば、關白を讓る事も申さうと思つて居たのに、然ういふ心なればこそ、年來不和で通した、餘りな仕方であるとして、お留め申すを無理に搔起させ、人々が、不審がる中に、『車の用意せよ、御前驅を集めよ。』とて、魅者がしてか、それとももう夢中での仰せかと、怪く見申す中に、御冠を召寄せ、裝束し参内なされて、陣の中は御息達に倚懸り、瀧口の陣の方から御前へと、昆明池、障子の處までお出になると、帝は日御座に御出て、東三條大將が、侍して在した。
この大將殿は、堀川殿がもうお薨去になつたとお聞きになり、帝に、關白の事を申し上げやうとて、彼の殿の門前を通り、参内して奏聞の處に、堀川殿が眼を瞑らしてお出になつたので、帝も大將もお驚きになりたらしく、大將は衝と立つて鬼の間の方へお出になつた。關白殿は御前に膝

除目
春秋二季に
はるに任免
り。臨時にも
宣旨
關白の職權に
下したるな
り。
治部省の長官
なれば相當
位なり。大將
納言の兼官
が三の兼官
名譽職なれば
り。望むなば

宰相
參議。

突いて非常に不機嫌な様子で、『最後の除目を行ひに参りました。』とて、藏人、頭を召して、『關白には頼通大臣、東三條殿の大將を除いて、代りに小一條濟時の中納言をなし申す。』といふ宣旨を下させ、東三條殿を四位の治部卿にして、退出の後程なくお薨去になつた。
勝氣のお方とて、それ程の場合にも、参内して奏請なされたなどは、餘人の出来ぬ藝で、されば一向に堀川殿の悪心といふ譯でも御座りませぬ、仔細は右の通りて、
最初に、『關白は次第のまゝ。』といふ御書付を、御妹の宮に頼んでお取置きになつたり、又斯様にしてお薨去になつたなども、思ひ合せるに、剛氣な才人で在した。

一、太政大臣爲光
この大臣はこれ九條殿の御九男、大臣の位で七年、法住寺大臣と申上げる。正暦三年六月十六日薨去、御年五十一、後の御諱恒徳公と申した。御子は男七人、女五人、女二所は佐理、兵部卿の御妹の腹あと三所は、一條攝政の御女の腹で、男君達は皆別々のお腹である。御女一所は、花山院の御時の女御で非常に御寵愛があつた中に、御懷妊ありて、八月でお薨去になり、もう一所は入道中納言の北方でお亡りになつた。
男君太郎は、左衛門督誠信と申し。御立腹の餘り三十八で薨去なされたのは、誠に淺ましい。
人に追越されて辛い目見るは、珍しからぬ事ながら、然るべき因縁でも御座りましたらう。同じ宰相なれど、人格も人望も弟御には劣りなされた故か、中納言のあいた時、態々對面して、『今度の中納言を諦めて下され、私が願ひたいから。』とお頼みになりたれば、『どうして貴方をお越し申ませう。況てさう仰せられる上は、必ず。』とお誓ひになつたので、安心して其心算で、熱心にお

望みになつた處が、人格が不足であつたか、入道殿が、此大臣に、「貴方はお望みなされぬか。」と仰せられたれば、「左衛門督が望んで居りますから。」と澁々申された。「あの左衛門督はなれまい。足下が辭しなされたら、他の人がならう。」では、つまりませぬ。私を爲し下され。其のお心があらば、他人には決して。」といふ事でおなりになつたのを、「何しに我を欺かつたぞ。」と非常に立腹なされ、除目の翌朝から、手を強く握り締めて、「我は、齊信と道長に欺された欺された。」と言ひ詰めに食事もなされず、俯伏し俯伏しなされる中に、病氣づいて七日目にお亡りになつたが、握つた指は力が餘つて上に突抜けて居た。

樂府の心を盡きしなるべし。

非常な上戸で、(寫光)故中、關白殿がなされたある年の臨時客に、御酔の餘りお席を立つ事も出来ず嘔吐なされたのが、高名の弘高の書いた樂府の御屏風に懸つて損じました。

かの中納言になられたの(齊信)は、現に中宮大夫で、非常に人望のある善い方で、又權中將道信、君は、和歌の名人で、人に羨まれなかつた中、お亡りになり、今の左衛門督公信卿(寫光)と法住寺、僧都の君、阿闍梨良光の君とがお出になる。

又一條攝政殿の御娘の腹の女君達が、三、四、五と三人在す。

三の御方は鷹司殿の上とて尼におなりになり、四の御方は、今の入道殿が、俗にお出の頃御子を生んで、お亡りになり、五の君は、今の皇后宮に奉仕なされる。

この大臣の御有様はかやうである。

但し、法住寺を、非常にお立派にお造りになつた。攝政關白をなされぬ方の業としては、偉いものである。この大臣は、非常に權貴であつたに拘らず御子孫は衰へた。

宮ばら云々
醍醐天皇の御子有明天皇
女御の御子有明天皇
皇の御子有明天皇
親王の御子有明天皇
北方の御子有明天皇
三昧を主とす
念佛を主とす

御裳着の表服に
同じ。裳を着
初めて裳を着
ゆきやうらて
拾遺集に「山
を越ゆる人の
時鳥をきいた
る處に」とあ
りてこの歌あ
り。時鳥を今一
時待ちて山路
に目を暮しつ
となり。

一、太政大臣公季

この大臣は、今の閑院大臣で、九條殿の御十一郎、宮腹で、親王の御女を北方になされた。其の御腹に、女一人、男二人、女君は一條院の御時の弘徽殿の女御で、今に御存命である。

男一人は、三昧僧都源とてお亡りになり、一人は、今の左衛門督實成卿である。この殿の御子で、播磨守陳政の御女の腹に、女二人男一人ある。

大姫君は、今の中宮權大夫殿の北方、もう一人は源大納言俊賢卿の御子、頭中將顯基の君の北方で居なさるらし。

男君の方は、御祖父の太政大臣殿がお養ひになつて、公成とお命名になつた。藏人頭で御眷遇が勝れて居る。この太政大臣殿の御有様は斯様で、帝や后はお出にならぬ。

この太政大臣の御母上は、延喜帝の御女十四宮で延喜が非常に御寵愛になり、御裳着の屏風に公忠の辨が「ゆきやうらて山路暮しつ郭公、今一聲の聞かまほしさに。」と詠んだのは此宮のである、貫之など澤山に詠みたれども、この人としては、それが秀歌で、評判で御座りました。

朱雀や村上と同腹の御妹で、内裏住して大切に冊かれてお出になつたのを、九條殿が女房を頼んで、密とお連出しなされた。世間で不都合な事と批判し、村上帝も不快に思召したれど、露はにお咎めもなかつたのは、この九條殿の御寵遇が勝れて居たからで、未だ人々が、内緒でこそくお噂をするばかり、帝のお耳には入らなんだ頃、大雷雨の日に、此の宮禁中にお出の時とて、「殿上の人たち、四宮の御方に參れ、恐ろしく思召さう。」と仰せられたれば、誰も誰も參つたのに、小野宮の大臣だけは、「參るまい、御前が汚れて居る。」とお呟きになつたのを、後に、帝も思召し

すまひ 毎年七月國々
より召上げら
れたる力士ど
も南殿の前を
て相撲するを
はさるゝな
り。遠慮なく
汗取つて汗
をとりもの汗
汗疹(かさみ)
なり。官位を云々
大將を除かれ
しことなり。

わか宮の社に
別雷神(わづの
いかづち)の
神(かみ)を
祭(まつ)りた
べし。いへる
く。いへるな
る。

何のお許
り。女房ほどい
ふ。東山、南
東岩倉、南

寺の邊より黒
谷の銀開寺の
邊をいにしへ
り。凡ていへ

女一條院の御母
なり。

夕占 人の物語りし
ゆくに我思ふ
心判しし身
吉凶の事を知る
上りの事を知る
西の對の御方
と申す兼家公
の妾なり。

並びになつた御前に、悉皆脱いで、御汗取一つでお出になつたのは、滅相もない事である。後には、北方もなくやもめて、東三條殿の西の對を、御調度萬端清涼殿が、りにしてお住ひになつたなどを、餘りな事と人が批難した。臣下は臣下だけの御果報であるのに、さういふ御身持の爲、永くはお榮えにならないだとも評判申しました。其時分には、夢占ひも、巫子も、えらい上手が御座りましたもので、堀川の攝政の全盛時代に、この東三條殿は官位を召上げられて、非常に辛く思す處に、さる人の夢に、堀川の院から、矢をどん／＼と東の方に射るのを、不審と見て居ると、東三條に皆な落ちたと見えた。不和なる方から矢が來たのなれば、凶事であらうと何れも心配するので、恐れて、夢ときにお問はせになると、『非常によい御夢で御座ります。殿が執政なされて、彼方の人が残らず歸服するのがお見えなので御座ります』と申ししたが、よくも中りました。又、其時分、巫の偉いのもあつて、賀茂の若官が、お乗移りになるのだとて、臥てばかり物を申したれば、打臥、巫と人が名をつけた。大入道殿が、呼んでお占はせになると、非常に上手に、現在も過去も言ひあてる爲、信じてお出でになると、成程其通りになつて往くので、後々は、御装束や御冠を着け、御膝を枕にさせてはお占はせになつた處が、御行末の事を、一事でも申違へなかつた。御身近く召されるに、不都合なほどの下賤でもなく、ちよつと何の御評とかいふ位の女であつた。この殿が、法興院にお住居になるのを、嫌な處にと、人は不賛成であつたけれど、非常にお氣に入つて、無理にお渡りになり、程なく薨去された。東山などが間近く見えて、山里めいたのがお

もしろいとて、御物忌の時、お出にならうと、お占はせになつたれど其効なく、彼方で御病氣づかれた。御厩の馬に、御隨身を乗せて、粟田口の方へお遣りになると、遠くまで見えたりするのがおもしろいとて、月の明い夜は、下格子せずにお眺めになつた處、眼には見えぬ者が、ばら／＼と大勢來て、悉皆下したので、お附の人達は怖れ騒いだれど、殿は平氣で、御枕下の大刀を引抜き、『月を見ると上げた格子を、下すは何者ぞ。もとの通りに悉く上げよ、さらずば爲惡からうぞ。』と仰せになると、直に又悉皆上げたなど、惣じて不思議な事が御座りました。で、御子息達にもお譲りにならず、あの通り御堂になされたらし。この大臣の御子達は、女君四人、男君五人。女二所、男三所は、攝津守藤原仲正ぬしの御娘の腹で、それは、三條院の御母の贈皇太后宮と、女院と、大臣お三人(道隆、道長)とである。この御母はどう思つてか、まだお若い頃、二條の大路に出て、夕占をおとひになつた處、眞白な髪の女が、僅た一人て往くのが、立留つて、『何をしてお出になる。もし、夕占をお問ひになりますのか、ならば、何事でもお望み通りになつて、此大路よりも、長く長くお榮えになりませう。』と言ひさして往つて了つた。人ではなくて、何かの示現で御座りませう。今一人の女君は、女院が宮で居られた頃の宣旨で、又對の御方と申したお腹の御娘は、非常な御愛子で十一歳の時、尙侍にして、内裏住をおさせになつた。御容貌が非常に美しく、御髪も十一二歳の頃に、もう、絲を綴りかけたやうに、非常にお美しかつたれば、早いがよいと、三條院が東宮で御元服の夜の御副臥にお上げになり、院も、憎からぬ

目錄

內大臣道隆

右大臣道兼

東三條殿息

卷六

新釋大鏡

藤原氏略系六道隆、道兼、略系

○道隆兼家ノ太郎、内大臣、中關白殿ト云
母時姫、攝津守藤原仲正女

道賴太郎、幼名大千代君、大納言、山井殿ト云
母伊豫守守仁ノ女

伊周二郎、幼名千代君、内大臣關白、太宰權帥
母從三位高内侍貴子從二位高階真人成忠女

隆圓三郎、僧都
母同伊周

隆家四郎、幼名阿古君、中納言兵部卿、前帥殿
母同上

賴親内藏頭
母同上

周賴木工頭

周家兵部大輔

好親井手少將
後出家

定子母同伊周、一條
院ノ皇后、敦康親王

女某、母同上、三條院
東宮ノ時ノ女御淑景

女某、母同上、帥宮教
道親王ノ北方

女某、母同上、御匣殿、
式部卿宮敦康親王母

女某、母、對ノ御方、
皇太后宮姪子ノ女房

女三條院東宮ノ時ノ御
匣殿

○道兼兼家ノ三郎、右大臣、粟田殿、七日關白ト云
母時姫、攝津守仲正女

福足太郎、幼名福足君

兼隆二郎、左衛門督
母大藏卿遠量ノ女

兼綱三郎、前頭中將

女尊子、一條院女御暗戸屋ト云、後大藏卿通任ノ北方、母
一條院ノ御乳母藤三位

女某、母同兼隆、中宮威子ノ女房、二條ノ御方

兼房後拾遺二藏岐守トアリ

女三條院ノ皇子敦平親王ノ北方

女未詳

女同上

女同上

女母紫式部女越後辨

觀尊母帥ノ中納言惟仲女、
明尊僧正ノ弟子

一、内大臣道隆

この大臣は、即東三條兼家大臣の一男、御母は、女院隆子と同じ。關白道隆で六年ほど御繁昌なされましたらう。大疫癘の年に薨なせられました。併し、其御病氣あたりではなく、御酒中毒あたりである。男は上戸を一興おことはすれど、餘りの大酒は、誠に都合の悪い事が御座ります。

祭の歸路を御覽になると、小一條道隆大將、閑院朝光大將朝光と同車どうぐるまで、紫野にお出になつた。鳥の蹲踞かたむねて居る形を瓶かめに作らせ、それがお氣に入りて、何かといふと、それに御酒を入れては召される。其日もそれに入れたのを御上機嫌ごうけんで召上る中に、段々甚く酔つて、終しまひには、御車の後ろも入口の簾すだれも皆な上げて了つて、三人とも、冠なしのばさら髪かみでお出になつたのは、非常に見苦しかつた。

一體、この大將殿たちは、普通の外出では、興なく不本意にお思ひになり、正體もなく酔ひしれ、御裝束ごうそうもしどけない御様で、御車を傍そばまで寄せて人にかき乗せられるやうなのを、非常に面白い事にお思ひになつた。

但し、この殿は、大醉の割には早くお正氣ただしづかれました。御賀茂詣ごがもぎの日は、社頭ぢやうづで、三度の御土器ごんかばらけが定例ぢやうれいであるのを、其時には、禰宜ねい神主も氣を利かせて大土器を差上げると、三度は申すに及ばず、七八度位召して、上かみの御社ごんかばらけに御參詣ごんかばらけの頃には、仰向おほむかひけに、後しむの方はうを枕まくらて、正體なく寝入つても出になる。

この御堂殿ごだうが、當時、一の大納言おほののりで隨行ずいぎやうなされ、御覽ごんらんになつて居ると、夜になつて御前驅ごんぜんの持つ松明しょうめいのあかりで、車中が透けて見えるのに、お出の様子ごしやうなければ、不思議ふしぎに思召おもほす中、いよゝ

往着いて、御車を搔下してもまだ何の御様子もない。
 不審ながら、御前驅達も、其儘じつと、お車の傍について居るらしいので、入道殿が下車なされ
 捨ても置けず、轆の外から高聲で、やゝと御扇を鳴したりなされても、お覺めにならぬので、傍
 に寄つて、表の御袴の裾をぐいとお引きになつた時、辛とお眼が覺め、お支度は馴れた事とて、
 用意の御櫛笄を出し、身繕ひしてお下りになると、一向平氣で端然としてお出になる。それ
 程大醉なされたら、一晚位は起上られさうもないのに、そこが、此殿の質のよい御酔方であつ
 た。

其の御娛みを御臨終までお忘れにならなんだと見え、御病氣になつてお薨去の時、西を向け申し
 て御念佛なされと人々がお勧め申したらば、「濟時や朝光なども極樂に居らうか。」と仰せられたの
 があはれてある。

常々御執心の事とて、彼の地獄の鼎の蓋に頭を打付けて、三寶の御名を思出した人と、同じやう
 な御事である。

御容貌が誠に清らかに在した。

二男の帥殿に、天下執行の宣旨を下し申すに、今の民部卿殿が、其頃頭辨て參られた時、御病氣
 がさし重つて、御装束もお着けになれぬ爲、御直衣で簾の外に膝行してお出になり、長押を辛とお
 下りになつて女の装束を御手づから、式の如くお被けになつたのが、誠に偉い。外の人が、あ
 れほどの大病になつたら、醜からうに、矢張り非常に小ざつぱりと上品で在したれば、病氣の時
 こそ、美貌は欲しいと思つたと、民部卿殿はいつもお咄しになる。

三寶、法、僧な
 り。佛に歸依し
 て三寶に念佛す
 ること。經文に
 事なるべし。故
 地獄に墮して
 始めて念佛の
 心出でしとな
 り。頭辨て參
 り。人頭にして
 辨官を無れし
 を辨官を無れし
 直衣を辨官を
 東帯叶はれ

この關白殿は、大勢の腹々に、男子や女子を澤山お持ちになつた。今の北方は、大和守高階成忠
 ぬしの御女で、後には高二位と申した。で、積善寺の供養の日に、この入道殿よりも上座に着かれ
 たのは珍しい事て御座りました。

其腹に、男君三所、女君四所。

大姫君は、一條院が御十一歳で御元服の時、たしか十五歳で入内なされ、直ぐ、其年の六月一日
 に立后、中宮と申した。

東三條殿の御重患の際に、遠慮もなく差上げられたのを、世間で批難し申した。

さて、御父關白殿が薨去の後、男親王と女みこ二所をお産みになつた。

女一宮は、入道の一品宮といつて三條にお住居になり、女二宮は九歳でおなくなりになつた。

男みこは、式部卿宮敦康親王と申上げ、度々お望みが外れた爲、世を憂く思してお薨れになつた。
 御年が僅に二十歳、味氣ない御一生であつた。冷泉院の宮達などのやうに、輕々しい方でもあ
 つたら、世間でお氣の毒に思ひやうも薄からうものを、御學問がよくお出来になり、御性質も誠
 にお立派であつた。

さて、この宮の御母后のすぐの御妹は、三條院が東宮と申した頃に淑景舎とて御寵愛ありたれど、
 父殿が薨去の後、御年が二十三ばかりで、お薨去になつた。

三の御方は、冷泉院の親王で帥宮と申したのを、父殿が御簪にお取りになりたれども、後に、いつ
 とはなく御縁が切れて、晩年には、一條あたり非常に零落れてお出になつたといふことであ
 る。眞個かどうか、御性質が非常に浮ついても出になつた爲め、宮の方でもお疎みなされたとい

一敦康親王
 皇太子に立
 御即位あり
 御弟の朱給
 一超條に御
 一に超條に
 ひに超條に

ば、略儀なれ
 ど直衣にて
 高階成忠
 高二位に
 位された
 いふたれ
 積善寺
 道長が二
 極の第を
 となし積
 と號すと
 二月廿日
 道隆供養
 二月廿日

三の御方
 道隆の御
 女隆の御
 子隆の御

は御座りませぬか。併し、實際さやうの事は、必しも御自分に罪科があつてには限らず。餘り身分に過ぎた才能のある人は、唐土でも我國でもある事で、昔は北野宮が。」
など言つて鼻をかひのも、あはれに見えた。

世この殿も、御才能が、日本國には過ぎて居たから、さやうの事にもなりましたらう。

其後、式部卿宮が御誕生(御母)の御祝に召返されて、准大臣の宣旨をお被りになり、外出などなされる御様子が餘り不謹慎の爲聞憎い事ばかり、種々評判されなされた。

参内なさるのに、北の陣から入つて、西の方へお出になると、丁度入道殿も御参内中とて、梅壺の東の堀の間に、お供の人達が多勢居た處に、此帥殿のお供が、餘り大げさに拂つたので、往き處がなくなり、梅壺の堀の中にばらばらと逃込んだのを、何事ぞと殿がお驚きになる。

誰も誰も怪しからずは見ながら、有繫にどうも爲得ぬに、某といふ殿の御隨身が、空惚けて荒けなく甚く追拂つたれば、外の方へがや／＼と出るのを、今度は帥殿の御供の人達が拂ひ敢えぬに、肥満したお人として小ばしこく歩み退きもされず、登華殿の細殿の部に押付けられ、あれあれと申されても、狭い所に追出された雜人が一杯立込み急に退いてもお上げ申せなんだのが、誠に不都合であつた。

それ等は、別に御過失といふてはなけれど、餘りに仰山な御外出などなさらずばさやうな輕々しい事が出来はしまいと存じられます。

又入道殿が、御嶽に御参詣の途中、帥殿の方から、何か不都合な所爲があるらしいといふ評判が立つて、例よりも警戒なされ、無事にお歸りになつた處、さういふ評判があつたと彼方へも人が

知らせたので、當惑ながら、お出になつた。

道中のお咄などなされる間、帥殿の非常に臆した御様子が眼立つので、可笑くも又有繫に氣の毒にも思つて、「久しく雙六を致さないでつまりませぬ。今日遊ばせ、」とて双六の枰を召して、お拭きになつたときに、お顔も非常によくなつたれば、殿を初め、居合せた人達が、お氣の毒に見上げた。

それほどの評判をお聞きになつたらば、少しは不興にもなされさうなものなれど、入道殿は、何處までも思ひやりの深い御性質で、人が立腹しさうな場合をば、反對に優しく待遇なされるのである。

この御博奕にかゝると、二人ともお裸體で腰だけに物を巻き、夜半曉方までなされる。直に夢中になるお人として、不都合な事も出来されやうと、他人は不安心に見て居ると、非常な御賭物である。

帥殿は、古代の何とも言へぬ立派なもの、入道殿は、今様の面白いものを、種々面白い御趣向にして交換なされたれど、斯ういふ事にまで、帥殿は、始終負けてお歸りになつた。

されど、當時は、一宮が在しますを、頼もしいものに、世間でも、内々は、追従もし、畏れて居た中に、今の帝と、東宮とさし續き御誕生になつた爲、悉皆失望なされ、月頃御病氣も出て、寛弘七年正月二十九日にお薨れになつた、お年が三十七とか。

御死病ではあつたれど、甚い御苦みなどはなかつた。御暖の病かなど、お思ひの中に、重體となられたので、修法しやうとて、僧を召されたけれども、参る者もない。據なく、道雅の君を使ひ

一ノ宮
御妹定子の出
なればなり。
道雅
伊周公の長男
なり。

にして、入道殿に申しなされた。
 深更の事として、人も寝静まつて居たれば、直にお格子の傍に寄つて案内の咳をなさると、「誰ぞ」とお問ひになるので、名告つて「斯様々の事て修法を初めやうと致しますが、来てくれる阿闍梨が御座りませぬ、どうぞお遣はしを。」とお頼みになる。「それは嘸お困りの事、少しも存じませんでした。どういふ御容體か、誰も参らぬなどは誠に怠慢な。」と非常にお驚きになり、「誰々が不参致しました。」と悉しくお尋ねの上、何某阿闍梨をお差上げになつた。
 併し、末世には、人の魂も弱くなつたものか、お恨みになつたといふ評判だけで、元方、大納言のやうな事はなかつた。一つには、入道殿の御威光がやはりお強いので御座りませう。年寄の癖で、申過しました。」

と、居座居を直して此のあたりは小聲である。

世源大納言重光卿の女の腹に、女君二人、男君三人在したが、このお子達は皆御成人で、女君は、后にと心がけて大切にお育てになつたれど、種々御失意ばかりの中に御病氣さへ重くなつたので、此姫君達を据並べて、泣く泣く仰せた。

「年來神佛を非常に大切にしたられば何事も其の中にはと頼みに致したれど、斯う情ない死方をさへするやうになつた悲しさ。斯うと知つたら、貴方が先に死ぬやう祈りませうものを、死んだ跡では、どんな舉動や世過をなされやうと、悲しく、耻くて。」と言續けてお泣きになり、「見ともないことをなされたら、あの世からも恨みますぞ。」と母北方にも、泣く泣くお遺言なされた。

重光卿
 代明親王の御
 子。

名簿
 我名を記した
 る札なり今の
 名刺に同じ。
 亮
 大夫の次、次
 官なり。
 坊官
 東宮坊の官
 人。
 中將
 從三位になる
 と中將に昇進
 さるゝ例な
 り。
 明尊僧正
 道風の孫な
 り。
 大和宣旨
 大和守義忠の
 妻となりし故
 にかく呼ばれ
 しなり。

其お子達、大姫君は高松殿のお腹の東宮大夫殿の北方で、大勢の子達を生み續けてお出になる。これは宜しい。

もう一人は、大宮に帥殿、御方として、立派な女房でお出になるのが、思ひの外なお身上であらうとお氣の毒である。

男君は、松君として、お生れ立ちから祖父大臣が非常に大切になされて、お呼びになる度に贈物をなされ、乳母をも御饗應なされた。この頃は、三位で在すらしい。此君を、父大臣が、「必ず必ず、我が死後に、良からぬ事をすな。身が捨て兼ねるとして、立派でもない名簿を持歩いて、「昔に引かへ彼の様は、」と人に譏らせ、我顔を汚して呉れるな。世の中に住み難たらば、出家するばかり。」と泣く泣くお言聞かせになつたが、當代が東宮の時の亮におなりになり、春宮、亮道雅の君とて非常に寵遇がなつたれば、誠に宜い。と拜見したのに、どうした事か、御即位の際に、藏人、頭にもならねず、坊官の功に、三位にだけなり、中將すら兼ねずにお了ひになつたのが、誠に意外なお氣の毒な事て御座りました。

此君は、故師、中納言惟仲の女にお住みになり、男一人お生ませになつたのが、法師で、明尊僧正の處にお出でである。其女君は、どうお考へになつてか、密り逃出して、今の皇后宮に大和宣旨とて御奉公なされる。

して見ると、年來の妻子として、當にはなりませぬ。却て他人よりは馬鹿にして、失禮な事を致したもので、いや真に、萬一私共の女房がそんな真似でも致しませうものなら、白髪を剃りこぼち、鼻をもちき落してやります。高貴の方といふものは、御身分がら名の惜しさに、どうもな

さり得ぬので御座りませう。それも彼方が、實際、そんな馬鹿らしい方で、もある事か、分別のある確とした方で御座りましたものを。

當帝が御誕生あつた七夜に、和歌の序を代作(俊賢の代作)なされました。併し、却て御無心の事であつた。一體ならば御不參なざるべきをお出かけになつた事とて、多勢の人が眼をつけ、何と思つて何しにと熟と見詰められてお出になつたのは氣の利かぬ事では御座りませぬか。

所が、この入道殿は、格別無愛想にもなされず、お待遇しになつた効には、腹立しさを反對に、めてたく祝つてお書きになつた。

されば當座の御面目はお立派でその爲、人々のお感じも變りました。

此帥殿(伊周)の同腹に、十七歳で中納言になつたりして、當時我儘者の評判を取つた、隆家といふお人がある。童名は阿古君。

兄殿(伊周)の傍杖で、出雲權守になつて、但馬に居なされたが、帥殿が歸洛の時、同じく上洛して、舊の中納言になり、其中兵部卿などにおなりになつた。それも、非常に確乎(しつちや)した方といふ評判であつた。

多勢の人達の下役で、何につけても不快ながら出仕してお出になる中、御賀茂詣に御供の時、餘り後の方の氣の毒さに、殿が御同車させなされて、細々とお咄の序に、「あの時の事(伊周左遷のこと)」は、自分が奏聞して圖らつた事のやうに、世間で評判致す。貴方もさうお思ひになつたらう。併し決して然うもなかつたので、宣旨以外に、一言でも自分の言葉など挟んだら、此御社に平氣で斯う參られませうか。天道も御覽なさらう。」と沁々と仰せたのが、「却て、眼の向け處なく辛かつた。」と後に申された。

それも、この殿なればこそ、仰せられたれ、帥殿には、さうまで言譯はなさるまゝ。この中納言殿は、さういふ據ない時の外は、昔のやうに人交際もなされなんだ處、入道殿が、土御門殿で遊宴の折、斯ういふ事に、あの權中納言が缺けてはやはり淋しい。とて態々お手紙してお待ちになる中に、酒杯が幾度か廻り、皆酔つて、直衣の紐を引解き寛ろいてお出になる處へ、この中納言がお出になりたので、何れも、所體繕ひ居住居を直しなどなされると、殿が、「先づ御紐をお解きなされ。皆が、窮屈がりますから。」と仰せられたれども、「は」と言つた儘、躊躇してお出になるのを、公信卿が、後から解き申さうとして傍へお寄りになつた時に、中納言殿は、氣色を變へて、「隆家は不運な事こそあれ、足下等にこんな事をされる身ではない。」と荒らかに申されたので、一同顔色が變つた中に、今の民部卿殿は、空仰いで座中を見廻しながら、「さあ〜えらい事になる。」と思つてお出になると、入道殿は、笑つて、「今日はさういふ御座興はやめて、さ、私が解いて差上げませう。」と立寄つて、さらりとお解きになりたれば、「それならば得心が出来まする。」と御機嫌が直つて、差措いた盃を取上げ、幾盞も傾け、常にも増して打解けお遊びになつた御様子の中々立派で、殿も非常に御款待なされた。

さて式部卿、宮の御事ばかりを、それでもお待ちになる中、一條院が御重體の際、奉伺なされた處、「彼の事は遂に爲得なんだ。」と仰せられた時には、「惨い人非人め。と口まで出かゝつた。」と仰せられたが、退出後、御自分の家の椽に腰をかけたまま、手をハタ〜と拍つて口惜しがりなされた。

公信卿
恒徳公爲光の
男、當時右衛門
督なり。

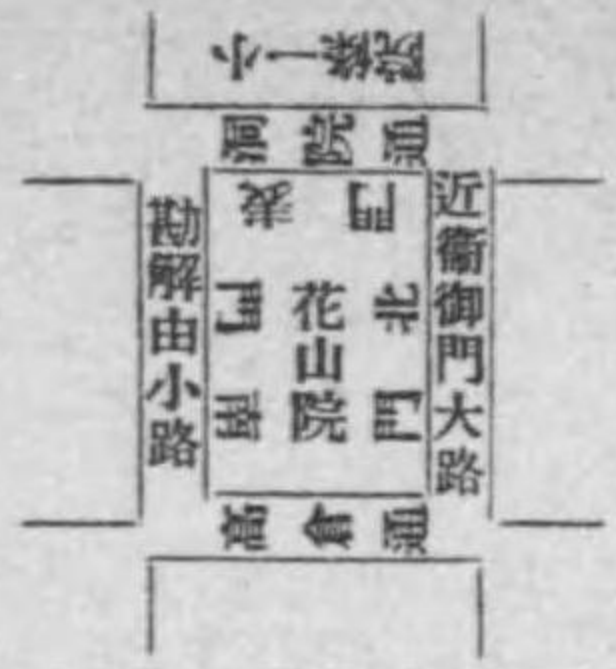
思ひになり。其故か、世間からも然程には侮られず、御門には、年中、馬や車の三つや四つ絶えたる事なくどうかすると、路一杯群集の時もあつた。

この御子は、男君は、今の藏人少將良頼の君と、右中辨經輔の君と、又式部丞などである。眞に、まだ得意で御全盛の頃、花山院と争論をなされたといふ、奇妙な咄がある。「いくら和主でもわが門は通行出来まい。」と仰せられた處が、「渡られない事が御座りませうか。」とて、何日と日をお定めになつた。

頑丈な輪の車に、逸物の牛をかけ、御烏帽子や直衣のさらびやかなのに、葡萄染の織物の御指貫を少し外に出して、祭の歸りの若公達が紫野を馳けさせる時のやうに、括りの處は地を曳くほどに、踏板に永々と踏しだき、簾をぐつと捲き上げ、雑色五六十人ほどに、ありだけの聲して引限なしに先をお追はせになる。

勿論院の方でも、無上に強く逞い法師達と、大童子中童子を合せて七八十人ほどに、大きな石や、五六尺もある杖などを持たせて、北南の御門から築地づら一面と、小一條の前から洞院の裏表まで、ぎつしり列ばせ、御門の中にも、武士や若い僧の力の強いばかりが、軍装束で居る。さういふ武張つた事のみを好む上下の者どもの、今日こそと得意な様子は、成程どんなに勇ましく御座りましたらう。

併し、双方とも、石と杖だけで、眞個の弓矢は用意なさらぬ。中納言殿は、御車を一時ばかり立て、勘解由小路から北に、御門の近所までは進めなされたれど、どうしても通れずお引返しになるのを、傍眼もふらず目成つめて居た院方の勢達、



御持の處なり。

一度にどつと笑ひ出した聲が非常で、あんな見物はなく、「王威は實に大したもの、とうとう通れずに了つた、つまらぬ事を言出して、大耻をかいだ。」とお笑ひになつた。

院はお勝ちになつたのを、非常に御満悦のさまも、眞個の戦か何ぞのやうで可笑い。

此帥殿は従兄弟の君達が大勢在したれど、頼親の内藏頭、周頼の木工頭など、いつた人は、片端からお薨りになり、今はたゞ、兵部大輔周家の君だけが微かに、小一條院の御子達の御乳母の夫で、院への御奉公を出精してお出になるのは、餘り勿體ない。

又、井出少將好親と言はれた方は、出家なされたさうで、故關白殿は、御性質が非常に美しく上品でお出になつたのに、御子孫はつまらなく御壽命も短くて、今の入道一品宮と、この帥中納言殿だけが、残つてお出になるらしい。

一、右大臣道兼

この大臣は、即、大入道殿の御三男で、粟田殿と申上げた。

長徳元年乙未五月二日、關白の宣旨をお蒙りになり、同月八日薨去、お年が三十五とか、大臣の位で五年、關白と申してから僅た七日御在世であつた。

御一族の中にまるで、政權をお握りにならぬも多けれど、斯う夢のやうな儂い關白も御座りませう。

出雲守相如ぬしの家に一寸お出になつた時しも、關白の宣旨が下つたといふは、主人の喜びの様をお察しなされ。狭くてお請の作法も出来かぬるとて、お立ちになつた其足で、御禮にも參内なされた。

とあり。
大藏卿
量なり。

檜あじろ
の薄板を編
み張つてし
なみ。

十列の馬
賀茂の祭
人の舞列
に馬場を
争する事
走る車側
の如しと
より見れ
の如しと
より見れ
の如しと
より見れ
の如しと

藤三位
九條師輔
の女
御嫡妻
の孫

女、父は遠量。

東三條院の
土殿の御
宮殿に
土殿に
宮殿に
土殿に
宮殿に
土殿に
宮殿に

は、男も女も大勢おありになり、大姫君には、三條院の三番目の御子敦平、中務宮を、この二月かに御簀にお取りになつて、非常にお睦じい。其他にも姫君がお四人ある。又粟田殿の三郎、前頭中將兼綱の君、その方が、祭の日に新調なされた車が、非常にしやれて居ました。

檜網代といふものを張つて、的の形に彩色した車の、横縁を弓形に仕立て、堅の縁を矢の形になされたのがおもしろい。

和泉式部の君が、歌をお詠みになつた。

「十列の馬ならねども君乗れば、

車も的に見ゆるものかな。」

さて、よい御趣向と見えられたれども、人の口は種々面倒なもので、賀茂、明神の御矢を負ひなさつたと評判した爲、工合悪くておやめになつた。

この方が頭をお奪られになつたのは、非常にお氣の毒な事であつた。格別不思議な御出世でもなく、當然なのに、父の粟田殿が頭の時、花山院を嫌してお下し申し、兄の左衛門督が、頭の時には小一條院を嫌してお下し申された爲、帝や東宮のお傍に近附かせられぬ御一族といふ評判が立つた。誠に妙な事、誰殿も御承知ながら、男君達は斯やうである。

女君は、故一條院の御乳母の藤三位(十五歳入内、三十九歳薨去)に出来たのが、すぐ其御代の暗戸屋の女御と申し、後に、かの大藏卿通任の君の北方でおなくなりになつた。佛神に祈願の効に、御嫡妻に姓なされたのは、今の中宮に、二條殿御方とて奉仕してお出

になる。

父殿は、御女子を欲しがつて願をお立てなされたれど、御顔も見ずに薨去になつた。さやうなあはれな事も、世には御座りませぬ。

北方は、殿の薨後、堀川殿の御子の左大臣(光)の北方で幾年か在了したといふ事、其北方は、九條殿の御子大藏卿の御女である。

されば、此の粟田殿の御有様は、殊の外につまらなかつた。それといふが、誠に薄情な酷い性質で、人に甚く恐がられなかつたればか、御子孫が繁昌されなんだ。

この方は、父大臣の忌には土殿などにも居られず、暑いからとて、御簾なども悉皆上げて、御念誦もなされず、然るべき人達を呼集めて後撰や古今を廣げ興言し遊んで、些しもお嘆きにならなんだ。

其理由は、花山院をば自分こそ嫌して位を退かせ申したのなれば、關白をお譲りになつてもよいのに、御兄に譲りなされたとの、御不平であつた。世間外れの事をなされたもので、其他にも、種々悪い評判も御座りましたが、御兄道綱卿と、御弟道長卿とのお二人は、法の如くに、孝行なされたといふ事である。

目錄

太政大臣 道長

○鎌足 — 不比等 — 房前 — 眞楯 — 内麿

冬嗣 — 長良 — 基經 — 忠平 — 師輔

兼家 — 道長

卷七

官中
太政官
中納言
の事
なり
ともい
へり
内覽
の内
々にて
見る
こと

かの宮々
影の
威子、
嬪子、
嬪子、

男皇子二人
寛弘五年九月
十一日
誕生
同日
影の
威子、
嬪子、
嬪子、
誕生
同日
影の
威子、
嬪子、
嬪子、
誕生
同日
影の
威子、
嬪子、
嬪子、

准三宮
年官
年爵を
給
り
せら
る
な

御封の人家
より出する
調、庸を得ら
るなり
御移轉
長和四年
あり、四年
の此時、新
成し、た
べし、た
るなる
落成

した、瓜を貰ふには、器を用意してかゝれ、の諺の如くて。それが又其儘にもなく、淺ましく夢のやうに、程なく薨去なされた。誠に思ひもかけぬ凶變で御座ります。

この今の入道殿は、當時、大納言中宮大夫と申し、御立身の行末遙な御三十歳で、四月二十七日大將におなりになり、五月十一日の官中雜事、内覽の關白の宣旨をお蒙りになつたのが御榮花の初めて、同年六月十九日、右大臣に御昇進、長徳二年七月二十日更に左大臣になられ、其以後、關白職は他家に移らず、將來も此儘で御座りませう。この殿は、北の方がお二人在した。

かの宮々の御母上は、土御門左大臣雅信の御娘、其大臣は、亭子、帝の御子、一品式部卿宮敦實親王の御子で、御母は在大臣時平の御女である。其大臣の御娘を北政府と申して、其御腹に女君四人、男君お二人ある。其御有様は、當代の事なれば、誰殿も御存じて御座りませうなれども、引續き、御咄致さうと思ふ。

第一の女君は、一條院の長保元年十一月一日、御年が十二歳で女御に參られ、翌長保二年かのえね二月二十五日、十三歳で立后、中宮と申した中に、男皇子二人お産み續け申されたのが、今の帝と、東宮とである。されば御二人の御母后、太皇太后宮と申て、天下第一の御母で在す。

直ぐ次の女君は、尙侍とて、三條院が東宮の頃お上りになり、御即位後、長和元年二月十四日立后、中宮と申した、御年が十九、さて翌長和二年癸丑七月二十六日、女親王をお産みになつた。其みこは、三四才の頃一品となられて、今に在します。

當時は、この御母宮を皇太后と申して、枇杷殿にお住居あり、一品宮は、三宮に準じて、千戸の御封をお得になる爲此宮には、后がお二方在すと同じである。

又次の女君、これも尙侍で、當帝が十一歳で寛仁二年、戊午の正月三日御元服があつた、その三月七日に入内(十九)同年四月十八日女御の宣旨を下された。當日は焼亡ありし内裏の新築が落成して、御移轉の日であつた。

同年七月二十九日立后の宣旨が下り、お使は源民部卿俊賢の君がなされた。中宮大夫の故であらう。當代の中宮で、内裏にお住居になる。

又、次の女君はそれも尙侍、十五歳の時、今の東宮がお十三歳の治安元年二月一日お上りになり、東宮の女御で、登花殿にお出になる。

殿が入道後の事とて、今の關白殿の御女としてお上げになつた。今年は、十九歳、姪じられて七月八月にお當りになる。入道殿の御運強さを拜見するに、間違なく御男子で御座りませう。」と扇を高く遣つて居る様子がおもしろう。

世御女子達の御有様は斯様である。

さて、男君お二人は、今の關白左大臣頼通、大臣と申して、思ひの儘に天下を攻めてお出になる。御年が二十六で、内大臣攝政になられ、帝御成人の故を以て、寛仁三年十二月二十二日攝政の辭表を奉られ、同日關白の宣旨を賜はられた。

昔は、二十餘才で納言位になされるのを、非常な事に申したれども、當世は斯様である。是を宇治殿と申す、童名は鶴君。

もうお一人は、唯今の内大臣で左大將を兼ね、教通の大臣と申し、世に第二の貴い方で在す。これは二條殿、御童名せや君。

革堂
行願寺の事と
あり。

されば、御乳母は「あんなお心算で仰せられた事を、何しに其通りにして上げた事ぞ。常ならぬ異な仰せと、心づかなんだ愚かさ。」と泣騒いだのが、道理にも哀れてある。

今年も御法衣などお上げになるらしいのを、乳母が聞付けると其儘、悶絶して、死人のやうて居るので、「お聞きになつたら、氣の毒さに御道心が亂れませう。今更詮方ない、佛になられたら、御自身の爲にも後世安樂でおはしまさう。それが何よりなれば、」と人々が慰めても、「佛におなりなさるゝが嬉しくもなし。後世を助かりませうとも、此の今の悲さには代へられませぬ。殿も上も大勢お在りなればよろし。悲いのは唯私一人」とて伏轉び泣いた。成程尤もな事で、道心のない人は、後世の事まで考へはしませぬ。

高松殿の御夢に、御髪の方を半分剥落されたとお覽になつたのが、この豫報であつたと思合せになり夢知らせの變るやうに、祈禱などをさせるのであつたものと仰せなされた。

革堂で、御髪を下し、其夜山へお上りになつた處が、賀茂川を渡つた時、非常に冷たかつたれば少し悲しかつた、此後は斯るべき身と覺悟はしながらと仰せた。

今の右衛門督が、疾くから、「此方は出家の相があまりになる。」とて、御娘（今の中宮權太夫殿の上）に御文を、お上げになつた時、「あんな相のある人を、どうして。」とお許しなく、其後この太夫殿をば駕となされた。

正月に、内裏から退出の途に、その右衛門督が、馬頭が車の物見から顔をおさし出しになつたのを見て、「悉皆出家の期が近づいた。何歳ぞ。」と申されたれば頭中將が、「十九になられませう。」とお答へになると、「では、今歳なされやう。」と申されたが、出家の事をお聞きになり、「さればよ。」と申された。相人ではなけれど、良い方はお分りになるものである。

入道殿は、「據ない、餘り嘆くと知らせまい。折角の道心が亂れても爲にならぬ。法師子がなかつたれば、幼年の中にも爲やうかと思つたのを、嫌がつたからやめたのである。」とて、唯、普通法師にする作法通りにおもてなしになつた。

受戒には、殿がお上りになりたれば、多勢が我も我もとお供に參られ、非常にお立派であつた。威儀僧には、勝れた人ばかり、お選みになり、御前驅に有識僧綱などの、立派な人が、附いて、山の所司、殿の御隨身達が、大げさに人拂をし戒壇にお上りの時は、入道殿は得堪へず、御覽にならなかつたので、御本人は、不本意にもお氣の毒にもお思ひになつた。

座主が、手輿に乗り、白蓋をさへせてお上りになつた時こそ、天晴天台座主の戒和尚（戒を授くる僧）の隨一やと見えた。と、私の鄰家に居ります者が、其時丁度參り合せ拜見して咄しました。

東宮、大夫殿、中宮權大夫殿などが、大納言におなりになつた時は、有繫に耳留めてお聞きになつたらうと思ひましたが、其大饗の時の様子や、新に大納言の座二つ増された事などお咄申上げても、一向無頓着に念誦なされて、「さやうの事は唯暫時の事。」と仰せたのが、勝れてお立派であつたと、通任の君が仰せられた。

この殿の御子達、男女合せて十二人一人もお缺けにならぬ。

男女とも、御身分こそは、親御の御心の儘なれ。御心ばえや人がらなどまで、露ばかり人に點打たれる處なく、何れも有識にお立派なもの、偏に入道殿の御運の此上なくお強いので御座りませう。

威儀僧の先達となつて威儀をつくり。くらふ僧なり。有識なる僧綱（僧正、僧都、律師）なり。所司、役僧。天台座主、同宗一切の事を統ぶるなり。僧正を以て任ぜらる。手輿の手にて腰の人の手にしてむもの高か。さ腰に至る肩。白蓋の傘なり。白張の傘なり。

られし事な
上陽人
玄宗の時の後
三人の后
影子、妍子、
威子。
居易、
唐人白居易、
樂天と號した
る人なり。
轉輪聖王
嚴なる委容の
殿なるべし。

の儘である。

この殿が、何事かの折、なされた、詩や和歌などは、居易や赤人、人丸、躬恒、貫之でも、言ひ得まいと思はれるのがあつた。

春日の行幸は、前の一條院の御時から初まりました。當代は御幼稚なれど、恒例の行事となりたれば、大宮が、御輿にお附添て行幸になつた。類ひない結構な御事で、帝の御祖父で、供奉なされる殿の御様子御容貌が、又、普通では張合なけれど大勢集まつた田舎世界の民百姓こそは、確と拜見致しましたらう、唯もう、轉輪聖王などは斯うもあらうと、光るやうに美しくお立派な爲、佛を拜見したやうに、額に手を當て、拜み騒いだも道理で御座ります。大宮が、赤色の御扇でお顔を隠して、お肩のあたりなどは少し見えた。

それほどの方は、些との透影も塞いで、秘藏し申すなれど、さう／＼も出来ぬ上、今日は、お立派な御様子も少しは拜見させてもなど思召しましたらう。殿も宮も、十二分に御満足の事と推量られます。殿が、大宮に、

道「そのかみや祈りあさけん春日野の、

同じ道にも尋ねゆくかな。昔から代々祈つておいた験であらう、かやうに家族同伴して参詣できるのは)

御返し、

宮「くもりなき世の光りにや春日野の、

おなじ道にも尋ねゆくらん。(聖代の御威光に)

かう贈答あつたも、誠に御道理と結構に承りました、中にも、大宮が、

宮「三笠山さしてぞ來つる石の上、

ふるき行幸の跡を尋ねて。(そのかみ(昔)に地名をかけ、ふるき(行幸は一條帝の遊はされしをいへり)

私共の、とても思ひ及ばぬ事で、上代にもこれほどの秀歌は御座りませぬ。さし當り、春日明神がお詠じになつた事と存じます。今日斯のお立派な行幸あれとて、先の一條院の御代から、大入道殿が、奏請し置かれたのでも御座りませう。一體御幸福な方が、和歌の道のお下手なのは、引立たぬ御事であるに、この殿は何かの折、必、斯様な秀歌をお詠みになつて、其事をおもてはやしなされた。先年、北、政所の御賀には

「ありなれし契りは絶えて今更に、

心けがしに千代といふらん。(今までの語りひは別として又新に)

又かの一品宮が御出生の時、御産養を大宮がなされた夜の御歌は、お聞になりましたか、それを面白くて、普通人の思ひよりさうもない體で、

「をと宮のうぶやしなひをあね宮の、

し給ふ見るぞうれしかりける。」

とか承りましたとて、愉快さうに莞爾と笑つた。世「四條大納言が、あの通り萬事にお勝れになるを、大入道殿が、「どうして彼か、羨しい。我が子供は影を踏めさうにもない。」と仰せた時、中關白殿、粟田殿などは、「眞にさう思召さう、」と極り惡氣に黙して在す處に、この入道殿は、未だ御若年で、「影は踏まぬが、面は屹度踏む。」と仰せたが、實際其通りになられて、内大臣殿をすら、近々とは御對面もお許しにならぬ。あゝいふ方は、早

御賀のなり、
六十三年十月
治安三賀六十
算十三日あり

to

くから御膳も太く、御加護も強いので御座りませう。
花山院の御時、五月下つ閣(下句)の頃、五月雨には過ぎて、非常に大降の夜、帝が御退屈と見え殿上にお出になつて御遊宴あり、何れもお咄など申上げる中、昔の妖怪咄などに移つて往つた處が、

「非常に嫌な夜かな斯う大勢居てすら氣味悪いのに況て、人離れた所などはどうあらう。さやうの處に一人往けるか。」と御仰せになると誰も誰も「とても」とばかり仰するを入道殿は「何方でも参りませう。」とお答へになりたれば、さういふ事に興味をお持ちになる帝として、「さらば往け。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ。」とお命じになりたので、他の方々は、悪い事を申上げたと後悔なされ、又、命ぜられた方々は、御顔色が變つて、つまらぬ事と思す處に、入道殿は、些さる御氣色なく、「自身の供は連れますまい、この陣の吉上でも、瀧口でも、一人、昭慶門まで送れ。」とお命じ下さりませ。それ以内へは、單獨で入りませう」と仰すと「證據なくては。」との御仰せに成程とて、御手箱にあつた小刀をさしてお立ちになつたので、外のお二人も、苦み苦みお出になつた。
子四つと奏して、斯う御相談がまとまる中に、丑にもなりましたらう。

「道隆は右衛門の陣から出よ、道長は承明門から。」とそれまでお指圖なるので、其通りお出になると、中關白殿は、右衛門陣まで辛抱してお出になつた處、宴の松原のあたりに、何だか分らぬ聲などが聞えたので、堪らなくなつてお歸りになつた。
粟田殿は、露臺の外まで顔へへお出になると、仁壽殿の東面の砌のあたりに、軒と同じ丈の人

豊樂院の西、天
八名會の所、ふ
馬場殿といふ
仁壽殿、九間
南殿北、よし
四面のよし
塗籠
物品を入れお
く納戸やうの
所なり
大極殿、八
省殿とも最上
大殿ともい
ふ、豊樂院の
東にあり
吉上
今の上
なりの類
瀧口
武士
今の子
今午の
二半の
時なり
丑は同

が居るやうに見えたので、夢中になつて、命あつての沙汰と、何れもお歸りになつたれば、御扇を叩いてお笑ひになつた處が、入道殿は、何時までも御沙汰がないので御心配になる中、一向平氣でお歸りになつた。

どうしたかと尋ねになると、悠然とお刀に削り屑を添てお差上げになるので、「何ぞ」と仰せられると、「唯歸りましては、證據が御座りますまいと、高御座の南面の柱削り取りました。」と平氣なお顔で申されるので、呆れてお了ひになつた。

外のお二人は、怖かつた御氣色がまだ常に復らぬ處に、斯うした御舉動を帝初め大騒ぎして御感賞あるを、羨くてかどうしてか、物も言はずにお出になる。

それでもどうかとお疑はしさに、翌早朝藏人に、「削り屑を持参し見よ。」とお命じなり、仰せのごとく押付けて見ると、相違なかつた。今に、きつかりと跡があつて、見る人が驚嘆致しまする。

故女院の御修法に、飯室權僧正がお出になつた時、其伴僧で、相人があつたのを、女房達が呼んで相て貰つた序に、「内大臣殿は、どう在します。」とさくと、

「非常におえらい、天下を執る相がおありになる。併し、中宮大夫殿には叶ひませぬ。」といふ。
又、粟田殿はと問ひ申すと、

「それも、非常におえらい。大臣の相がおありになる。併し、中宮大夫殿には叶ひませぬ。」といふ。

又、權大納言殿を問ひ申すと、

飯室權僧正
九條權僧正
男、尋常忍
なり

『それも此上なくおえらい、雷の相があまりになる、』と申したれば、

『雷とは、どういふのか。』と尋ねた處、

『一旦は、非常に高けれど、末遂げかぬるので、されば御子孫はどうあらうか、分りませぬ。中宮大夫殿こそ、きりもなく果もなくお立派でお出になる。』

と他の人を問ひ申す度に、此入道殿をきつと引出しては褒め申す。

『どれほどで、お出になれば、さう度毎に申される。』とさくと、

『第一の相には、虎子如渡澤山峯。』とある詞に、些とも違はれねば申します。此譬論は、虎の子が嶮岨な山の頂きを渡るやうなと申す事で、御容貌がお立派で、譬へば、毘沙門の勢ひを拜見するやうて在します。御相が既に其如くなれば、誰よりもお偉いので。』

と申した。非常な名人かな。悉皆中つて居る。

帥の大臣は、大臣まですら／＼とおなりになつた事を、初めよしと申たので御座りませう。雷は落ちても再び上るものを、星が殞ちて石となつたのにも比へませうか、それこそ再び上る事は無い。全く、此入道殿は、何事かの儀式の折の御容貌などいつまでも忘れぬものに人が申しまする。

中にも、三條院の御時の、賀茂の行幸の日、雪が非常に降つたので、御單衣の袖を引出し、御扇を高くおかさしになつた上に又、眞白に降りかゝるを、『あゝひどい。』とてお拂ひになつた様は誠に美しかつた。

師殿の南の院
六條の北のよ

上の御衣は黒く、御單衣は紅の花やかな、此の二つの上には、雪の色が引立つて言ひやうもなくお美しかつた。しかも高名の何とかいふ非常な悍馬をお騎り静めになつたので三條院も、當日の事をいつもお咄しになつて、御病中にまで、『賀茂の行幸の日の雪は忘れぬ。』と仰せたのは大したものである。

斯ほどに世間の光りて在す殿でも、一年ほど御不満の事があつた。天道も氣の毒にお思ひになりましたらう。併し、些か退けてはお出にならず。朝廷の公事作法は、時限を違へず屹とお勤めになり、私にも、少しも遠慮はなされなかつた。

師殿の南の院で、人々を集めて弓をなされた時、この殿がお出になりたれば、思ひもかけず不思議な事と、中關白殿が非常に喜び饗應なされて、下蔭で在したれど、先に立て申し、最初に射させなされた處、帥殿の矢數が二本負けた。

關白殿や、又御前の人達も、『もう二度なされ。』とて勝負をお延しになるので、御不快ながら、『さらばお延べなされ。』とて、又お射なさる際に、『道長の門から、帝、后がお立ちになるならば、此矢中れ。』と仰せられると、中り方もあらうに、眞たゞ中に中つた。

次に、帥殿がお射なさると非常に氣怯れがして、お手も顫へた故か、的の傍へも寄らず、飛んでもない處に中つた爲、關白殿は蒼青になられた。

又、入道殿がお射なさると『攝政關白するならば、此矢中れ。』と申されると、初めと同じく、的が破れるほど中つた。

馳走しもてはやしなされた興もさめて、氣まづくなり、父大臣は、帥殿に、『射る事はない、止せ止

ずつの上世は知らず、私が物心づいてから、一年に三人も關白の變るなど、いふ事は御座りませんでしたものを。

又近代では、太政大臣貞信公、小野宮殿の外は十年と政權をお執りになつた事なければ、この入道殿も如何と思ひ申したに似ぬ是程の御高運に、御兄達は壓されて程もなくお亡りになつたので御座りませう。

それも皆、當然あるべき御事を、世間はさうしたものに考へになる人の爲に、御有様を又少し述べませう。

開闢以來、神代七代は措いて、神武天皇より三十七代に當られる孝徳天皇の御代からこそは、種々の大臣がお定まりになりました。

但し、この御時、中臣の鎌子と申すが、初めて内大臣におなりになつた。其大臣は、常陸國でお生れになり、三十九代天智天皇の御時に、姓を藤原とお改めになつた。

されば、藤氏の先祖は、鎌足の大臣である。

其御子孫から、多くの帝、后、大臣、公卿さまざま御出世あつた。

但し、この鎌足の大臣を、天智天皇は、非常に御寵遇あり、御自身の女御一人を、この大臣にお譲りになつた。其女御は、御妊娠中であつたので、帝の御心にこの女御の振める子が男ならば、大臣の子とし女ならば、わが子としやう」と思召し、お約束なされた處、御男でありたれば、内大臣の御子となされた。

この大臣は、素より、男子一人女子一人をお持ちなされたが、このお腹に引續き、女二人、男二

女二人
氷上ノ娘

五百重の姫、天智天皇の御孫、藤原不比等、中臣の意美麻呂、大織冠をば、何うして淡海公と申さう。

彼の繁樹が言ふには、

大織冠をば、何うして淡海公と申さう。(不比等を淡海公といひしなり)大織冠は、大臣の位で二十五年、御年が

五十六でなくなりになつた。

貴方のお咄は、天の川をかき流すやうに淀みなけれど、時々さういふ間違が交つて居る。併し、誰も眞似は出来まい、佛在世當時の淨名居士と思はれまするわい。」といへば、

昔、唐土に孔子と申す有識の言葉に、千慮に一失と御座りますから、世繼は百歳の上を多く越し、二百歳近くで、こんな不問語りを申すのは昔の人にも負けまいと存じまする。」

繁「さやう、誠に申しやうも御座りませぬ。」
とて涙を拭いて感じ入つて居る。全く賞める詞もなし。

世御子、左大臣不比等、大臣は實は天智天皇の御子なれども、鎌足大臣の二男となつてお出になる、お名からして普通ではなかつた、比び等しからずといふ御文字なので、この不比等、大臣の御男子はお四人あつた。

淨名居士の世の時、大善智識の事なり。

高野の女帝なり
孝天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す
高野天皇と稱す

太郎は、武智麻呂と申して左大臣までおなりになり、二郎は房前として宰相までなされた。御娘は二人、一人は聖武天皇の御母后皇太夫人と申し、今一人は聖武天皇の后で光明皇后と申し御女子をお生みになつた。其お子を御父が帝にお据ゑ申され、高野の女帝として、二度御即位になつた。

御男子四人は四家と名づけて、皆門をお分けになり、太郎左大臣武智麻呂を南家、二郎房前を北家、宇合式部卿を式家、麻呂を京家、是を藤氏の四家とお名づけになり、この四家から、國王、大臣、公卿が多く出ても榮えになつた。

中にも、北家の子孫が今に御繁昌なされる。其御系圖を又ずつと申すべきで、絶えた方は措きませう、自然其御子孫が我々のやうな微賤の者になつたので御座りませうから。

さて彼の鎌足、大臣の御續きは、今の關白殿まで十三代かになられます。次第をお聽きなされ、藤氏と申せば、唯藤原と合點して、始めから悉皆の事を知つて居るお人はなか／＼ない。

一、内大臣鎌足の大臣、藤原の姓を賜はられての年の十月十六日に薨去、御年五十六、大臣の位で二十五年、此姓が出来ると聞いて、紀氏の人が、藤の懸つた木は枯れるものである、今に紀氏はなくならうと申されたが、實際其通りになつた。

一、鎌足大臣の御次郎、左大臣正一位不比等、大臣御年六十二、養老四年八月三日薨去、大臣の位で十三年、贈太政大臣になされた。元明、元正、二代の大臣で在した。

一、不比等、大臣の御次郎房前、大臣、宰相で二十年、大炊天皇の御時、天平寶字四年庚子八月七日贈太政大臣になされ、元正聖武御二代の宰相で、天平九年四月十七日薨去。

一、房前、大臣の四男眞楯、大納言、稱徳天皇の御時天平神護二年三月十六日薨去、御年五十三、公卿で六年。

一、眞楯、大納言の御二郎、右大臣從二位左近衛大將内麻呂、大臣、御年五十七、公卿で二十年、大臣の位で七年、贈從一位左大臣、桓武平城御二代に御奉仕なされた。

一、内麻呂大臣の三郎冬嗣、大臣は、左大臣まで御昇進、後には贈太政大臣。この殿よりの事は、順次に種々お咄申したれば又は申しませぬ。鎌足の御時代からお廣がりになつた御子孫が段々おなくなりになつて、此冬嗣の大臣時分は一向心細く源氏の大任公卿ばかりが多勢在した處に、この大臣が、南圓堂を建て、丈六の不空羅索觀音をお据ゑになつた。

一、冬嗣の御太郎長良、中納言は、贈太政大臣までなされた。

一、長良大臣の御三郎基經、大臣は、太政大臣まで、

一、基經大臣の御四郎忠平、大臣は、太政大臣まで、

一、忠平大臣の御二郎師輔、大臣は、右大臣まで、

一、師輔大臣の御三郎兼家、大臣は、太政大臣まで、

一、兼家大臣の御五郎道長、大臣は、太政大臣までおなりになつた。

一、道長、大臣の御太郎は、即唯今の關白左大臣賴通、大臣である。

此殿にお子のなかつた御不足の處にあの若君のお生れになつたのは大した御事で、併も御母の御身分が中々貴い、故左兵衛督は人がらこそ左程にはなかつたれ、村上の皇子爲平親王の御子なれば、御自身の高貴に添へて、又斯う世を響かす御孫が出来たのは、薨後なれども結構な御事であ

南圓堂
奈其興福寺の
角の堂に觀音
を安置しあり
一丈六尺なり
不空羅索觀音
とは生蓮華大
海に妙法蓮華
の經を講す
心を以て衆生
を救ふに上
魚を提り岸
に送るなり
かの手經に説
かたりと説
御母の御妻、
父は左兵衛督

聖武天皇と申す、御名は宮子娘みやこのいらつめ。今一方は、御甥聖武天皇にお上げになり、立后、是を光明皇后と申す。このお腹の御女を女帝となされ、高野の女帝と申し、四十六代にお當りになる處、一旦御退位の後御一代を隔て、復び御四十八代となられた。聖武天皇の御母后を太皇太后宮宮子娘と申したれば、不比等高野天皇大臣の御女一人ながらお后であつた。さればこの大臣は、太皇太后宮、と光明皇后の御父、聖武天皇並に高野女帝の御祖父で在す。

- 一、贈太政大臣冬嗣の大臣は、皇太后順子の御父、文徳天皇の御祖父。
- 一、太政大臣良房の大臣は、皇太后宮明子の御父、清和天皇の御祖父。
- 一、贈太政大臣長良の大臣は、皇太后宮高子の御父、陽成天皇の御祖父。
- 一、贈太政大臣總繼フツツクの大臣は、贈皇后宮澤子の御父、光孝天皇の御祖父。
- 一、内大臣高藤の大臣は、皇太后宮胤子の御父、醍醐天皇の御祖父。
- 一、太政大臣基經の大臣は、皇后穩子の御父、朱雀天皇並に村上帝の御祖父。
- 一、右大臣師輔の大臣は、皇后宮安子の御父、冷泉院並に圓融院の御祖父。
- 一、太政大臣伊尹コレマキの大臣は、贈皇后宮懷子の御父、花山院の御祖父。
- 一、太政大臣兼家の大臣は、皇太后宮詮子並に贈皇后宮超子の御父、一條院並に三條院の御祖父。
- 一、太政大臣道長後醍醐の大臣は、太皇太后宮彰子上東、皇后宮新、中宮威、東宮の御息所娘の御父、當代並に東宮の御祖父であられる。多くの御中に、御四人並べ据ゑて御覽になるのはこの入道殿の外には無い。關白左大臣教通、内大臣教通、大納言二人、中納言の御親長家でお出になる。何とお聞きなされ、日本の國には、唯一無二の御方で居させられる。

大織冠御腦の疾尼、維摩經の問疾、品評ありし、其後淡海公興、行されたり。三會、興福寺、勝會、藥師殿、御齋會、大極殿、師を三會の講、を一名終りたる、な出ひ論議と、なるなり、人初、め擬講に補、れ已講と、僧正、僧都、律師をいふ、男女の親王、新田部親王、出、但馬皇女、(水上娘の出)、圓融院の御、母、一條院の御、超子の同母、姉、冷泉院の御、女、御三條院の

先づは御造營になつた御堂の有様にしても、鎌足大臣の多武峯、不比等高野天皇大臣の山階寺、基經大臣の極樂寺、忠平大臣の法性寺、九條殿の楞嚴院、聖武天皇の東大寺も、佛だけは大きなれど、この無量壽院には比べられませぬ。況て他の寺々は申すまでもない。大安寺は、都率天トツランの一院を、天竺の祇園精舎ギエンシヤウヤに象つて造られた。元來唐土西明寺は祇園精舎を象りあるので、其の寺の一院を象つて、我國の帝はこの大安寺をお造らせになつたなれど、唯今はやはりこの無量壽院の方がお立派である。奈良の澤山な寺々でも、これに相當するはない。先づは恒徳公太政大の法住寺は偉い建築なれど、この無量壽院には叶はず、難波の天王寺は、聖徳太子が御心を籠めての御造立なれど、やはり無量壽院が勝つて居る。奈良の七大寺十五大寺何れと見較べても、まだこの無量壽院の方が非常にお立派で、極樂淨土がこの世に出現したやうである。それほどに御造立あつたに拜見しても、必、非常な御立願があつた事と思はれます。淨明寺は、東三條殿が任大臣の御悦びに、木幡コバタに御社參の時、入道殿が御供なされて御覽になると、多勢の御先祖の御骨が在すのに、鐘の音を御聴きにならぬのは誠に情ない、自分が立身したらば、三昧堂を建てやう、と御心中に御計畫なされたお承りました。昔もさういふ事が澤山御座ります中に、極樂寺と法性寺のお咄がえらい事で御座ります。大人でもさうお心づくは奇特であるに、何時とは確と承りませぬが、たしか深草ニホの御代、芹川に行幸の御時、昭宣公が童わらは殿てんじやう上じやうて供奉なされた。帝が琴をなされたに、この琴弾く人は、特に爪をお作らせになるもので、御持參になつた處、途中お落しになり御當惑ながら、新にお作らせになる時間もない處に、然るべき御因縁と見え、大

極樂寺、山城國紀伊郡、なる寶塔寺、その趾とぞ、法性寺、鴨河原の東に、舊跡ありとぞ。楞嚴院、横川にあり高、光少將こしやうに、住されしよ、大安寺、大和國高市郡、蘇我馬子、大百濟寺、本、名、法住寺、法性寺の北。七大寺、東大寺、元興、大安、藥師、西大、法隆寺、七寺なり。十五大寺、新藥師、京法華、不退、弘法、超勝、弘福、宗鏡、八寺を前、寺に加へて、ふとぞ。木幡、藤氏祖、郡、藤氏祖、の墓地なり。

三昧堂
念佛堂なり。

人にも仰せられず、御幼稚のこの君に、『探して参れ。』とお命じになりたれば、御馬を引返しなから、折角の御命なれど何處をあてと探しやうもない。けれど見出し得ぬは非常に辛い、探し出した處には一伽藍を建てやう、と立願なされてお尋ね當てになつた場所に出來たのが極樂寺で御座ります。御幼年の御心にどうしてお思ひ付きになつた事ぞ。然るべき因縁で御爪も落ち、幼年の方に御命じにもなつたと見えます。

さて權貴におなりになり、御堂建立にお出ましになる御車に、貞信公は極めて幼稚で御同車なされ、今の法性寺の前をお通りになると、父御に、『爰が堂所に宜しい、爰にお建てなされ。』と申されたので、どう見て言ふのであらう。とお顔をさし出し御覽になると、成程非常に宜さうなれば、子供の眼にどうして分つたらう、然るべき宿縁であらうと思召して、『成程宜さうな、和子堂を建てよ、私は斯様々々の事に因りそこに建てる。』と仰せられて、さて後に法性寺は出來ました。さて九條殿の飯室の事は如何。

横川の大僧正のところにお出の御供には、私も参り、拜見いたしました。やはり此入道殿のが、誰殿にも勝れて居ります。又餘程天地に承けられてお出と見え、此殿が何事かなされる折には、どんな大風でも霖雨でも、二三日前から全然晴れて土が乾きます。されば、或は聖德太子の御再誕とも、或は弘法大師が佛法興隆の爲めに再生なされたとも申すげに御座ります。

權者が、か
神佛が、か
人に人間の姿に
現はれたるこ

飯室にあり、
横川の傍に
江州の法性寺
師別院にて
師の建立ありし
なり。

と。御靈會 祇園
祭。賀茂の祭な
り。村の行事
年番の類な
り。

彌勒
將來久遠劫於
此國界成佛
云々とありて
盡くる事なき
樂き世といふ
なるべし。

て、野山の草木さへ刈るまでは置かず取つて了ひましたが、此頃は仕丁が食物を持参して、人の物を奪ひ取る事は全然無くなりました。それに、里の宿老や村の行事が廻つて、火祭りの何のとも入費を集め歩く事も聞えず、是ほど安穩泰平な時は御座りますまいと思へば、私等の茅屋まで、帯紐を解き門すら鎖めず長くなつて寝られるお蔭に、年も若く命も延びました。先づは、北野や賀茂川原に作つた豆、さしげ、瓜、茄子といふもの、以前には皆奪られて困りましたを、唯今は人の奪らぬばかりか、馬牛すら食べませねば、番も付けずやり放しにして御座ります。誠に楽しい彌勒の世界にも逢ひました事かな。

唯今は、此御堂の夫を頻りに召す事を、人が嘆しますが、お聞にはなりませぬか。世「さやうく、二三日おきに召される。併しながら結構な事で、其理由は、極樂淨土が新に出現なさる爲と思へば、力さへあれば、参つて御奉公しずには置けぬ譯で、將來は、どうかこの御堂の草木ともなりたいと存じます。されば道理の分る人は、望んで参るべきで、私などはよい折からと一度も缺かず参ります。

参つて見れば又よい事づくめて、飯も酒も幾度か下され、土産の菓子までお恵みになり、始終参る者には衣裳までもお宛行ひになる。されば下人達も非常によく働き、勇んで集るらしう御座ります。

それは道理で、處が、私は又、非常に頼もしい事を考へて居ります。それは、是まではお蔭と、まだ破れ衣裳の悲惨も見ず、飯や、酒の不足な眼にも會ひませぬが、萬一此後さういふ難義に出會ひましたら、紙三枚を購めまする、其理由は入道殿下の御前に申文を奉るので、

其文言は、「故太政大臣貞信公殿下の御時の小舎人童て御座りますが、甚く年老つて困つて居ります。閣下の君は、其御子孫で在しませば、同じく御主人と頼み仰ぎます。何か少し下さりませ。」と申したらば、少々の物は下さらぬ事はあるまい、と定にして、藏に納つてある同様に思ひます。」

と言へば、世繼が、

世「眞に然様で、私も貧乏致したらば、御寺に願文を差上げやうと、女房と咄しまする。」

繁「さても、嬉しくお眼に懸れました。永年畜め置いた袋の口をあけて、残らず打まけたやうに晴々致しました。」

世「所て、かの大評判の無量壽院には幾度御参詣なされた。」

繁「私は、大御堂の供養の年の會の日は、(治安二年七月十四日)人を悉皆お拂はせになると聞いて、三日前の試樂の時参りました。」

世「私は度々参りました。供養の日のお立派な御様子は申しやうも御座りませぬ。翌日は御佛など近々と拜みたい、お片付にならぬ前にと参りました所が、丁度、宮達が諸堂をお拜みになる處で、斯ういふ際に遭ふ爲に、今まで生きたのであらうと有がたく存じました。

物覺えてから、彼ほどの事はまだ拜見致しませぬ。

御「鞆」に四所同車されましたぞや。口許に、大宮と皇太后宮が御袖だけを少しお出しになつてあるに、枇杷殿の御髪が地に長く曳かれて居たのは、誠に見物で御座りました。奥の方には、中宮尙侍の殿がお乗りになり、唯ち身體だけ車で、御衣は悉皆出て、それも地まで引かれて在しました。

地車は上邊を天
といひ下邊を
地といふ

一品宮も御同車と見え、御衣などは、何某さんが持つて、御車の後に從いて居た。單衣だけを召して居られたので御座りませう。

御車は、公卿達の手に曳かれて、御後には關白殿を初め、御親族の殿ばら、其他の上達部殿上人が御直衣で歩み續きなされた。何とまあ大層もない事で、中宮權大夫殿だけが、強い御物忌で列にお洩れになり、非常に御残念がられた。

中宮の御装束は權大夫殿がなされて、非常にお美しいらしう御座りました。「供養の日、申上げる事があつて、御座所に五所お並びの處を拜見したが、中宮の御衣が眼立つたのは、自分で爲た故か。」と大夫殿が仰せられた。斯様に口ばかり偉さうに並べてまするが、下藤の悲しさには、何方の御衣も時經つと色などはとんと忘れて了ひました。併し中宮のは、格別お立派な故か、下は紅の薄物の御襲かに、御表衣はよくも覺えませぬが、萩の織物の三重襲の御唐衣に、秋の野を刺繍にしたのが、繪ではないかと眼を見張られました。

他の宮々のも、御親族の殿ばらが調じてお差上げになりましたのよし、大宮は、二重織物(錦など)を幾つもお襲ねになり、皇太后后は悉皆唐装束(唐物の類にて調)かんの殿のは、殿からも差上げになりました。他の方々のも、繪などお書かせになつたと聞かれ急に摺箔などなされたれば、入道殿が御覽じて、「よい呪師の装束よ。」とお笑ひになつた。

殿は、早くから、御堂御堂を開けてお待受けなされた。

南大門の邊から拜見してすら、笑ましく思はれますのに、御堂の渡殿の間から一品宮の辨の乳母と、やはりその宮の大輔の乳母、中將の乳母の三人が、恐れ多さにぶる／＼と顔えながら今日は

萩の織物の云
しあるなり
二重織物
地に文ある綾
上別文を以
重れたるを
ふ

御丈のよし。

長押を云々、上り下り、昔の建物は、高きと、今、板敷の、今、寺院の、建、今、同、と

斯様の處なれば、然程嚴重にお咎めもあるまいと宮達のお車から下りてお續かせになるを拜見して居ると、申すまでもなけれど何れもお立派で居させられる。

大宮の御髪は、御衣の裾に御餘りになり、中宮は御丈より少し長からうか、御扇を御顔近くさし隠してお出になり。

皇太后宮は、御衣の裾より一尺ほど長いのが、扇のやうに廣がつて居る。

かんの殿は、御丈より七八寸長く御扇を少しお顔より放してさしかくし居られる。一品宮は、殿が「なぜそんな所にお出になる、お立ちなされ。」と長押を下り上りなされる御手を取つてお引きになる。

餘り余り幾人もお立派さに、眼が廻りさうな氣が致しました。御乳母達は露はならず扇で顔をひき塞いだりして繕ふ中、殿のお眼に留つて、一大事、御奉公の縁の切れる日と三人ながら生きた心地もせず恐入つて居ると、

「宮達を拜見したか、どう在した。此の老法師の娘達にしてはお悪くもあるまい。我をも馬鹿にすなよ。」と莞爾と仰せかけて、甚く極り悪がらせもせず、お通りになつたので、蘇生つた心地に嬉しさは言ひやうもなく、互ひに見合せると、仰山化粧した顔も、草の葉のやうに青くも、又赤くも、何れも汗びつしよりになつて居ました。

他の人でも、覗き見などは不都合の事に制されるを、御娘達の御立派を御満足の餘り、お赦しになつたのであらうと思ふも、横着のやうなと三人が咄合つて居ました。

斯様の事どもを拜見するにつけ、愈々現世の榮花ばかり望まれ染着の心が餘計に起つて、道心の

今、各、萬歳の意、し、つ、る、なる、べ

中尊、阿彌陀、佛なり。

大宮入道、正、三、九、日、出、家、年、三、十、九、日、出、法、名、清、淨、覺、と、あり、同日、院、號、と

着きさうにも御座りませぬ處が、河内國のさる處に住む何某聖人は、常は庵から外へも出られねど、後世の苦の恐ろしさに、法成寺へ參詣なされて、「關白殿が御參詣になり、雜人どもを大げさにお拂はせになるので、是こそは第一の御方であらうと思ふ中に、入道殿の御前にお出になると、やはり彼方がお上である。其中に行幸があつて、亂聲し、入道殿の御待受の様、御輿が入らせられると、あらゆる殿達の恐れ畏まれる御様子はどうでも國王こそ日本第一の御事と思ふ中、又、お下りになつて、阿彌陀堂の中尊の御前に跪き御拜なされるを拜見しては、愈々佛の御上はないものと、此會の庭に非常に結縁申し、道心が熟しました。」と申された。傍に居られたので御座りませう、此方ではとんと存じませんでした。

世間で申すには、大宮が入道なされ、太上天皇の御位となられたらば、女院と申されるのであらう、そしたら、此御寺に戒壇を垂れ、御受戒あるべきなれば、世の中の尼どもが參つて受け申せやうと喜んで居ります。私の女房などもそれを傳へ承つて、自分もせめて其時に白髪の裾を削ぎ捨てたい、止めて下さるなと相談致しますので、「何しに止めやう、併しさうなつたら、若い女房を探して宛行つて呉れる事。」と申しましたらば眞氣になつて、「姪が一人あるから、今から相談して置ませう。まるで他人では、悲い事もあらう。」と申すので、「飛んでもない事、身内にもせよ他人にもせよ、自分に深切もない者は不要ぬ、」と咄合ひまするが、徐々衣や袈裟などの支度に、良い絹を一二疋購めました。」など言つて、有繫に何となく悲しげなは、女房に逃げられる心細さにかと見えた。

世さて、今年(万曆三年)は天變が頻りに起り、縁起の悪い妖言など聞えまする。

かんの殿、後
皇子の御生、
冷泉の御生、
朱雀の御生、
後五日に生、
九去、御年十
院の女御、左
小一、堀川、大
り、顯光、其女
臣、顯光、其女
延終の怨靈に
始終の怨靈に
萬壽二年七月
九日卒。

皇太后宮
内親王の
御母なり。

かんの殿が御懷妊になり、又院の女御殿が始終御煩ひの中にも、今年となつては引切なしに御惡いなど、恐ろしく承はります。いやもう種々考へまするとやはり、昔と變りませぬ」など見合つて、

繁「いやほんに斯様に種々結構な事も哀しい事も澤山見聞致しまするが、やはり大切な御主人にお訣れ申した時ほど悲しかつた事は御座りませぬ。八月十日餘りて御座りましたから、折さへ哀れで、誠に時しもあれ(時しもあれ秋や人の別るべき、あるを見るだに戀しきものな。)と存じられました。」

とて鼻を度々かみ非常に悲しげな様が、當時どれほど嘆いた事と察しられる。

繁「一日片時生きて世に居さうな氣も致しませんでしたけれども、是まで居りましたのは、益々廣ごり御繁昌なされるのを拜見して、喜び申さう爲て御座りました。」

さて、翌年五月二十四日、冷泉院が御誕生になり、嬉しくも、残念にも、あれほど種々な心地の致した事は御座りませんでした。」

といふと、世繼も、さやうくと非常に楽しさうに、

世「朱雀院、村上(基經の女、穉子の母)が、打續き御誕生になつたなどは、又どうて御座ります。」などいふのも餘り恐ろしい。

世「さて又世繼が考へた事が御座ります。明日とも知れぬ身なれば申しませう。この一品宮の御運の床しさに、又命が惜まれまする。」

其理由は、御誕生前にえらい夢の告が御座りました。さう思ひますのは、故女院や故大宮などお妊まれになる前に見たのと同じなので、萬事推量られる御運勢で御座ります。それを皇太后、

宮に、どうかして申上げたいと存じますが、其宮のお傍の方に便りのない残念さに、この澤山のお人の中には、萬一御縁のある方も居られやうかとお咄申しますので、後々よく中つたと思ひ合せの事も御座りませう。」

と言つた時には、爰に居ると出て出かけたかつた。(作者)實際驚くやうな珍しい事ばかりを二人で咄合ふので、かの侍が、

侍「誠に面白いお咄を承りました、それにしても幾歳位からの事をお覚えて御座ります。それが承りたい。お咄下され。」

世「六七歳この方見聞致した事は悉皆覚えて居りますが、些細な事は證據なければ眞實にはなざるまい。九歳の時にあつた大事を申しませう。」

小松の帝が親王で在した時の御所は、誰殿も御存じて御座りませう、私の親の居りました所で、大炊の御門からは北、町尻からは西で御座りました。

されば御所の御近所、いつも参つては遊びました處が、誠に幽静で密やかで在しました。二月の三日、初午の上に甲午の最吉日として、例年よりも世間一體大騒ぎで稻荷詣を致しましたれば、父に従いて参詣致しました。何と申しても子供の事として、急な坂を登り草臥れ其日の中には歸られませぬので、父が世話をしつてやつて非常に懇親にして居る禰宜の大夫の家に寄つて一晩宿り、翌日歸りました處が、東洞院から上の方へ参ると、大炊御門から西の方に、人々がばた／＼と走つて往くので、不思議に思つて見ますと、自分の家のあたりに眞黒に人が立つて居ます。彌々驚いて、もし火事かと空を見ても煙もなし、さては大捕物かなど種々心配してまご／＼して居りました。

小松殿
光孝天皇
時康親
王と申され
りし御殿なれ

た處が、小野宮の邊で、上達部の御車や鞍置いた馬や、冠、袍など着た人々が見えましたれば、不思議に思つて、何事ぞ何事ぞと人毎に尋ねますると、式部卿宮が帝にお据りになると、大殿を初め、公卿一同小松殿に参上されたのであるとて、その告げた人が馳出して往つたことなど、よく覚えて居ります。

又たしか七歳の頃、元慶六年かて御座りました。式部卿の宮の御子で、侍従と申上げた寛平の天皇が、いつも狩がお好きで、霜月二十日過ぎ頃か、鷹狩に式部卿宮からお出かけになつたお供に、馳けついで参りました。

賀茂堤のさる所に、侍従殿が鷹をお使ひになり、非常に興に入つてお出になると、俄に霧立ち、其邊中真暗になつて東西も分らず、もう日が暮れたのかと、藪の中に仆れ臥してぶる／＼願えて居りましたのが、半時ほどで御座りましたらう。後に承りますと、賀茂明神が侍従殿に示現なされたといふ事だ御座りました。流布されてある事なれば、今更申しますまい、御存じて御座りませう。又むざと軽々しく申すべきでも御座りませぬば、

扱其後六年ほどしてから、賀茂の臨時祭は初められましたらう、御即位の年と覺えます。其日が酉の日で御座りましたから、其儘霜月の終のその日になされました。初めての東遊の歌、敏行、中將が、

『千早振賀茂の社の姫小松、

萬代までも色は變らじ。』

古今に入つて居ります。誰殿も御承知の事ながら、非常にお上手に詠まれましたものかな。今

に絶えず御子孫が御繁昌で、帝と申しても斯うばかりは在しませぬ。

八幡の臨時の祭は、朱雀院の御時から、この帝が御誕生後三年の間は、御住居の御殿の御格子を開けず、晝夜火を點し、御帳の中で三歳までお育て申上げられた。北野に怖れ申されて、天曆の帝の方は、然程にも御用心なされなかつた。非常なよい折に御誕生あつたもので、彼の院の御誕生なくば、藤氏の御繁榮もこれほどは御座りませぬ。さて御即位の後、將門の亂が出来て、其御願で、このお祭りをお初めになりましたよし。其東遊の歌は、貫之主で、

『松も生ひ又も苦むす石清水、

ゆく末遠く仕へつたらん。』

集にも入つて御座ります。

『御同様冗々しい事は省きますが、寛平延喜などの御讓位當時の御事は、誠に恐れ多く確と覺えて居りますから、又申します。

伊勢の君が、弘徽殿の壁にお書つけになつた歌をば、其頃のあはれな事に人が申しました。

『別るれどあひも思はぬ百敷を、

見ざらん事の何か悲き。』(相思ふ人もあらぬ百敷(大宮の枕詞)を見ないと(悲しい事はないと悲みの切なるをいへり。))

法皇の御返し、

『身一つのあらぬばかりをおしなべて、

行めぐりてもなどか見ざらん。』(我一人なきばかり他は變らぬも(のを其中には又必見よとなり。))

と言ふと、傍に居た一人が、「法皇が別るれどの歌をお書きになつたのを、延喜が後に御覽になり身

東遊記に用ふる
祭樂に一種
一閑舞に種
の安閑天作
御度舞に天
國有御舞に
遊女降りて
しふ曲にあ
ふ近衛のい
人の仕ふと
そるの例と
すまのつ

一人に集まりし
中の書ささま
おもしろし。

罪滅しにばよき
佛にもあしき
も執るといむ
あり。罪となり
又衆語にて精舎
野の行幸十二
月五日大原野
に鷹狩遣遙さ
りし事とあ

文月 七月
長月 九月

相撲の節は七月十六日、
の間に召仰あ、
衛方左の近
國々々使を
す相撲を召
取より廿六日
仁壽殿に主
御上南殿に
御王御參上
大將相撲の
なと相撲の
亂あり勝七
廿九日に又
とて相撲を
ぐりて御覽
九日の節は
と日と九日
に重陽の故
殿に御上南
王御出御の
道給は初め
韻給は初め
文を給は初
講を給は初
菊酒を給は

一つの歌を傍にお書きつけになつたとも承りますが、何方が眞實で御座りませう。」
驚、同じ帝ながら其御時代に生れ合つたものは、賤い民の家まで此上もなく仕合せな事で、大小寒の非常に雪の降り氷る夜など、諸國の民百姓はどれほどか寒からうと、御衣を夜の殿から御投出しになつて置かれたと承り及ぶもの、何れも自分等まで御愛憐を賜はつた身と、面目に思ひました。されば、其御時代に拜見した事は、何時までも忘れませぬ。

どなたもお聞きなされ、此座で申すは憚ある事なれど、半分は若い頃餘り身に染みて感じました罪滅しに、今日この伽藍で懺悔致さうとて御座りませぬ。
六條式部卿の宮と申したのは、延喜の帝の一腹の御兄弟で在します。

野の行幸遊された時、此宮も御供なされましたが、京中では御遲參、桂の里でお退つきになりたれば、帝が御輿を留めて先にお立たせになると、何某といつた犬飼が、犬の前足を兩方とも肩に引越して、深い川の瀬を渡つたのを子供の人達が輿がらぬはなく、帝も面白さうに御覽になつた。扱、山口をお入りになつた時に、白せうといつた御鷹が、鳥をとりながら御輿の鳳の上に乗飛んで参りました。

日はそろ／＼山の端に入方て光りが非常に強く、山の紅葉は錦を張つたやうであるのに、鷹の色は眞白く、雉は紺青のやうな羽を擴げて、其上に、雪が少し散つくなど折から取集めてあれ位美しい事はないと身に染みしました。どんなに罪になりましたらう」と、はた／＼と爪弾きをして居る。世一體、延喜の帝は、何時も莞爾して在した。其理由は、餘り眞面目にして居ると人が物を申難い打解けた様で居れば言ひ宜い、されば大小の事を聴く爲に斯うして居ると御仰せになつた。道理

な御事で、怖らしい顔には一寸物が言ひ難いもので御座りませぬ。

さて、自分はどうか文月と長月には死にたくない。角力の節や九月の節が止るのが残念なればと仰せられたれど、九日にお崩御になつて、九日の節はそれ以來止つた。

其日左衛門陣の前で御鷹どもを放たれたのはあはれてあつた。急には飛退きもせなんだ。公忠の辨を、何事にも御役に立つ大切なものになされた中にも、鷹の方はとりわけ好む道とてお上手であつた。

毎日御政事後は、何處ぞに立たせて置いた馬に召し、すぐと中山へお出になつた。官廳の辨の室の壁には、其方の鷹の尿がまたついて居りませう。

久世の鳥、交野の鳥の味ひは食べ分けなされた。大方よい加減に申されるのであらう、試して見やうとて、密に二所の鳥を料理交ぜ、印をつけてさる人が差上げた處が、些お間違へにならず、是は久世の、これは交野のであるとお食べ分けになつた。

處がさやうな鷹飼の専門が殿上に伺候して居るのは見苦いと、延喜に奏するお人がありたれど、公事を疎かにして狩ばかりしたらこそ悪からう、一度も政事を怠らず、朝廷の御用を一切勤めて、其後に何をしやうと少しも差支へないと宣らせた。

いや又大した事は、やはり其帝の大井河の行幸の時、富小路の御息所の御腹の皇子が七歳でお舞ひになつた、彼れほどの見物はなく萬人涙含まぬは御座りませぬでした。餘りに光るやうな御容貌を、山神が欲しがつてかお取り申した。

其御時代には、全く非常に面白い事が澤山御座りました。併し、残らずは申盡せませぬば、肝腎

兵衛内侍の御
信濃守隆信な
り。

玄上相の琵琶
に黒き象を書
きある故玄象
といふとも、
禁中の重器な
り。
承明門前の
紫宸殿の前の
正門なり。

臨時客の初めに攝
關の以下にて攝
關以下の上達
臣を招引して
御遊宴あるこ
と。
嘉辰令月
朗詠集に嘉辰
令月歌無極

萬歳千秋樂未
央とあるをい
ふ。

六條一品式部
卿字多天皇の御
子、母は皇太后
后宮胤子贈太
政大臣高藤公
の女、天曆四
年二月御出家
法名覺眞。

放生會
毎年八月十五
日の祭日に生
類を放つこと

兼輔の中納言や、衆樹の宰相は、御子孫さへ絶え果てしひ、私の方も、又、今風の若い女などは相手にしても、呉れますまいから、斯やうに長生同志出會はずば、どれほどか困りませう。』と嬉しげに笑ふ。成程と可笑くもあり、現實の事とは思はれぬ。

世「ほんに今日連れて参りましたらば、も些と女房達のお耳に留まるお咄でも致しませうもの、残念で御座りました。兵衛内侍の御親を頼りにして居りましたれば、内侍の處へは時々参るらう御座りました。』

「それは誰。」と訊く人がある。

世「あの高名の琵琶弾きで御座ります。相撲の節に玄上を頂いて、御前で青海波を致しました、非常に名譽な事で。博雅三位ですら容易にはお弾きにならなんだ器とて、承明門まで聞えましたよ、私は左の樂屋で承りました。斯様に華々しい風流な事も天曆の御時まで、冷泉院の御代となつてはもう昏れ塞つたやうで世の衰へたのも其頃から御座ります。小野宮殿も一の人(白關)とは申し乍ら、帝と御他人なれば、若くて花やかな御伯父達(伊尹、兼通などにて御母后安子の兄なり)にお任せになり、帝は無論萬事お任せ置きになつた。

噫と存じられましたのは、村上が御崩御の翌年、小野宮に多勢お集りになり、臨時客ほどではなけれど小宴をお催しあり、嘉辰令月などお誦しになる序に、一條左大臣殿や六條殿などが拍子をとりに、庭田をお唄ひになつた時、『噫、先帝が在しますば。』と御笏も措いて、主人の殿を初め言忌もなさらず上の御衣どもの袖をお濡しになつた、御道理である、何事でもよくお分りになる方のあるのは張合があり、ないのは誠につまらぬもので、今日斯様なお咄をするも、貴方がお分り

になるからで、まだくも些とお咄申したう。』

と賞められて、侍も極り悪げに、されど嬉しさうである。

世「藤原氏の御事ばかり申したから、源氏の御事も申しませう、かの一條殿六條殿たちは六條一品式部卿、宮の御子たちで、寛平の御孫なれば當然の事ながら性質がお立派で在したので、何方をも御祖父の御寵愛あつた中に、就中六條殿をお愛しになつた。

兄殿は餘り生真面目で、政事以外の事は多く申されず、寛ぎのない方であつた。

弟殿は、大事には無才で在したれど、にこやかに愛嬌があつて、優しい方は勝つてお出になつたからであるとなが評判しました。修理の大夫で居なされた時、出家して仁和寺に在した父宮をお訪ねの往復の中、一度は東の大宮からお上りになつて一條から西の方へお出になり、一度は西の大宮からお下りになつて二條から東の方などお通りになつては、内裏を御覽じ、破損の個所あれば修理なされた。非常に行届いた御心ばえてある。

又一條殿は「親王の子に生れて、世間の様子も分らぬまゝ、然るべき公事の折は人先に参内し、式が済んでも一番後に退出したりして見習つた。」と仰せられた。

八幡の放生會には御馬を奉納されましたが、御使などにも淨衣を給はせ、御自身も潔齋なされたりした故か、御前近い木に山鳩が必ず居て、御馬を引出す時に飛立つので、張合がよいと喜び興がりなされた。潔白なお心で信仰なされたから、大菩薩が納受されたので御座りませう。

ある年早魃の御祈禱に、東三條殿が御賀茂詣なされた時は、此一條殿もお供なされた。大臣ともある方がさる例はなけれど、天下の大事なればとて御他出を見合せ、東三條殿が御殿の前を御通

冬の御扇、夏は扇なり、中啓に紙の張りあるなり。新に生ふる風俗歌の中、荒田といふ曲なり。外記の隅、太政官の隅、の局の隅、なるとみ草、稻なり。

行あるを待受け共に御參詣なされた。

一生御珠数はお持ちにならず、只毎日南無八幡大菩薩、南無金峯山金剛藏王、南無大般若波羅密多心經と、冬の御扇の骨を敷へて一百八遍づゝお念じになり、それ以外の御勤行はなされなかつた。四條、太后宮(遜子、圓)に人がお咄申したれば、「やさしからぬ御本尊かな。」と仰せになつた。

「新に生ふる」を普通の歌のやうに歌ひ直されたのも此殿で、一條院の御時の臨時の祭に、御前の儀式が濟んで、上達部達打つれ物見にお出になると、外記の隅の處をお通りになりつゝ、態とならず獨語のやうにお唄ひになつたのが一入結構であつた。『とみ草の花手に摘み入れて宮へ参らむ。』といふ處が普通とは違ふやうに承りましたが、遠くて老人の聞違へかと存じましたけれど、彼の按察大納言殿も、「殿上人であつたから、遠くてよくは聞かんだが、違ひ方が新奇に思はれたのは歌ひ人がよい爲か、もう一度聞きたかつたれどそれきりになつたのが今に残念である」と仰せられました。

此大臣達の御弟の大納言はお立派な方であつた、一體七條宮の御子達は皆お立派で在した。

御法師子は、廣澤の僧正と勸修寺の僧正とのお二人、總じて其時代はどの道にも偉い方がお出になりました。」

と言へば、侍、

侍「當今もさやうのお方のない事はない。」といふ。

世「今の四人の大納言達の御事で御座りませう。齊信、公任、行成、俊賢あの方々は格別である。」

さて又種々拜見致した中にも、花山院の御時代に、石清水の臨時祭を、圓融院の御覽になつた位

面白い事は御座りませんでした。

其時の藏人頭は、今の小野宮右大臣殿であつた。帝の御前の式が濟んだ後、院が御退屈であらうと奉伺すると、藏人と判官代の外、然るべき人もお傍に居ず、非常にお淋しさうで、よい折から來て呉れたと御悦びの様を除りのお氣の毒さに、「祭りを御覽なませ。」など御氣色を伺はれると、「不意にはどうあらう。」と仰せになる。『私が居りますから、殿上に伺候し居りますものだけで宜しう御座りませう。』とお勧め申上げなされた。

御厩の御馬ども召して、殿上に居た者だけ御前驅し、頭中將は束帶のまゝお出になつた。

堀川院なればお近間である。物見車どもが二條大宮の辻に立塞り見物する處に、布衣や衣冠の人が御前驅で厳めしく人を拂ひ來るを、誰ぞと何れも不審がる中、頭中將が下襲の裾を挟んで移鞍置いた馬でも供なさるので、院の御出ましと分り、車も歩人も慌てゝ非常な騒ぎである。

二條よりは少し北寄り、冷泉院の築土前に御車を立て、御前驅どもは下りて並ひ候ふ處に内裏からつぎ／＼物見に出られる上達部達が、往來の騒がしさを何ぞとお問はせになると、「院のお出まし。』といふ。豈夫とお疑ひになりつゝ、頭中將も御供と聞いて、ては實際の事と車から飛下り皆在した。

大臣二人は左右の御車の胴に、添つてお立ちになつた、東三條殿と一條左大臣殿とで、納言以下は轅の左右に、殿上人は御車の後や轅の方に侍されて、却つて極つた作法よりもお立派であつた。

堀川院、兼通の家なり、皇の御住所と上り、條の南、堀川の西のよ、平文移鞍は殿上人乗用、黒移鞍は隨身乗用といへり。

納言以下、宰相までの人。